

Cosmic Philosophy & UFOs



GAP JAPAN
NEWSLETTER
季刊日本GAP機関誌

宇宙哲学とUFO

イエスの復活の謎と意外な紀元前999年

イエスの聖骸布の謎

旧約と新約に記された不可解な現象を解く

聖書とUFO

19世紀末人類史の予備知識

宇宙と愛について

静岡県で発生した驚くべきUFO現象

円盤につきまとわれた日

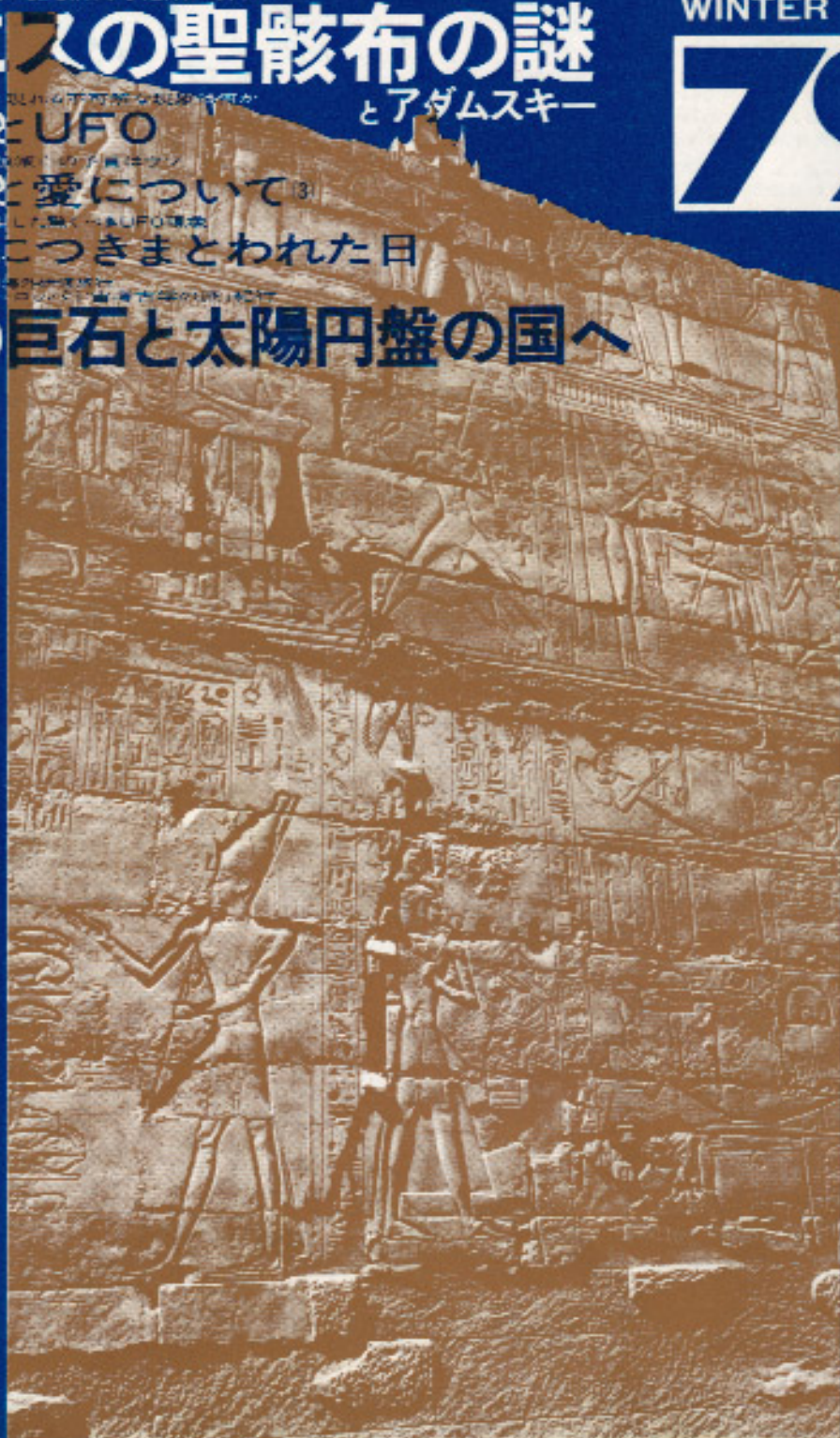
日本GAP第4回調査報告書

UFOブームの謎とUFOの正体

謎の巨石と太陽円盤の国へ

WINTER 1982

79

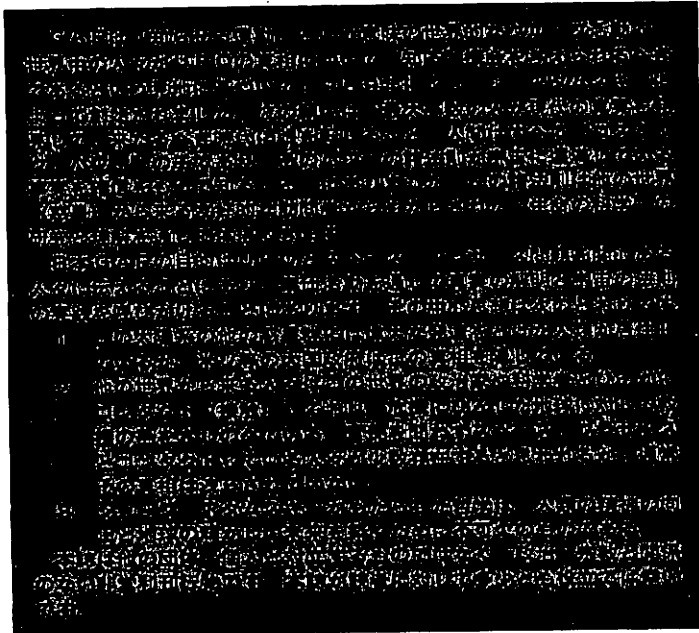


〈巻頭言〉アマと真実	1
イエスの聖骸布の謎とアダムスキー	久保田八郎 2
〈さらば空飛ぶ円盤(7)〉	
聖書とUFO	G.アダムスキー 8
宇宙と愛について(3)	12
円盤につきまといわれた日	16
謎の巨石と太陽円盤の国へ	久保田八郎 20
「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」に参加して	参加者有志 31
「沖縄支部大会と南国の旅」に参加して(2)	参加者一同 34
〈報告〉旭川・札幌合同支部大会／東海地区 大会／青森支部大会／大阪支部大会	36
読者の声「コスミック・ポスト」	40
〈予告〉今年度地方支部大会予告(その4)	41
〈予告〉ニューズトラビダ大自然の旅	43
日本GAP全国月例研究会案内	44

■表紙写真はエジプト・ルクソール・カルナック神殿の列柱室の南壁に刻まれたレリーフ。ラムセス2世とヒッタイト帝国とのカダシュの戦いにおける勝利の図の一部分。両国の平和条約を示すものとして名高い。(編者撮影)



GAPとは



★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

コーラは人体に有害だという噂が巷間に流布している。かなりのインテリ層がこれを大まじめに信じており、学者が分析した結果と思ひ込んで、まるで毒物であるかのごとく忌み嫌う人もある。

一八八六年米ジョージア州アトランタでジョン・ベンバートン博士により開発されて以来この百年間世界中に普及し、現在百四十五カ国で販売され、一日に二億五千万杯（一杯は八オンス。約二三七cc）も飲まれているというコーラが有害だという根拠は全くないのに、だれかが流すまことしやかなデマを一般人は嚥呑みにしているらしい。

コーラに含まれている原料の炭酸水、糖類、カラメル、酸味料、天然カフェイン、香料などは他の食品にもさらに含まれているもので、しかもコーラのそれはとるにたらぬ微量であり、カフェインのごときはコーヒーの四分の一、紅茶の五分の一にすぎない。また魚の骨をコーラにつけておくと溶けるという現象により、コーラを毒薬のごとくに考える人もあるが、これはリン酸、クエン酸などの酸味料を含む他の清涼飲料すべてや果汁にすら見られる脱灰現象といわれるものである。しかし人体にこの現象はあてはまらない。食物や飲料が生きた人間の骨に直接接触することはあり得ないからだ。普通サイズのコーラ一本（一九〇cc）に含まれるリンの量は中位のトマト一個のそれと同量で、豚肉一〇〇gに含まれる二〇〇mgのリンの約七分の一の三〇mgにすぎない。（以上はコーラメーカーC社の資料による）

ここではコーラの宣伝をやっているのではないし、コーラメーカーとは一切関係はない。一般大衆がいかにデマを信じやすいかの例としてあげたのである。産業界の情報宣伝合戦はすさまじいもので、コーラに限らず悪質なデマ流し屋の毒牙にかかった食品や製品は他にもあるし、逆に危険な物質を含む食品を無害であるかのごとく宣伝して人体に悪影響を及ぼす例もある。

アダムスキーがひどいデマのために甚大な被害をこうむったことは本誌に連載中の「さらば空飛ぶ円盤」第八章（本誌77号）に詳述してあるが、一方、デマに

〈巻頭言〉

デマと真実



惑わされることなく彼の体験の真実性を信じてその支持活動を続けた少数の人が世界に存在する。ここで注目すべき事はデマに振り回される大衆に同調するか否かは知識や教養よりもむしろ個人の内部からわき起こる印象または衝動によるという事である。かつて空気よりも重い物は空中を飛ぶことはできないと忠告した学者に対抗して、学識の低いライト兄弟は強烈な衝動のもとに飛行機を発明した。「俗説に惑わされずに自己の信念に従ってやれ」という印象や衝動がある人だけに起こるとするのは神秘的でさえ

あるけれども（宇宙哲学的に言えばこれがおおむね過去世からのカルマによることが多い）、とにかく一個人の限定された狭い知識で事物の真相を見抜くのは容易ではない。だから学識教養あると思われの人がコーラを有害だと信じ込んだりするのだ。

アダムスキーの体験を否定する人の根拠は主として米ソの惑星探査機の報告結果にあるらしい。太陽系の地球以外の惑星に人間は存在しないことが判明したと思っている人が多いけれども、実際にはそのような否定説を公式に発表した政府や科学機関はまだないという事実を忘れてはならない。金星は人間が住むにはあまりにも高温すぎるというのの一部の科学者が打ち出した説であつて、米ソ両政府の公式見解ではないにもかかわらず、これが決定的事実であるかのごとく大衆は信じている、と思われるのである。

米ソ両政府がデマを流しているのか？
 ノウ、彼らは真相を隠しているにすぎない。一昨年アメリカでUFO研究者から聞いたところによると、アメリカ政府の要人たちは太陽系の別な惑星に偉大な進歩をげた人類が存在することを知って知り抜いているのだが、現状ではどうすることもできず、黙秘しているのだということだった。

政府というものは自國の權益を擁護しなければならぬ。そのために國家機密が生じるのは当然だ。膨大な國費をかけて軍事目的で月や別な惑星の探査を実施した結果、得られた重大な知識を簡単に洩らすかどうかは自明の理である。しか

も利権を追求してやまぬ各國政府の権謀術数が渦巻くこの惑星のことだ。何がどうなっているのかわかったものではない。しかしアダムスキーの体験の真実性を立証する物的証拠がある。それは彼が撮影した円盤や母船と同じタイプのUFOが、彼の没後十七年も経過した今日、依然として世界各地で目撃され撮影されてきたという事実だ。しかもアダムスキーのことを知らぬ人までがこのような体験を報告しているのである。これは何を物語るのか。この重大なミステリアスな事実を無視していまだにアダムスキーの円盤や母船の写真を捏造だと称し、詐欺師呼ばわりする一部のUFO研究者はこの現象をどのように説明できるといえるのか。

コンピュータでUFO写真の真偽を判定する機関がアメリカにあつて、アダムスキーの写真を偽物と結論づけたという。しかしコンピュータはプログラム組み方次第でどのような結果でも出せるのであるし、だいたい印刷紙にプリントされた写真を更に複写し、そのネガを数枚分ほどに引き伸ばした巨大な写真を検査してもなおかつ模写を吊り下げた糸が発見されない限り、そのような写真をいかなるコンピュータにかけても真偽の判定などできるわけがないと日本のコンピュータ専門家も断言している。

科学知識やその応用はもろく重要であるが、何よりも現象を冷静に観察し、その背後にひそむ真相を把握する洞察力を涵養すべきである。一部研究者の放言や大衆のデマに惑わされてはならない。

●謎の聖骸布からアダムスキーにまつわる驚くべき事実が展開！

イエスの 聖骸布の謎と アダムスキー

△日本GAP会員

久保田 八郎

謎の人物イエス

二千年前、エルサレム郊外のゴルゴタの丘で一人の偉大な男がこの世界から姿を消した。というよりも磔刑という残酷な方法で消されたのである。その名はイエス。ペツレヘムで生まれ、ナザレで少年期をすごした人で、出生から成年期にかけては謎だらけであり、唯一の伝記たる新約聖書も真実を記録したとは思えぬような美化された箇所が多くて、ノンフィクション・ミステリー研究者を戸惑わせるのにこれ以上の人物はいない。

その誕生もさることながら、死亡時やその後の描写も神秘的であり、どこまでが本当なのかフィクションなのか見当のつかぬ記述に満ちているのだが、後に確立されるキリスト教の神学思想とは別に、このイエスなる人を実在した歴史的人物とみなして福音書を丹念に調べてみると、まず間違いないと思われるのは、大祭司

の部下でもイエスを捕えて、これを反逆者としてローマの総督ピラトに引き渡し、ピラトが群衆の騒ぎに押されて、やむなく十字架にかけたという箇所だ。その最期についても、イエスが神にむかって恨み言を述べたというはなはだ矛盾する記述があるだけで、具体的にどのような処刑を受けたのか判然としない。したがって聖書による限りでは、十字架上で首吊りに絶する苦痛にさいなまれながら息絶えたらしいという憶測の域を出なかつた。だいたいイエスという人物の存在すら疑惑の目で見える学者もいた。あれほどの知名度がありながら当時のローマ側の記録に全く名が残されていないのだ。

ところが近年になって重大な「物的証拠」が脚光をあびるにおよんで、イエスなる人物像が明白化してきた、と思われるだした。それはイタリアのトリノの洗礼者ヨハネ大聖堂に安置してある聖骸布である。これもきわめて複雑な歴史をたど

っており、その移動の跡も謎に満ちている。

聖骸布の歴史

イエスというのは俗称で、正しくはヘブライ語でイェホシユアといい、これがギリシア語に音訳されてイエススと呼ばれるようになった三十歳代の男の磔刑直後の死体を包んだとされる布、すなわち「トリノの聖骸布」は、近代になって発見されたものではない。それは口碑により昔から伝えられてきた。

紀元三〇年を少し過ぎた頃、エデッサ（現在の東部トルコのウルファ）の町の王であったアプガル五世のもとへ「謎の人物の肖像画が描かれている。どうもイエスらしい」といつて大きな布を「だれかが」持ってきたのが歴史に顔を出した始まりである。

この王はイエスの教えを信仰して奇跡的に病気が治つたので、後にイエス崇拜者になつたが、五七年に息子が王位を継承してからキリスト教徒を迫害したので、布は城壁の穴の中に隠された。以来五百年近く伝説だけが流れて現物は幻と化した。

ところが五二五年にエデッサが大洪水に見舞われて破壊されたため、再建工事が行われた。そのとき布が発見されて、以来、イエスの顔が描かれた聖なるものとして崇拜されたのである。イエスの顔を見たことのある人が描いたと思われていたらしい。

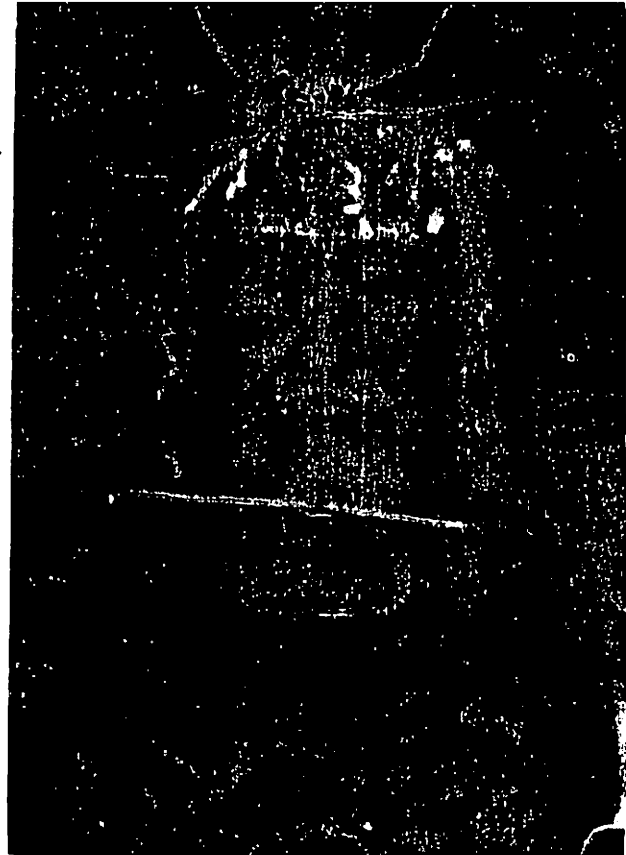
九四三年にエデッサはビザンチン軍に

包囲されたけれども、住民はこの布を敵に差し出して虐殺をまぬがれた。そして一二〇四年まではコンスタンチノーブルで保存されたが、百四十六年の空白を経ていつのまにかヨーロッパのジェフリー・ド・シャルニという男の手に渡つていった。この時期、つまり一三五〇年代が聖骸布としておおよくに記録された最初である。

聖骸布はシャルニの孫娘マーガレットの手に渡り、金に困つたマーガレットはこれをサポイ公に売つた。十一世紀のウンベルト一世が始祖となつて以来イタリアに君臨した王家である。一五三二年には火災で布の一部が損傷したが修復されて、管理を厳重にするために一五七八年サポイ家は布をトリノの洗礼者聖ヨハネ大聖堂にあずけた。それ以来、布はそこに保管され、「トリノの聖骸布」と呼ばれて、百年に四回の割で一般に公開されてきたのである。

劇的な大発見

幅一・一メートル、長さ四・四メートルもある細長い亜麻布はかなり古びて黄色くなっているが、ポロポロの状態ではない。縦に伸ばして広げると、両端にそれぞれ縦二列に三角形の図形のついた模様が見られ、そのあいだに一人の男の正面と背面の像が、布の中心部から上下に黒っぽく浮き上がっている。つまりこの布は磔刑後に二つ折りにされて、折り目の方へ死骸の頭をさみ込んで全身を包んだと思われのである。両手は下腹部で



▲聖骸布に浮き出ているイエスと思われる人物の顔面部(左)。右は左の像を撮影した写真のネガ。このほうがまともな人間の顔に見える。

交差している。

ところが一八九八年に劇的な大発見が行われた。イタリアの考古学写真家セコンド・ピアが史上初めて写真撮影の許可をとり、撮影後に乾板を現像したところ、なんとそのネガに荘嚴な顔つきをした人物の像が鮮明に浮かび上がったのだ。いいかえれば、布に出ているだけの目にも見える黒ずんだ奇妙な像は写真でいうとネガに相当し、撮影した写真のネガに現れた像がポジになったというわけである。写真。

これは大センチションをまき起こした。いままでも画家の手になる画像と思われていたものが、一転してイエス・キリストの体の聖痕せいこんということになり、学界で大論争の的となったのである。

科学的調査の結果は

まずフランスの有名な医学者であるイブ・ドラージュ博士が調査して、その結果を一九〇二年にフランス科学アカデミーで発表したのを皮切りに、本物説と偽物説との激烈な論争が展開した。

ドラージュ博士は、像の男が激しい拷問を受けて、頭部はひどく殴打され、鼻は折れるなど、ひどい状態のまま十字架にかけられた跡があると断定し、これを本物と主張したが、同じ医学者のポール・ピニオンは、人間の汗と香料で描かれた偽物であると断じた。

一九三一年にはイタリアのすぐれた写真家ジュゼッペ・エンリエが進歩した原板を使って布の写真撮影し、それを最

大限に引き伸ばした結果、布地には染料の跡はないと断言した。

しかし科学者による本格的な調査は一九五九年に始まっている。この年、ドイツ人科学者団による顕微鏡検査、X線、赤外線、紫外線検査が行われたのだが、いま一つ決め手欠いた。考古学で応用される放射線炭素による測定が実施されなかつたからだ。この測定には布の一部を切り取る必要がある。そこで科学者団はときの法王ヨハネ二十三世に請願書を提出したのだが、法王の決裁前になぜかトリノの大司教は却下したのである。

ところが一九七〇年代なかばに米空軍の科学者ジョン・ジャクスン博士がVP-18と呼ばれるコンピュータ画像分析器に聖骸布のスライドをかけて調べてみた。この機械は惑星探査機が撮影した地球外惑星の地表写真を立体化させる機能を持つもので、宇宙開発の最新兵器である。

ジャクスンは驚いた。聖骸布のなかから一人の男の立体像が浮かび上がったのだ。このため一九七八年十月に四十名からなる科学者団の大調査が実施された。このうち二十五名はアメリカ人で、彼らは大聖堂内で五昼夜にわたつてあらゆる科学的なテストを行った。そして大半の科学者は聖骸布が本物であることを確信するようになったのである。

像の顔面部のミステリー

その一人にサムエル・ペリコーリがいる。彼は宇宙探査機の打ち上げ計画に従

事してきた科学者で、新しい亞麻布に人間の汗、オリブ油、ロカイ、ミルラと呼ばれるアラビア・東アフリカ産の樹脂などをすり込み、それをオープンで魚がして、トリノの聖骸布の完全な複製を作り出した。これにより布の像が画家によって描かれたという説は打ち砕かれたのである。

絵画説以外に、布が熱い彫像にかけられて像ができたとか、謎の核爆発の閃光をあげたのだ、汗の発散でシミがついたとか、さまざまの説が流れていた。

しかしベリコリは断言する。

「あれは絶対に本物の肉体によって自然の経過によりできたものだ。描かれた偽物という可能性はない。描かれた像だとすれば、あれほどに正確な立体像を描ける人間が六百年前にいたとは考えられない。したがって聖骸布はインチキではないが、像がキリストのものかどうかは別問題だ」

この聖骸布の像にはミステリーがある。ふつう人間の頭に塗料を塗り、それに布を巻きつけてから広げると、両耳までの部分は横に細長い楕円形に転写されるはずだが、聖骸布の頭はそのようなことなく、人間の顔が立体的に浮き出ているのである。布は柔らかい物であるから顔面と後頭部だけに密着していたとは思えない。やはり両耳あたりまで巻かれていたのだらう。しかし布面に浮き出ているのは顔面の像だけなのだ。この謎は解けない。もし描いたものとするれば解剖学に關する深い知識を必要とする。

磔刑された男の詳細

この科学者団の調査によって判明した事實は次のとおりである。

聖骸布の男の両手首に釘が打ち込まれた跡があった。その左手の傷跡から左腕に流れ落ちた血液の跡を調べると十度ずつ角度を変えている。これは男が十字架上で自分の体を持ち上げた下りたりした事實を示している。つまり手首にかかる激痛を両足の激痛に移そうとしたわけだ、両足にも重ねたまままで釘が打ち込まれた形跡があった。

また両手の親指がないように見えるのだが、この理由は、釘が手首に打ち込まれると中枢神経に接触するために親指が手のひらの内側へ収縮したと考えられるのである。実際に釘で打ちつけられたとすれば、中世以来の画家が描くような手のひらではなくて、手首であつたらしい。

だが古代ローマの磔刑の方法として、罪人を長時間苦しめるために、手首や手のひらに釘を打ち込むことは避けて、両手首を七インチ釘でカスガイのように締めつけて体を横木に固定する処置もとられた。これにより手首に体重がかかるために皮膚が裂けて出血し、数時間後に絶命するという。イエスの磔刑はこれだっただと思われる。もし最初から手首や足に釘を打ち込まれたら罪人はものすごい激痛で失神するか、大出血でまもなく死ぬだらう。長時間にわたって体を動かさずにと到底考えられない。したがって両手首と両足に大釘が打ち込まれたという研究

チームの報告には意外な感じがする。

死体は全裸であつた。当時の磔刑の犯人はすべて衣類をはぎとられてすっぱだかにされた。この衣類は処刑人たちがサイコロを振って取り合ったといわれているが、これもおかしい。罪人の着ている垢だらけの不潔な衣類を欲しがるわけがない。

それはともかく、キリスト教芸術でイエスが――聖骸布の男をイエスとすれば――腰に布を巻いた姿で描かれたり彫刻されたりするけれども、あれは正しくない。もつとも全裸の男性像を崇拜するのは宗教の偶像にふさわしくないだらう。

聖骸布の徹底的な研究調査により判明した詳細は次のようなものである。

男の身長は一メートル七十六センチ、体重は約七十九キログラム、年齢は三十歳程度。容貌はユダヤ人のそれであつた。かなり碩文な体格であつたらしい。教会芸術に見られる瘦せた弱々しいイエスの体とは似ても似つかぬ偉丈夫である。

口ヒゲとあごヒゲをかなりたくわえていた。

頭皮が破れて出血し、顔と後頭部に血のしみがあり、鋭利な刃物で切られた跡が十二カ所はあつた。

鼻は折れて、両目も腫れあがり、喉も裂けていた。ひどく殴られたことは明白である。両頬にも切り傷があつた。

顔と手足以外の間は無数の傷跡を示している。これは男の両側にいた二人の人間によりムチで打たれた跡らしい。鉛または骨を先端につけた二重のムチで、九十回ないし百二十回ほどのムチ打ちを受

けたが、主として胸と腹とに集中していた。右側に背の高い男が、左側に背の低い男が立つて、交互に打つたようだ。

聖骸布の男の両肩にひどくすりむけた跡が残っているが、これは重い物を運んだ結果と思われる。当時、磔刑の罪人は十字架の横木だけをかつかされた。イエスの伝記映画にあるように十字架全体を運ばされたのではない。柱はすでに刑場に立てられていた。それにしても横木だけで四十キログラムを超える重量はあつたと考えられる。膝にもすりむけた跡があつた。おそらく刑場に行く途中何度か地面に倒れたのだらう。

右脇腹の第五肋骨と第六肋骨のあいだに大きな傷口が認められ、血液と、刺されて流れ出た体液と思われる無色の液体のしみが聖骸布に残っている。

また両目にはコインがはめられていたことも判明した。これは死後硬直を防ぐために死体の眼にコインまたは薄い陶器の破片をはめ込むユダヤ人の習慣に従つたものだらう。死体を洗つた形跡はない。だから布には血痕が残っているが、これについて重要な結果は出ていない。

花粉で判明した移動経路

それよりもつと重要なのは、この布に付着していた花粉類の検査から布の移動経路が浮かんできたという事實である。調査研究にあつたのは法医学の専門家、植物学者のマックス・フライで、彼によれば聖骸布から五十六種類の花粉を発見したという。これは布に押しつけた

粘着テープを剥がすことによつてサンプルを採取し、これを電子顕微鏡で調べたのである。

それによると、この布はキリストの時代にパレスチナに存在し、後にコンスタンチノーブルへ移動した可能性も示唆するし、死海やネゲブ周辺のパレスチナ地域からさらにヨーロッパにも移された形跡があることも発見した。以上の経路は聖骸布にまつる伝説の正しさを立証したことになる。

インチキ説をとなえる反対論者

いかなるミステリーにしてもそうだが、真相解明派の声明にたいして必ず反対派が現れる。これはときには解明派の独断と偏見にブレキをかける役目をするので、その意味では尊重するべきだが、ごくわずかな真実の光を誤った解釈で消す恐れもあるから、その勢いに押しまわられてはならない。

聖骸布についてもインチキ説をとなえる学者はあとを絶たない。近年もその派の大物として躍り出た人がある。トップクラスの微量化学者ウォルター・マクロン博士がそれで、彼は有名なピリ・レイスの地図を一九二〇年代の偽造だと主張してセンセーションを起こしたことがある。

彼は粘着プラスチックを用いて聖骸布から織り糸を採取し調査した結果、布の像の男は画家が描いたものだと言明した。つまり絵の具に使われる媒体としての赤味がかったオーカーを発見したというの

だ。

一方、トリノ調査団によれば、発見されたという鉄の酸化物のくず、すなわちオーカーは、きわめて微細なものなので肉眼には見えないけれども、布の像は肉眼に見るのであるから、これは問題にならない説だと反発する。像は顔料によるものではなく、布のセルロース繊維の構造上の変質だという。

マクロンのインチキ説は一時期世界に流されて、わが国の新聞にも報道されたので、大方の読者はご記憶と思う。

マクロン以前にもインチキ説をとなえた人がいることは前述のとおりだが、いづれが正しいかはだれにも断言できない。

というのは、科学的調査の決め手というべき炭素14による年代測定がまだ実施されていないからだ。

一九七八年のトリノ調査団もこの測定をやつてはいない。教会が拒否してきたからである。これが実施されれば、十四世紀の画家の手になる偽造品であるのか、ゴルゴタの丘でたしかにイエスの体を包んだものが判然とするだろう。

問題が一つある。

アメリカの化学者ウィラード・F・リビーが一九四六年に開発した炭素による年代測定法は絶対的に正確とはいえないのだ。測定者によつてはかなりの誤差が生じることもあるので、同一物を数名の人が分組して測定し、その平均値を出す方法がよい、とトリノ調査団の一人、ドン・デバンは言う。しかもそのために聖骸布の一部がすでに切り取られて保管して

あるという。

この測定は教会の許可を得て遠からず実施されるだろうといわれているのだが――。

円盤が遺体を照射!

聖骸布の科学的調査結果は以上のとおりで白黒の結着がついたわけではない。あとは教会の出方ひとつだ。歴代法王中、最も進歩的で宇宙的な思想の持主であったヨハネ二十三世でさえも、炭素14による年代測定に賛同しなかつたほどだからこの測定の実施は容易なことではあるまい。

しかしここで筆者がある方面から入手した情報を伝えたい。

イエスが磔刑に処せられてローマ軍の兵隊たちが引き揚げたあと、刑場にはまだ数名の弟子が残っていた。イエスの直弟子は十二人だけではなく、百名はいたはずである。十二人というのは太陽系の十二個の惑星を象徴的にあらわしたものだといふ。

それともかく、当時の処刑は一般人にたいするみせしめのための公開処刑であるから見物は自由だし、埋葬の準備をした近親者が近くで待機していることもあり得た。

この数名の弟子のなかにただ一人の男としてヨハネがいた。いわゆる十二弟子のなかで最後までイエスを救出しようと機をうかがっていた彼は、師の凄絶な最期を目撃してから、処刑人たちが姿を消すのを見届けたあと、死体を十字架から

おろして、用意されていた亜麻布に包んだ。ペテロ以下他の弟子たちは兵隊から詰問されて、とつくのむかしに逃げていた。亜麻布はだれが持つてきたのかかわからないが、とにかくそこにあった。

遺体を布に包んでから、ヨハネや近親者一行が墓地に運んで行く途中(場所は明確ではない)、突如、上空に一機の円盤が出現し、低く降下して、布に包まれた遺体をめがけて強烈な放射線を照射した。人々は畏怖の念におそわれたが、逃げるようなことはせずに、付近でこの驚くべき光景を見守っていた。

やがて円盤が去つて、人々は再度地面から遺体を持ち上げて墓地へ運んだ。そしてイエスはそので蘇生したのである。聖骸布に残つた像は円盤から照射されたビームによつてつけられたものらしい。だから謎の像となつたのである。

その夜、生き返つたイエスは弟子たちと共に夕食をとつた。聖書の「復活」というのはこのことを意味しているようだ。そしてその夜のうちか、または数日後か、これも明確ではないが、着陸した円盤に乗せられて第二の伝導地へ移動した。それは北アメリカ西部の広大なモハービ砂漠の一角で、かねてからそこに住んで宇宙の法則を探求していた偉大なインディアンの部族と合流し、彼らの指導者として宇宙の法則を伝えながら八十数歳まで生きて、現在デザートセンターと呼ばれているその地で没したという。その後火星に女性として転生し、精神的な指導者としての生涯をすごしてから金星に転生して帰つたということである。

スペース・プログラム

イエスを救出した円盤は金星から来たものであった。本来イエスは地球人に生命の法則を伝えるために金星から地球へ転生してきた(生まれかわってきた)人であるが、両親は聖書にあるようなヨセフとマリアではなく、別人だったのだ。本当の父親は当時のローマの傀儡であったエグザヤ王のヘロデだという。母親は王妃ではなく(王妃はヘロデの父のアンティパトロスが宰相を勤めたハスモン王家の出身だが、猜疑心の強いヘロデにより子と共に殺された)、全くの別人で意外な人物だが、事情により名前を伏せることにしよう。

とにかくマリアの処女懐妊は伝説だという。こうした伝説は宗教の教祖にありがちなことで珍しくはない。まして二千年前のことだ。かなり真相はゆがめられているだろう。

ここで問題になるのは「金星の円盤」である。第二次大戦後から脚光をあびるようになった「空飛ぶ円盤」も論議つくされたが、一般では謎は解けないとされている。

しかしこれは地球以外の惑星から来る驚異的な発達をとげた一種の宇宙船だという説をとる人たちがいた。しかも数千年前から地球はこうした大気圏外からの宇宙船の訪問を受けていたという。たとえば旧約聖書の「エゼキエル書」の第四節には、周囲に大いなる琥珀色の火の雲をもって北から来た旋風として描写

された一個の機械の説明があり、その内部には人の姿をした四つの生きものがいた(第五節)とあるが、これは古代に地上を訪れた宇宙船であったと、アメリカの科学者ブラムリッチは断定し、その想像図まで著書に掲げたのはかなり以前のことだ。つまりエゼキエルは古代のコンタクト(別な惑星から来た人と接触・会見した人)なのであって、「エゼキエル書」はまぎれもないコンタクト実話であったというのである。

こうしたコンタクト物語は旧約聖書に多く記述されている。たとえばモーゼのエジプト脱出がそうである。昼は雲の柱、夜は火の柱」となっており、ある巨大な物体がモーゼとイスラエル人の大部隊を導いたと述べてある箇所は、別な惑星から来た大母船の誘導を意味するという。いわゆるUFO(未確認飛行物体)と呼ばれる物体は、船体自体が人工的な重力場をもつためにフォースフィールドに包まれており、これが夜間はイオン化現象により発光し、昼は雲のような状態に見えたりすることが多い。モーゼの場合典型的なUFO現象であった。また彼もコンタクト(別な惑星から来た人と接触)した異星人は「主」と表現してある。こうしたコンタクトを主体にした記述が旧約聖書なのであって、いわば太古からの地球と別な惑星との交流に関する記録といえるだろう。

つまり我々の太陽系内の各惑星にはすべて高度に進歩した人類が住んでいるのだが、地球は文明の発達において最低である。特に地球人の精神性は他の惑星の

人類に比較してきわめて程度が低い。人種間の不平等と差別はひどく、絶えず闘争と殺戮を繰り返す。不安と恐怖は高まる一方である。特に第二次大戦以後は核兵器の開発によって世界は危機に瀕している。この核爆発は大気圏外の惑星群にまで悪影響を及ぼそうとしている。このような低劣な地球を近隣の惑星群の人たちが監視するわけがない。

というわけで、太古の昔から別な惑星の人々による地球救済計画がひそかに実施されてきた。これをスペース・プログラムといい、その一端は旧約聖書にかなりゆがめた形で記述されている。

イエスもこのプログラムに関係した一人であった。ただし彼は現身のまま宇宙船で地球へ来たのではなく、前述のとおり地球で転生したのである。このような人は他にも多数存在するという。イエスは生命の法則を伝えるにきたのであって、宗教の教祖にならうとしたのではなかった。キリスト教なるものは後世の信者によって確立されたものである。

転生しないで、肉体をもつまま宇宙船でひそかに地球へ着陸して、各国の科学機関などで地球人になりすまして働きながら、地球人の科学的・精神的発達を援助している人も多数いるらしい。外形は地球人と変わらないので、ほとんどの人は気づかないが、テレパシクな能力や予知力などによって周囲の人を驚かせることがある。普通人と見分けはつかないけれども、異常な能力によって人々をハッとさせるのである。また信じられないほどに親切でもある。

現代も出現し続けるUFO

このようにしてスペース・プログラムは現代まで続けられている。だからUFOの目撃や撮影事件があつたと絶たないのだ。なかにはまやかしもあるだろうが、れっきとした円盤撮影事件はいまでも日本ですら発生している。

本年三月九日、北海道旭川市の高校生津田頼明君(当時十七歳・二年生)が午後一時半頃に自宅の写真を撮るためにカメラを持って屋外で撮影をすませた直後、突然黒い円盤が音もなく上空を通過するのを目撃し、とつさにシャッターを切って見事にキャッチした。提供を受けた北海道タイムス旭川本社の写真部が大きく伸ばしたところ、アダムスキー型円盤と呼ばれるものと同型であることが判明した。撮影者はそれまでアダムスキーのことをほとんど知らなかったという。

後日、筆者の旭川に住む代理が本人とインタビューして徹底的に調査した結果、作偽的なものは全くなく、きわめてまじめな生徒であることがわかり、写真の信憑性については太鼓判を押してやった。この撮影事件を疑問視する向きもあるようだが、批判をする前にまず直接に本人と接触して調査するのが妥当であろう。

(注)この事件の詳細については本誌、78号の「アダムスキー型円盤、旭川に出現!」を参照。

また昨年九月十四日には札幌市の西門山病院で長期療養中の吉田邦子、ゆう子さんの姉妹が、午後二時頃に五階の病室

の窓から円盤を目撃した。これもアダムスキー型と同じもので、約十秒間空中に静止してから南の方角へ飛んで行ったという。(注)この事件も本誌78号に「札幌市でアダムスキー型円盤、目撃さる」と題する詳細な記事が出ている)

信頼のおける目撃・撮影事件はまだ他にも沢山ある。これらの一連の現象は驚くべき事柄であつて、無視するわけにはいかない。なぜなら地球外文明の一端を我々は地上にいて、かいま見ていることになるかもしれないからだ。このことを声を大にして主張した人がいる。いわゆるアダムスキー型円盤と呼ばれる大気圏外物体を撮影したジョージ・アダムスキーその人である。

ケネディ大統領とアダムスキー

アダムスキーの宇宙的体験なるものについて、ここで詳述する余裕はないけれども、信ずる信じないは別として、UFOに関心をもつ人なら一度はその体験記に目を通すとされるほど有名である。要約すれば、地球以外の近隣惑星群から偉大な進化をとげた人類がひそかに地球を援助しているので、地球人もそれに気づいて彼らの活動に協力し、地球のレベルを引き上げねばならぬというもので、その物的証拠として彼は多数の円盤や母船の写真を撮って発表した。

これは一九五〇年代の前半のことで、当時は世界中でさまざまに論争的となり、賛否両論の渦巻く中を彼は敢然として「事実」を訴え続けていたが、一九六

五年四月に米東部で講演旅行中に急逝した。

その後宇宙開発が進展し、月や近隣の惑星に探査機を打ち上げるようになってから、惑星の真相が明るみに出て、彼の体験がフィクションであつたかのごとく喧伝されるようになった。というのは、金星は七匹四百八十度の高温のため人間の住めるような状態ではないとか、火星の大気には酸素がほとんど含まれていないなどの「発見事」が彼をいちじるしく不利にしたというのだ。

しかし大衆の知らない重大な事実がある。それは、故ケネディ大統領がアダムスキーを支持し、ホワイトハウスへの通行証を与えていたばかりか、ケネディ自身がカリフォルニア州のアダムスキーを訪問して親交を結んでいたという事実である。しかもさらに驚くべきことは、ワシントン市郊外のラングレー空軍基地にひそかに着陸した土星の母船に、アダムスキーの先導によりケネディみずから乗り込んで異星人たちと会談したという情報もある。このとき基地は厳重に警備され、警戒にあたった兵士たちには極端な緘口令がしかれたという。

以上の情報事実とすれば、一般大衆の知覚する世界の裏面で、全く次元の異なる動きが何者かにより展開していたと考えざるを得ない。宇宙開発にしてもそうだ。大衆は新聞に出る惑星探査機の報告記事に目を通し、その場で一つの固定概念を内部に植えつけてしまう。大気圏外に生命など存在しないのだと。そうしてあとは日常のルーティーン(きまりき

った仕事)に立ち返るのである。このようにして歴史は形成され、月日が流れてきた。

だが一方では、探査機の報告結果を分析し、他の惑星上の人工建造物などを探知した驚異的な情報は少数の科学者により巧妙に隠されて、ディレイド・システム(都合の悪い部分を抜き取りながら一定の時間をおいて放送する仕組み)により、あたりさわりのない部分だけが公開され、放送されて、世界の茶の間のブラウン管に流れているということになるらしい。

本日は地球以外の近隣の惑星群に偉大な文明が築かれていることを大政府の少数の為政者や科学者は知っているのではなからうか。惑星探査が本来軍事目的を有するがゆえに、別な惑星の人類存在に関連する大気圏外の情報類を極秘にすることは当然であろう。それは近頃流される大國同士の陰謀だという説よりも、もつと政治的な意味をもつものかもしれない。

イエスとアダムスキー

アダムスキーは決して抹殺されなかつた。なぜなら彼が撮影した円盤——それはアメリカの生んだ偉大な映画監督セシル・B・デミルまでが本物の円盤を撮影したものだと言明したのだが——と全く同じタイプの円盤が、彼の死後十七年を経過した現在もお世界各地で目撃され撮影されているからである。この円盤たちはどこから来るのか? なんのために?

この一連の空中現象はイエスの聖骸布と同じほどに謎に満ちているように見えるけれども、裏面をひっくり返せば意外に単純明白な解答が現れるかもしれない。それを早めるものは社会の機構の変化よりもむしろ人間個々のテレパシックスな知覚力の向上にあると思われる。地球の学問的な知識教養はかえって邪魔をするのではなからうか。証拠物件がなければ信じてはならないという唯物主義の方向に人間をかりたてた教育機関による知識である。

聖骸布の物語は意外な方向へそれてしまったが、あの一枚の布に秘められた謎は大気圏外文明にかかわりがあつたと主張すべき根拠はあるのだ。いつかこのことは証明されるだろうが、やはり大衆には知らされないかもしれない。

一九五二年(昭和二十七年)十一月二十日、アメリカ西部の広大なモハービ砂漠の一角、デザートセンターで、ジョージ・アダムスキーは着陸した円盤から降り立った一人の金星人と会見した。六名の目撃証人が遠くからこの光景を凝視していた。この金星人こそ二千年前にこの地で没したイエスの転生した姿であり、迎えたアダムスキーはゴルゴタの丘で最後まで師を救出しようとしたヨハネその人であつた。上空には五千機の円盤が出現した。

金星人は優しく言つた。

「今度は、あなたを援助してあげましょう」

(『歴史統本』臨時増刊82-9より転載、了解済。記事の一部加筆)

「空飛ぶ円盤の真相」改題・改訳

連載第7回さらば空飛ぶ円盤

ジョージ・アダムスキー
久保田ハ郎訳

10 聖書とコンタクト

私をはじめに出した二冊の書物「空飛ぶ円盤は着陸した」と「宇宙船の内部」(注)以上の二点を一冊にまとめた日本語版「宇宙からの訪問者」は昨年来絶版となっていたが現在某社に出版を依頼中を跳んだ多くの人々が次のような質問を寄せてきた。つまり他の惑星に人類が住んでいるとするなら、なぜその人類のことが聖書に記されていないかというのだ。異星人は聖書時代における彼らの来訪について何度も私に語ってくれたので、私はこの問題をかなり研究してきた。

多年のあいだ哲学と科学の学徒として私は他の惑星にも人類がいると教えてきた。これは私が円盤を見たときその乗員と個人的なコンタクト(接触)の喜びにあずかるよりもかなり以前のことだった。私と異星人との会話をきわめて異常な事だとみなされてはいけない。私と同じタ

イブのコンタクトを体験した人は他にも多くいるからだ(私は多くの心靈的な自称コンタクトマンのことを言っているのではない。私の言うコンタクトマンたちは自分の体験を公表してはいないのだ)。こうした他のコンタクト事件類は世界のいろいろな政府に知られている。そして現在「円盤」は嘲笑的な考えで見られているために、その正体は明かされないうまになつてゐる。一方、政府側は円盤が世界にたいして正体を現す日にそなえて研究をし準備をしているのである。彼らはこれまでに得た知識を大衆に伝え始めるだろう。そして大衆は突然目覚めて、数千年を通じて作り上げられてきた誤った概念に従っていたことや、みずからの閉ざされた心によって隠されていたことに気づくだろう。

ヘブル人への手紙

聖書を注意深く研究すると、宇宙からの訪問者たちに関する多くの報告が明るみに出てくる。実際、ある牧師が私に語ったところによると、彼はそのような記事を三百五十カ所以上も発見したという。聖書ばかりでなく、他の偉大な記録類もその訪問者たちの来訪に言及している。なぜ訪問者たちのことが記していないのかと質問を寄せた人々のほとんどは、実際の記録に関して知らされていないかたにすぎない。宇宙からの訪問者が聖書の中でどのように記されているかを私がお伝えしようとし、現代でも異星人がそうしようとしてゐるように、古代でも世界の各種民族に指導の手を差し延べることが異星人にとつてあたり前の習慣だったということは、以上の考えにもとづくものである。

そこでいま我々に思い出させる最初の数節の一つが「ヘブル人への手紙」一一二に見い出される。

(訳者注)ヘブル人というのはヘブライ人すなわちユダヤ人のこと。日本語訳聖書には奇妙な訳語が多い。ヘブライ人はアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であると称する、古代パレスチナに住んでいたセマ族の一派。「ヘブル人への手紙」は身許不明の「信徒が紀元八〇年頃にローマ教会の一団体に宛てて書いたといわれるもので、新約聖書に含まれる一篇。十三章から成る論文と勧告文。イエスを「大祭司」と呼び、その十字架による贖

罪により、旧約の儀式や祭司制度などで象徴される契約は新たな救いの契約に代わつたと説き、当時としてはかなり進歩的な思想を示している)

「この終わりの時には御子によって私たちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また御子によつてもろもろの世界を造られた」

これは一つ以上の多くの惑星に関する明確な引用である。同様の概念が「ヘブル人への手紙」一一三に示されている。「信仰によつて、私たちはこの世界が神の言葉で造られたのであり、したがって目に見える物は現れている物から造られたのではないことを悟るのである」

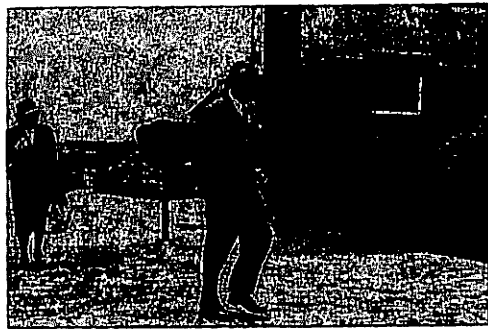
ここでもまた我々は一つの世界以上の惑星に関する別な引用を見出すのである。これらの別な世界に人類が住んでいるとは言っていないけれども、しかしそれは聖書時代に他のもろもろの世界が知られていたという証拠となる。

聖書時代のこれらの人々は、各世界が「現れていない物から造られた」ことに気づいていた。各惑星は不可視な状態から可視的な状態に——すなわち原因から結果に——なつたのである。この考えは太極系の起源に関して今日の最も進歩した概念と一致する。

ヨハネによる福音書

「ヨハネによる福音書」十四一一に次のような記事がある。

「私の父の家(大宇宙)には館(惑星)が沢山ある。もしなかったならば、私は



▲ありし日のアダムスキー。左後方の女性は往年のドイツGAPリーダー、マリア・クーレンカンプ女史。

あなた方にそう言っておいたであろう。私はあなた方のために場所を用意しに行くのだ」

これは、もし我々が別な世界へ行けるほどに進歩して、主が（イエスが）述べたとおりに生きることができるようならば、主はそうしてくれるのだということを示すものである。このことは次の第三節にも示されている。

「そして私が行ってあなた方のために場所を用意ができたならば、また帰って来て、あなた方を私の所に迎えよう。私が居る所にあなた方をも居らせるためである」

キリストが彼の世界の唯一の住人であったと考えるのは不合理である。彼の惑星には無数の幸福な人々がいて、それらが定期的に地球へやって来たときは天使とみなされたにちがいない。

イエスは現身のままで天空へ運び去られたと教えられているが、これこそ大気圏外のごくかに生命を維持することのできる惑星が存在する証拠である。キリスト自身は彼が他の惑星から来たという十分な証拠を示した。「ヨハネによる福音書」八—二十三に次のような記事がある。

「イエスは彼らに言われた。「あなた方は下から出た者だが、私は上から（大気圏外から）来た者である。あなた方はこの世の（地球の）者であるが、私はこの世の者ではない」

これは我々はこの世界の者でそこから生まれ出たことを示している。しかしイエスはこの世界で生まれたけれども、この世界の者ではなかった。彼は他の世界から（別な惑星から）ここへ来たのである。これは程度の高い惑星の人間が志願してこの地球で生まれかわったことを意味する証明の一つである。これは精神的進化の階段をまだ登りつつある人類を導き援助しようという特殊目的のためである。

我々はキリストのようになることができ、しかも彼よりも偉大な物事をなすことができると聖書で教えられている。彼は多くの兄弟の長子であり、そしていつか我々の多くもキリストと同じ状態に達することができることも教えられている（「ローマ人への手紙」八—二十九）。

これは宇宙からの訪問者が地球は小学校の第一学年のようなものだと語った内容と完全に一致する。我々が次第に高く進化するにつれて一学年から二学年へ、更に三学年へと進級するように、惑星間

を次々と進級してゆく（生まれかわってゆく）のである。我々は学年から学年へ、惑星から惑星へと進んでゆくのだ。

気づかないで 天使をもてなしている

この地球でなおも進歩しようとしている人々を援助しようとして、地球へ帰ることを希望する人々がいる。これは我々が外国へ宣教師を派遣するときわめてよく似ている。イエスがやったように地球で生まれかわることを選ぶ人もあれば、宇宙船でやって来て地球人の一人として生活することを選ぶ人もある。

他の惑星に人類が住んでいるという直接の証拠が聖書にある。「創世記」六一—二と六一—四には次のように述べてある。

「神の子たちは人の娘たちのところにおいて、娘たちに子供を生ませた。彼らは昔の勇士であり有名な人々であった」

この神の子たちは当時地球の婦人たちに子供を生ませた地球の男たちと同様に明らかに人間であった。彼らは我々のように肉体と血液を持っていた。靈魂や幽霊の天使が降りてきて女たちと関係を持ったのだと言う人はいないだろう。彼らは読者や私などと同じような人間であつたにちがいない。これは他の惑星に現在人間が住んでおり、しかも長いあいだ住んできたという明確な証拠である。

天使に関する聖書の記述はきわめてはっきりしている。彼らはまさしく地球人のように見える。彼らは、人間の墮落に関係しなかったという点を除いては、全く我々と同様なのである。彼らの外觀

についての確実な証拠は、「ヘブル人への手紙」の中で、地球人は彼らが天使、（別な惑星から来た人）であることに気づかないで彼らをもてなすことがあるという個所によって示されている（十三—二）。

我々は地球上に在住する異星人の男女についてこれまで多くを聞いていた。子供るときから教えられてきた物事から考えると、これは多くの人にとって空想的なばかりしいことに思えるだろうが、しかしかりにだれかが見知らぬ人をもてなして、しかもそれが天使（友星人）であることを知らなかったとしても、「古代にそうであつたからといって現代にはもうこれらの男女が我々のあいだにいないのだ」と、だれが言えるだろう。読者自身も彼らをもてなしたか、または路上で会ったことがあるかもしれない。私をも含めて多くの人がそうであつたらう。多数の人がこの訪問者たちの正体に気づいていないけれども、知らない人も多くいる。我々が歴史はくり返すと考えるならば、同様に聖書の歴史もくり返すと考えてよいのだ。

「エゼキエル書」の 驚くべき物語

円盤が母船を離れて地上を偵察し、また母船へ帰ってゆくという報告がいかに数多く行われてきたことだろう。この種の活動の完全な描写は「イザヤ書」六十一—八に見られる。

「雲のように飛び、ハトがその小屋に飛び帰るようにして来る者はだれか」

これは円盤群が母船に燈投する光景ではないだろうか。当時の語法は今日のそれとは異なっていた。今から五百年先も異なるだろう。しかし我々が似たような出来事を同一視し得る基本原理というものは常に存在するのである。

「エゼキエル書」の第一章はあまりに正確で、単なる偶然の一致とはいえないほどの、ありふれたUFO目撃報告に類似した驚くべき物語である。第四節には周囲に大いなる琥珀色の火の雲をもって北から来た「旋風」として描かれた一個の機械が出て来る。その内部には人間の姿をした四つの生きものがいた(第五節)。

ここで私はこれら古代の文章の奇妙な特徴について注釈を加えたい。昔の原典には句読点が用いられておらず、語や文章のあいだに区切りがなされていなかったという事実である。しかも各節や章の区切りもなされなかった。こんなことはみな後世に校訂者や翻訳者によって加えられたのである。

エゼキエルは彼の文章の中で物語の筋を急に飛躍させる癖があった事実を学者は指摘している。これが生きものと船体の各部分を区別するのを困難にしているのだ。多くの例において人間を説明した節のあとに船体に関する節が続く、そのすぐ次の節はまた人間のことを語っているといった具合である。このことを念頭にに入れて次を続けることにしよう。

第五節では人間のように見える生きものが強烈に輝く船体の内部にいたと述べてある。第六節では「おのおの四つの顔を持ち、またそのおのおの四つの翼が

あった」と言っている。たしかにその生きものたちが四つの顔と四つの翼を持っていたとすれば、それらは人間のように見えなかったらう。この第六節は人間のことを言っているのではなく船体そのものを語っているのだ。これは旧約聖書の他の翻訳本でも明らかにされている。これら各種の翻訳本のなかには船体を円盤と述べているものさえある。

当時の古代の著述家たちは我々が持っているような方角をあらわす言葉を持たなかった。たとえば彼らは世界の四隅として東西南北を用いた。第六節には「これも四つの顔」と四つの翼を持っていたという言葉を置いて、丸くてあらゆる方向に面している」と述べられている。これを言い替えば、同時に四つの方向に面しているということになる。以上の各節の理解の困難さに加えて、次の節は急に人間の記述に立ち返っている。そこを讀むと、その人々は我々のようなまっすぐな足を持っていたが、真鍮色の子牛皮で作られた、見たところ、ある種のサングラカモカシン(注||アメリカインディアンが用いたシカなどの柔らかい一枚皮で作った靴)のような奇妙な靴をはいていたことがわかる。

第八節は、それら(の物体)が人々の手によって導かれたということ、すなわちパイロットとしての人間がいたことを明らかにしている。第九節では、現代の「円盤」の特徴が次のように述べられている。「行くときは回らずに、おのおの顔の向くところにまっすぐに進んだ」。

この古代の記述者は例の人間の特徴を

述べるのに、ライオンの強さを持つと表現して相手の顔に現れた決心、雄牛のような不動さ、ワシのような軽快さなどの表現法を用いている。見たところ、これらの生きものは動物のように見えても人間のように見えなかったであろう。この文章の筆者は、我々がブルドッグのような顔を持つとか、ローマ人のような鼻をしているというように象徴的に表現したので。

第十二節は第十一節の「顔」が船体それ自体の一部であり、人間の顔でないことを明らかにしている。そこで我々は、「顔」という言葉が船体と人間との両方を意味するのに用いられていることがわかる。この混乱のほとんどはたぶん翻訳者たちが何も知らなかった物事を訳そうとしていたあいだに起こったのだらう。もし我々がその言葉を理解して、もとの意味のままに読むことができたとすれば、その筆者が何を伝えようとしたかを正確に理解して用語の混乱は避けられたであらう。

これらの空飛ぶ機械は着陸した。そのとき起こった出来事は第十五節から第十八節にわたって述べられている。停止しているときはこれらの機械は緑柱玉の色であった。四つともみな同じように作られていて、「あたかも輪のまん中に輪があるように」建造されていた。

第十七節はそれらが円くて船体の向きを変えないで方向転換したことを再度説明している。第十八節ではドームのまわりに高いリングがあることを述べ、四つの丸窓のことまで記している。

以上の各節はエゼキエルの目を通して目撃された三個の球型着陸装置を持つタイプの円盤に関する正確無比な描写なのである。

偵察型円盤の円型翼の下部には、これまで何度も報告されたように三個の金属製の回転装置がある。これはジャイロスコープ的な安定性を与えるばかりでなく、超高压静電気チャージ用の発電機として役立つが、この静電気は三個の球型着陸装置の内部にあるファンドグラーフ蓄電池の中に貯えられる。この「輪の中の輪」を見た人はだれでもエゼキエルのように正確に言えるだらう。

第十九節と二十節は、船体の中に人が乗っていて、絶えずその運動を完全にコントロールしていたことをたいそう明らかにしている。この第一章の終わりの部分には「会見」のことが述べてある。船体から人間がエゼキエルに話しかけるのを聞いたとき、彼は顔を伏せて、その不思議な機械と出来事とを天使や神のせいにした。エゼキエルは円盤のフォースフィールドの多彩な色光の変化を畏れて、そのことを第二十二節から二十八節にかけて詳細に述べている。彼の驚きは今日の多数の目撃者の驚きときわめてよく似ている。彼が理解できなかつた物の前でひれ伏したとき、彼はそれを神または未知なる物のせいにして、別な惑星から来た他の人間たちと接触しているにすぎないことに気づかなかつたのだ。

その他のUFO関係記録

予言者エレミヤは雲のように見える飛ぶ戦車のことを記している（「エレミヤ書」四一―四三）。空飛ぶ円盤の出現以来、何人も人々は雲のように見える物を白昼に見たことを報告している。突然その雲の内部から円盤が飛び出ると、その雲はゆつくりと消滅して見えなくなるといふのだ。この現象は船体のフォースフィールドによって起こる。それは空気を凝縮させて雲を作るが、この雲は船体の周囲かまたは真上にしばしば観測されている。イスラエルの民は夜は火の柱で、昼は雲の柱で導かれた（「出エジプト記」三二―三三）。彼らがエジプト人によって追跡されたとき、この雲と火の柱が、そのような現象についてよく知らなかった追跡者どもを「悩ませた」と記されている。

「出エジプト記」第十三章と十四章に用いられている「主」という言葉に注目する必要がある。我々が思い出し得る時代からずっと人類は地球こそ人間の住む唯一の惑星であるときまぎまの宗教団体から教えられてきたことを私は明らかにしたい。地面の上――すなわち空――のあらゆる物は神々や天使たちや主たちの住み家であった。この人々が観察した上空から地上へ来るものは何でも神か天使か主であった。彼ら自身がこのような輸送手段を持たなかったからである。

会见だけでなく同乗の事例が「列王紀下」に記録されている。

「彼らが進みながら語っていたとき、火の戦車と火の馬が現れて二人を隔てた。そしてエリヤは旋風に乗って天に昇った」（「列王紀下」二一―二二）。

まず火の戦車が見られた――大抵の円盤目撃報告によると、船体がオレンジ色か琥珀色の火球現象で囲まれていると述べてある――そしてそのすさまじい力は火の馬によって象徴化されている。それが近くへ来たとき、旋風として感じられたのであろう。

古代のコンタクトの事実

エリヤは神の人であると考えられていた。そしておそらく彼は異星人であつて、その地域で自分の仕事が終わつたことを知つて、そこを離れて他の場所へ行くことにきめたのである。彼は連れて行かれることに気づいたので、出発するときエリヤに魔力を持つマントをやらうと約束していた。だからこの出来事は彼を驚かさなかつた。とにかくエリヤを地上から拾い上げて別な地点へ連れて行つたのはエリヤ自身に似た人々であつた。

当時彼は地球から離れなかつた。というのは、数年後にエリヤは別な土地からヨラムに手紙を出して、ヨラムが父の教えを歩まなかつたこと、その王座を危うくしようとした兄弟たちを殺したことをなを諷めていたことがわかるからだ。これについてはエリヤが拾い去られてから（少なくとも）十年以上経過している点で学者たちの意見が一致している。エリヤは自分が学んだことを他の人々に教え

るために、地上の他の場所へ連れ返されたのである。

このことは多数の人が不思議がついて現代の謎の失踪事件のいくつかにたいする解答になるかもしれない。こうした事件の中心人物のなかには、おそらく地球人のあいだに混じつて生活していた、「訪問者（友星人）」がいたのだから。彼らは自分の惑星に帰ることにきめて、この人々を集めるために派遣された宇宙船に乗つて我々の中から姿を消しただけなのだ。

モーゼはしばしば火の球または光る雲から語りかける人物とまじわつた（「出エジプト記」三三―三九）。宇宙船に乗つた一人の友星人は幾度も幕屋の前に降り立ってモーゼと話した。それに続く節はすべての人々がこの事件を目撃したことを示すものである。

類似の事件が「詩篇」第九十九篇に記録されている。次のようなくだりだ。「主は雲の柱のうちで彼らに賜られた。彼らはそのあかしと、彼らに賜つた定めとを守つた」（九十九―七）

聖書を通じて注目しなければならぬのは、地球人が軌道をはずれすぎたときに、これらの使節、すなわち宇宙船に乗つた異星人たちがやつて来て、指導者かまたは地域社会のだれかに話しかけたという点である。いずれのたびも彼らは宇宙の法則のいくばくかを伝えようとし、地球人の道を正そうとした。友星人たちは地球人の直面した困難を克服する方法を伝えただけにすぎないという点に留意すべきである。人々は受け入れて自分自

身の道を変えねばならなかつた。彼らがこれを拒んでみずから苦難を招いても、起こつた事にたいして他のだれをも非難することはできなかつたのである。

「ルカによる福音書」九一―三四と三十五に、雲に包まれた船体と、その雲から出てくる声の記事がある。船が接近したとき弟子たちは恐れた。同じような事件が起こると今日の多数の人々も恐れるのと全く同じことである。船体から声が出てきたという事実は、異星人によって地球人に教訓が与えられたより、大きな証拠である。

「使徒行伝」一一九はキリストの昇天の物語である。これは復活の後のことであり、キリストは四十日間以上も肉体を持つて現れていた。我々はキリストが肉体を持つたまま昇天したといつても教えられてきた。彼が宇宙船に入ったとき、「雲に迎えられてその姿が見えなくなつた」のである。続く二つの節はこの事件の目撃証人がいたことを示している。また、この同じキリストが昇天の際と同じ有様でふたたび天すなわち空中から帰つて来るだろうという約束がある。この特殊な部分に関してはまだ多くの参考例があるけれども、以上の記事だけでも十分に乗船の光景をあらわしている。

（この章未完。以下次号）



●ある偉大な哲人との対話

宇宙と愛について

〈連載第三回〉 久保田八郎編

今世紀末人類絶滅の予言はウソ

——一般に出まわっている予言の本などによりますと、一九九九年に地球上にどえらいことが起こるといふことですが、これについて先生は以前に「そんなことはあり得ない」とおっしゃいましたが、それについてはどうでしょう？

「最もむつかしいことは、Aという人が大事件だと思ってもBやCなどの他の人はそう思わないという問題です。たとえば私の家に車が飛び込んできて、家族が大ケガをした場合、私たちにとっては大事件であっても、北海道の辺地に住んで新聞を読んでいる人には全く大事件でも何でもなわけです。だから何かの物事を予言する人がいても、他の人が何と

も思わねばそれは大事件ではありません。大事件というものはマスコミなどが騒ぎたてて一般人に認識させないと大事件にならないんです」

——遠からず第三次大戦が発生して全面核戦争となり、世界中が地獄の火の海と化すといわれていますが、これについては？

「そんな大戦争はまだずっと先のことで、はるか先のことです」

——何百年も先のことでですか。
「現代の文明人は約六千年前に原始生活にはいつています。我々の一歩手前の文明の破壊はいまから一万二千四百年前です。このときにいわゆるノアの箱舟の例の大洪水やその他の神話などに出てくる大洪水、ムー大陸やアトランティス大陸の沈下などがありました。それ以来、一

万二千四百年しか経過していません。いや一万二千四百五十年です。いや五十年目かもしれません、今年は一

その大変動により寒氷期となり、そしてそれが溶けたために水量が多くなり、火山の爆発により恐ろしい蒸気を噴出して、このためにやはり水量が多くなったのです。そういうわけで地球上に一時期たいへん高い所まで水位が上がったのです。そしてそれは長い年月のあいだぶたたび下がってきます。地下へも落ちます。

その大変動が発生するまでの地球は現在よりもっと文明が進歩していった。科学、医学、道徳など——人間にとつて生きるために必要なものは今よりも高度であったと考えてよいでしょう。しかし我々がそのなかでパロメーターにした



がるのは科学水準です。人間の尊厳さには目を向けません。だが当時の大文明は科学ばかりでなく、あらゆる分野のレベルが高度であったのです。そしてそれがピークに達するときがきました。もちろんその頃でも現在UFOといわれる物がいたわけです。

ところであらゆる物事が最高に発達して、人間が全く何不自由なしに暮らせるようになり、無欲になりますと、人間の内部から自然に偉大な力が引き出されるようになり、いわゆる超能力が出てきます。このように、修行や努力をしないで、あらゆるものが満たされた状態で人間の内部から自然にわき起こる超能力こそ本当の意味での超能力なのです。

一万二千四百五十年以前の大文明の頃に、こうした超能力者は星の数ほど存在

して、未来の予知がザラにできたものですから、それにより木製の船を建造することを計画し、大洪水からのがれる準備をしたわけです。

しかしその頃は木の船を作る人はいませんでした。あまりにも満ち足りて科学的に高度に発達していたからです。新しい合金なども沢山ありましたからね。木で物を作るといふ原始的な方法は存在しなくなっていたのです。いまでも木製の巨大なタンカーを建造せよといえど造船会社は困るでしょう。施設はすべて鉄板を用いるようにできていますから――。

それで沢山の人が木造船の建造案を聞き流したのですが、何人かの人が挑戦しました。世界中の各地で木造船を作ったのです。

やがて大変動が発生し、大洪水となったとき、その船に乗った人たちは助かりました。ただしそのときから原始生活が始まりました。もちろん飛行機で脱出した人もあります、当時の最高の乗り物で逃げた人もありますが、その人たちはすべて助からなかったんです。こうした科学的な輸送機関は条件がすべてそろわないと機能を果たしませんからね。むしろエンジンを持たないで、水上を漂流できる原始的な木造船が最高によかったわけです。現代よりも立派なビルや地下鉄などがあったのですが、そういう所へ逃げ込んだ人はみな自然界の猛威によりふるいにかけられました。

そしてあちこちで土地の隆起が起こり、一方では陥没するという現象が続いたのですが、日本や中国はいったん沈んで浮

上した場所です」

――それがノアの箱舟ですか。

「ええ、ノアの箱舟は大変動の一部分を断片的に伝説として伝えただけで、その他の地域にも大洪水が神話として残っています。」

それで、木造船で脱出して助かった人たちは原始時代に逆もどりし、年月の経過とともに、大文明の知識や科学技術を生かせる人々も次第に没してしまい、世代が交替して、どうしようもなく原始人にもどってしまいました。

また高地へ退避した人々も生き残ったのです。ピラミッドはその高地を象徴したものです。つまり高地へのがれて助かったのですから高地に感謝するようになって、それがピラミッドという形に象徴化していったわけです」

――そうすると、その人たちがピラミッドを作ったのですか。

「いや、それから何千年という年月が経過したのですが、人々は当時のことを忘れないでおこうというのでピラミッド建設が素朴ながらスタートしていったわけです」

エジプトのピラミッドの謎

――そうしますと、エジプトのピラミッドを建設したのはいつ頃ですか。

「うんと昔です。その前にもっと多くのピラミッドが作られました。これは高地へのがれた人たちがすぐにお守りのように感謝の心をこめて作ったピラミッドで沢山ありました。これらはやがて発掘さ

れてあちこちから出てくると思いますがね。あまりにも素朴で小さい物ばかりです。」

しかし次第に初期の人々の感謝の念が権力その他に付着しながら、ピラミッドはますます巨大化していったのです」

――いまエジプトのギザに大きなピラミッドが三つありますが、あれを實際に作ったのは今から何年ほど前になりますか。

「今から六千年ほど前です」

――あの石を積み上げるのに、人間が引っ張り上げたのではなく、別な方法を用いたのですか。

「そうです。その頃は現代の力学よりは遠う方法を用いたのです。人間がどんな退化していったからね。今は自然の力に依存するよりも唯物論的というか、人間の考える機械的な力、または素朴だけれども人間の労力というものを応用するようにおちぶれてしまったわけです。」

人間が原始生活から進歩して、素暗らしいといわれる段階に達するまでに八千年から九千年かかります。これ以上は維持できません。自然界が許さないからです。自然というものはそれぐらいの周期で作用しています。つまり自然界は九千年から一万年ぐらいのサイクルで呼吸作用をするのです。

大自然というものは大きな目で見ると生きものなんです。大変動というすごい感じがするけれども、人間が惑星にたいしてあまりに小さすぎるために、人間の目から見れば、ごくたまに起こる惑星の地震変動などは大変な状態に見えます。地震変動というものは毎日の天候の

変化ほどに激しくはなくて、緩慢に発生しますが、やはりサイクルがあるのです。だから人間はどれだけ高度に成長しても、いつかは薬屑と消えるという状態は続きます。どうあがいても、最高の状態になっても人間は惑星という自然界の上にあぐらをかいているのだから仕方ありません。これはすごい緩慢なサイクルですが、時期がくれば必ず起こります。しかしその一周期のあいだに人間は最高の状態に達します」

全面核戦争は起こらない

――現代は人間が最高に発達する段階の終わり頃ですか。

「いいえ、まだまだ進歩します。だから一九九九年に何かが発生するというのには、かりに何かがあったにしても、地球という惑星が起こす周期的な大変化からみれば子供の遊びみたいなものです。」

人間一人の何十年間の生涯のあいだでも自然環境は大変化しますからね。現代の人類の成長期間はまだあと三千年もありますから、その間の環境や文化の変化は図り知れないものがあるでしょう。だから一九九九年の出来事などは、かりにそれが戦争であったにしてもイギリスとアルゼンチンの紛争みたいな取るに足らぬものだと思います。人類の終末はまだはるか先のことですよ」

――実際に核兵器を使う時が来るでしょうか。

「来ます。ただし全面核戦争というようなものではなく、散発的なものです」

「それは今世紀中ですか。」

「いや、今世紀中ではありませんね」

「じゃ、百年後ぐらいですか。」

「そんなに先でもないですけどね。それも散発的なものであって、一般にはさほどの影響はないでしょう。核兵器を使用すれば相手国からも仕返しを受けますから簡単には使えません」

「問題は三千年先ですか。」

「早ければ二千年先です。それは人間の手による破壊ではなくて、自然の動きそのもので、地球の大掃除です」

「そのときには日本列島が海中に沈下して、太平洋に新しい陸地が出現するのでしょうか。」

ノアの箱舟

「ノアの箱舟の残骸らしきものがアララット山で発見されたということですが、あれは本物ですか。」

「本物です」

「やはり人間ばかりではなく動物を積み込んでいたのですか。」

「そうです」

「その箱舟の大きさはどれぐらいだったのですか。」

「大小さまざまあって、しかも世界中で無数といえるほどに沢山建造しました。それが世界中に浮いたんです。旧約聖書では一隻だけ例をあげて語っているから

話がややこしくなるのです。もちろん、これらの木造船のすべてが助かったわけではありません。当時の人々は海水の水位が上がることしか考えず、波にもまれることは想像しなかったんです。

ノアの箱舟は結果的には完璧な船だったのです。これはイカダの深いのと舷側とをつなぎ合わせたものです。これはいわゆるイカダよりもっと粗っぽいもので、材木を積み重ねた構造になっていて、大波にもまれてどんなにこわれても、下層部から順番にはずれてゆくように作られていました。次々と破損しても最後に板切れ一枚で助かるという方法をとったわけです」

「そうすると動力はつけなかったのですか。」

「動力をつけた船も作られたんですが、それは全部だめになりました。動力をつけようとすれば、それなりの精巧な構造が必要になりますし、燃料の貯蔵所、水の入らないような精密さなどが要求されます。それでこのような船に乗った人たちはみな助からなかったんです。そして不完全な粗雑な船を作った人々は助かったわけですよ。」

こうした不完全さというものは、人間の目から見ると不完全に見えても、自然に対応しますから、自然にたいしては完璧だったのです。結局は生き残ったんですから」

「その大洪水の発生地はどこですか。」

「ヨーロッパです。いまのヨーロッパに海水が集まって、それが中国大陸、朝鮮半島からカムチャツカにかけて通り道に

したために絶えめにされたわけですよ。しかしその寄った水が元へ返って、それが蒙古の方まで行っています。だから日本には太古の歴史が残っていないんです」

「日本の人間もみな流されたのですか。」

「そうです。島は船と違って動きませんが、地上の人間や物が流されるだけです」

「日本にはノアの箱舟のような船はなかったんですか。」

「やはり、あったんです。だけど日本列島は海水でひとなめにされたんです」

「そうすると、現代の日本人の祖先はそのあとに来たわけですか。」

「そうです」

「それはどこから来たのですか。」

「方々から助かった人たちが集まって来たのです。そのときには世界中に人種が散ってしまいました。波まかせですからね。その海水の流れも非常に速くて、ものすごいスピードですから、動力つきの船などはだめで、やはり頑丈な大イカダ式の船でないと耐えられませんね。それは材木を一メートル二十センチほどの間隔に並べた大ざっぱな船で、どこから波が来ても耐えられるように設計されていたんです。いわば鳥籠をさかさかひっくり返したような船です。こういう構造だと前後左右のどこから波が来ても大丈夫です。」

もう一つは高山へ避難した人たちです。この人たちは助かりました。この人たちは水が引いたときに船で下がって行きました。いわば船で降りたわけで、たどり着いた所で感謝の気持をこめて高山の象

徴としてピラミッドを作ったわけですよ」

ピラミッドの建造法

「現在エジプトのギザに残っている三大ピラミッドは、それぞれ二百万個以上の石を用いて建造されたといわれていますが、実際にはどのようにして築き上げたのでしょうか。」

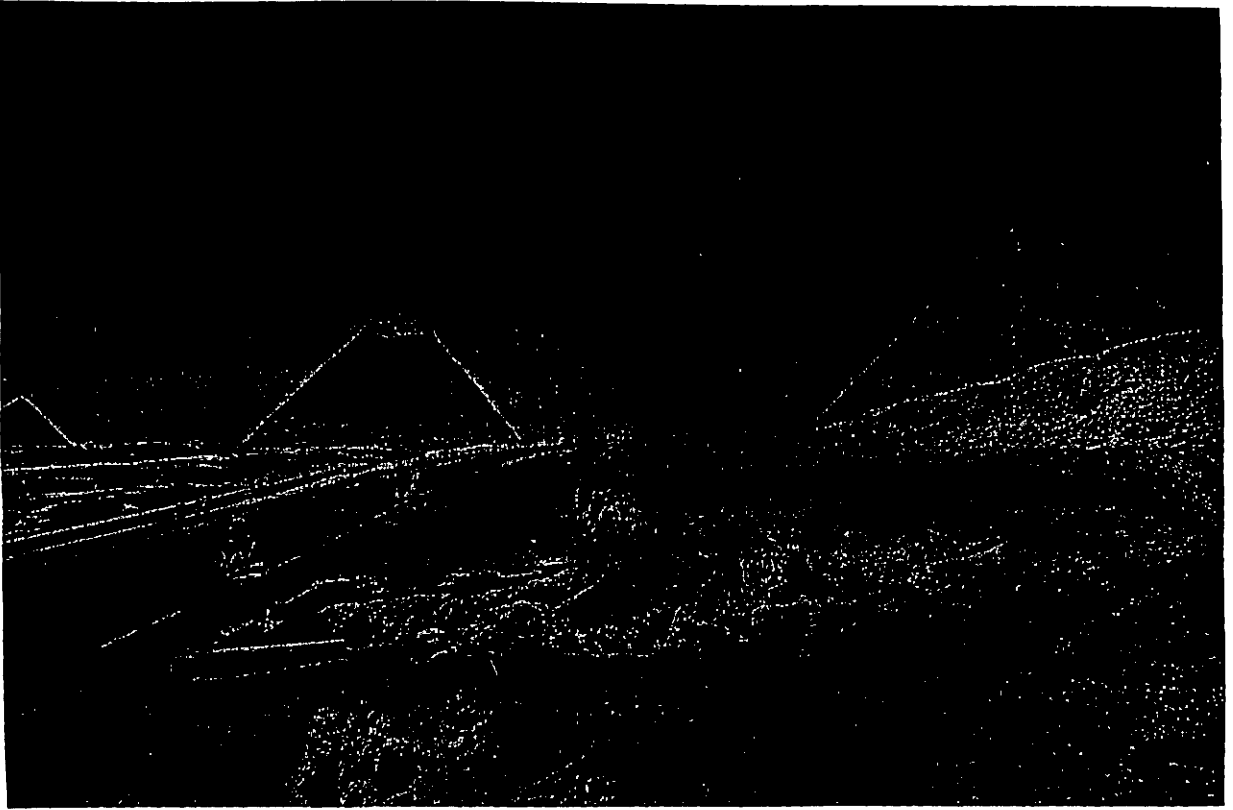
「あれは水位を利用したんです。水を順番にせきとめたんです。水の流れにたいして順番に防波堤を高めたわけですよ。」

現在のナイル川のあたりは大昔は森林地帯だった所で、鉄砲水でない緩慢な水が今のような砂漠でなかった一帯を流れていました。そこで、現在ピラミッドが建立されている地点に長い堤防を作って水をせき止めたわけですよ。そして水の表面に石を並べてゆき、一定の平面の建設が終わると、また水位を上げてゆきます。そして完成してから高く築いた堤防を今度は順番に崩していったんです。

物体を水の中へ入れると比重の関係で軽くなりますね。あの原理を応用して、石を水の中につけたまままで仕事をしたわけですよ。つまり石を水中で動かしたんです。

今は砂漠のまん中にピラミッドが建っているもんですから、あの石をどうして動かしたんだろう、と人は首をかしげますが、それは現代の状況を基準にして考えるからです。

もともとあのギザ一帯は森林地帯で、しかも丘陵地帯でもありました。そして防波堤を方々に作って水をずらしたり、



砂漠化したために、現在のように平らになつたのです。もとはあそこは丘陵地帯で岩盤だつたんです。

水をせき止めるのは丘陵と丘陵とのあいだの谷間でやつたのですから簡単です。まず上流から石を切り出して流し、それを谷間に並べて最下層のダムを作って水をせきとめます。次にその水の中を更に石を流してダムを高くし、このようにして次第に石を高く築いていったんです。

すると水位も上がってきます。もちろん石積みの中も水びたしになります。いま御母衣^{おぼろ}ダムというのが日本にありますがあれはピラミッドを作つたのと全く同じ原理で作られています」

——あのピラミッドのある地域は、広漠たる砂漠の平野になつていますが、
「現在はそうです。しかし上流へ行きますと、年間百キロずつ砂漠が拡大しているんです。ナイヤガラ^{ナイアガラ}の滝にしても昔はずつと手前にあつたんです。滝というものは毀山現象といつて、だんだん山へ帰つてゆきます。水の勢いで滝の岩盤が少しずつ崩れて上流へ移動するのです。ピラミッドの地域もやはり毀山現象によつて現在は丘陵が削られてなくなりました。だけど昔は丘陵があつたんです」

——昔の石切場は今も残っているんですかね。

「その石切場も谷の中だつたんです。今は風化して樹木もなくなりました」

——するとピラミッドは古代エジプトの王の墓でもなんでもなかつたわけですか。
「王は後世になつてピラミッドのなかへ自分の権力をミックスしていったんです。」

だから最初のピラミッドというのは小さな墓石みたいな大ききで始まつたんです。それは感謝のシルシだつたのですからね。高山で助かつたための象徴です。日本でも忠魂碑というのがよくありますが、これは墓石よりも大きくしてありますね。あれと同じで、もとはほんの小さなピラミッドが、次第に大きく作られるようになったのです」

——あのピラミッドの石を持ち上げるのを別な惑星の宇宙船が助けてやつたという説がありますが、そんなことはやらかつたのですか？

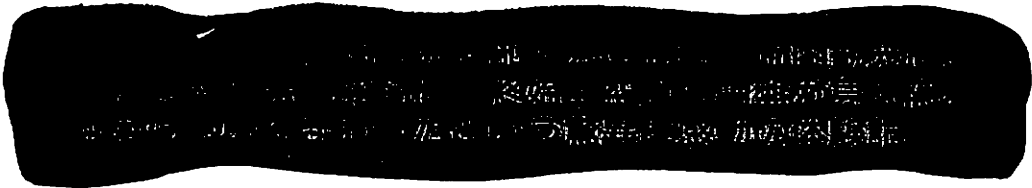
「水を利用することにして、水を流すピラミッドを構築する場所に斜めに橋かけをするわけです。そうするとスキーでジャンプをするのと同じで全く手がからず来て、ジャンプ台でこんなふうな角度をつけるでしょう。そうすると人間は空中へ飛び上がりますね。それと同様に、石切場から出した石をそのかけ橋の上ですべらせれば、いとも容易に石がすべり落ちてきます。こうすれば至つて簡単にピラミッドが作れるのです」

——そのピラミッド建造の光景を先生は透視されるのですか。

「そうです。私が言つたことを確かめようと思えば、あなたがピラミッドに関して多くの書物を調べてみれば、もとの場所は丘陵地帯だつたとかいろいろの事実がわかってくるでしょう。」

そして最後にあれだけの物が残つたのです」

円盤につきまといわれた日



七月四日、日本GAP静岡支部と名古屋支部合同の東海地区大会が開催された。この日は久保田先生の誕生日という記念すべき日でもあり、大会、そして誕生日記念パーティーも大盛況のうちに終了した。翌五日は雰囲気ガラリとかわえて、静岡、清水方面へ観光である。

この観光の日のちようど一カ月前の六月五日の朝方、母船が現れた夢をみました。そして大会の何週間か前、観光のコースをあれこれ考えていた時、ある光景をイメージしておきました。それは日本平からロープウエーで久能山に行く途中のゴンドラに乗っている時、それと平行して円盤が現れ、円盤の丸窓からこちらに向かってニコニコして手を振っている。そしてゴンドラの中の私達も手を振っている光景を描いておいたのでした。当日偶然にもゴンドラの中から松山支部の伊藤さんが近づいてくる円盤を目撃されたのでした。またその前の見学地の登呂遺跡でも会員のみなさんが集団で円盤を目撃した。私のとなりには高梨氏も双眼鏡でパッチリと確認した。

三保の羽衣の松の海岸では、波打ちぎわに着き、空を見上げると、海岸に向かって右側の上空に線条の細い雲が二本東西にたなびいていた。その一番長い雲のすぐ下に白銀色の物体が二―三秒水平飛行した。近くにいた高梨氏に声をかけ、

〈静岡支部代表〉 野口敏治

再度見た時には姿は無かった。このあと清水次郎長の墓などを見学し、静岡に帰る途中、横口氏がバスにずっとついてきた二機の円盤を目撃している。

登呂遺跡、日本平、三保の松原、そして帰路と、ずっと上空から見守られていた一日であった。そしてGAP活動への信念がますます強固になった一日でもあった。



〈松山支部代表〉 伊藤達夫

七月五日の静岡での市内観光で、たびたび円盤を目撃しました。日本GAPを励ますかのように現れた円盤の方々に心から感謝し、スペースプログラムに協力する意欲と自信を深めることができました。

最初の訪問地たる登呂遺跡の広場で早くも二機の円盤が現れました。久保田先生が指さす方向を見ると、二羽の鳥が飛んでいるすぐ上を、さりげなく飛んでいる黒い物体を発見、百三十五ミリ望遠レンズでのごとく、明らかに楕円型をした円盤で、時おり鈍い銀色の光を反射していました。

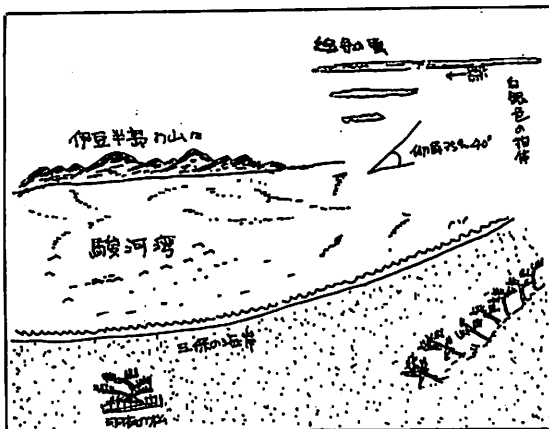
すると別の一機がさきの円盤とは逆方

向の右側へ飛行してゆくのが見えました。続いて訪問した久能山からロープウエーに乗って日本平に向かう途中で二度目の目撃をしました。

ゴンドラの中から眼下に開けた駿河の海を眺めていると、海上からこちらに向かって一羽の大きな鳥が翼をピンと伸ばして近づいて来るのが見えたので、レンズを向けると、それは鳥ではなくて、登呂遺跡で見たのと同じタイプの円盤でした。

天下の絶景、三保の松原を真近に控える景勝の地を背景に、海上から迫り来る円盤をこの目で見えた時、私は日本GAPの本質をこの瞬間にはっきりと理解することが出来ました。そして地球と他の惑星の二カ所に同時にいるような錯覚にお

▼野口氏による三保海岸のUFO出現図





▲登呂遺跡上空の円盤。(伊藤達夫氏撮影)

ちりりました。すぐあとで右方向にも別な一機が海上から接近して来るのが見えしました。

三保の松原は私が子供の頃から一度は訪れたいと思っていた。懐れの場所でした。浜辺に座って、しばし打ち寄せては返す太平洋の大波とたわむれている間も、ずっと「見つめられている」という温かいフィーリングを感じていました。

終着の静岡駅に着く直前に、バスの中から会員の方々が高空を飛び去って行く丸い白色の円盤を目撃しています。あとで知ったのですが、バスが清水の次郎長のお墓のあるお寺から静岡駅に向かう途中、二機の円盤がバスを追っかけて来るのを見た人がいたとのこと、びっくりしました。

このように、終始二機の円盤が行く先々で私たちを見守って下さるといふ素晴らしい市内観光でした。さしずめ「日本GAPとスペースブラザーズとの合同ハイキング」ではなかったかと思えます。

静岡支部大会の翌日にこのような素晴らしい体験をすることができて本当に幸福でした。久保田先生とスペースブラザーズが協力されてスペースプログラムを逆行されている現実の姿をこの目ではつきり確かめることが出来たのは貴重な体験で、勇気と自信、喜びと希望にあふれて静岡をあとにすることが出来ました。



〈静岡県〉 橋口眞市

日本GAP東海地区大会が七月四日に開催され、八十二名ものみなさんが参加されたなかでの久保田会長の大講演は、すばらしい内容でも感動しました。

夕食会も大勢のみなさんが参加され、この日は久保田会長の誕生日で、誕生記念パーティーということで盛大な会が催された。翌日は静岡、清水方面に超豪華の観光バスで出掛けました。

最初は登呂遺跡に行き、二千年前の弥生時代の水田跡、復元された穀物倉庫、住居跡などを見学していた時、久保田会長の方を見ると上空の方を指でさされており見ると鳥がとんでいる近くに黒い物体が二つ飛んでいるのが見えた。鳥とは動きが遠くようだ。遠くの方に飛んでゆくと、そのうちの一機が方向を変えてもどつてきた。まわりにいた人達がカメラでとったり、双眼鏡で見たりしていた。

そしてバスで日本平へと向かう。日本平からの展望は素晴らしい。ここからロープウェイで久能山東照宮に行き、家康の遺愛の品々を集めた博物館などを見学しロープウェイで日本平にひきかえして昼食をとった。

それから三保の羽衣の松を見学に行きました。松の向こう側には駿河湾が見え、その向こう側には伊豆の山々がかすんで見え、とても美しい海岸に感動しました。それからバスで清水次郎長で有名な梅蔭寺に行き資料館を見学する。次郎長さんがとても進歩的な考えをもっていたことに驚きました。この日の見学コースはすべて終了し、梅蔭寺をあとにして静岡に帰る途中バスの左側の窓から外をながめていると、白く光る物体が二機見えた。ビルや家の影で時々見えなくなったりするが、バスの進行方向と同じ方向にずっとついてくる。バスの速度にあわせているみたいだ。静岡駅に着くころにはもう見えなかった。何分間か、何十分間位だっただろうか？ とにかく視界から消えないようにと見るのが精一杯だったのだ。時計を見るひまがなかったのです。この日は一日中私達を上空から見守ってくれたような気がしました。

前日の大会で久保田会長が、「日本GAPは確実にブラザーズから注目されている。そして援助されているのだ」と話された。この言葉をみごと実証した素晴らしいバスツアーでした。

〈千葉県〉 遠藤昭則

静岡支部大会の次の日に出現したUF0についてお伝え致します。

まず静岡支部大会の当日の七月四日、丁度先生の御講演の時です。それまで先生のお話を興味深く聞いていたのですが、ふと右側の窓から見えている空が気になって、というよりもそこに母船がいるのではないのかなという感じがしたので、外を見てみました。

しかしブラインドを通して見た景色は、建ち並ぶビルディングとその上に浮かんでいる様々な形をした雲だけで、母船らしいものなどどこにも見あたりませんでした。

それで、きつと感違いだろうと思っていたのですが、母船が近くにいるという感じはまだ続いています。

そして翌日は七月五日、静岡市内見学の日でした。ホテルのロビーで皆で待っていると、素晴らしい豪華なバスが来たので、まずこのことに驚いてしまいました。そしてバスに乗りこみました。私はUF0をよく目撃されるという橋口氏の横に座らせていただきました。氏と一緒にいけばUF0を見ることができるとは、ないかななどと思っただけです。

最初は登呂遺跡を案内していただきました。バスから降りる時に懐かしい印象が湧き起こりました。大学の頃、それからGAPの総会の時などによく湧き起こった、うまきは表現できませんが、

青い中に金色があるような、そんな印象でした。きっとこれはGAPの人達の素晴らしい印象のためだろうと思っていました。

そして色々な住居跡を見学して、復元された住居の前で皆で写真を撮ったりしていた時のことです。先生が空を指さしてそのまわりに数人が集まっていたので、何事か行つて見てみました。初めは何か解らなかつたその二つの物体は、よく見ているうちに二羽の鳥であることが解つて、残念、UFOではなかつたかと思ひました。するとその二羽の鳥の進んでいる後方から、空気を切つて飛ぶというよりも水の上をスルスルとすべつて行くような、スイカの種のような形の楕円形をした真つ黒な物体が飛んで、その二羽の鳥を追い抜いて行きました。

双眼鏡で見ている方、カメラで撮られている方等、色々おられました。そして向こうへ行つたかと思ひました。今度は戻つてきたようですが、この時は私には見えませんでした。この物体が二羽の鳥の後方から現れて追いついて行つた時、二羽の鳥とは遠く、バスから降りた時に感じた様な印象が一瞬湧き上がってきたので、あれはきっと宇宙船だと思ひます。

それからバスの方へと向かつて歩いて行つたのですが、昨日母船がいるような感じがしたのを思い出して、ひよつとしたら母船が遠くにいるのではないのかと思ひました。

そしてバスに乗つて日本平へと向かいました。このころになると細長い尾を引

いたような雲がたくさん出ていました。カーブの多い道を登つている時の景色は最高で、清水港だつたと思ひますが、そちらの方までもよく見えていました。

私は外を見ながらUFOが飛んでいないかと探していたのですが、一つの細長い雲の下に、白い糸のような雲があるのを見つめました。橋口氏から双眼鏡をかりて見てみますと、その細い糸のような雲は左側に少しずつ伸びているようでした。あたかもその先頭に物体が飛んでいるように。しかし自然現象かも知れませんが、よく解りません。

日本平で昼食をとり、清水次郎長の墓等を見てから静岡駅へと帰ることにになりました。途中眠くなつてうとうとしていたら、橋口氏が外をさつきから見ていることに気がきました。そこでこちらの方を見ると、バスは家が建ち並んでいる近くを走つていたので何も見えず、はてなと思ひていました。そして家の並びが切れて大きな丁字路になつた時、バスの進行方向に向かって左側の遠くの山の横に、白く丸い物体がバスと同じ速さで飛んでいるのが見えました。

「あれつ、なんだろう」と言う橋口氏も、「うん」

と言ひました。氏はさつきからその物体に気が付いていたそうでした。

それから遠く山々に隠れてその物体は見えなくなつてしまいました。もしもUFOだつたらまた見えるのではないかと見ていた所、山々が消えて海が見える場所を通つた時、さつきの白く丸い物体

が二つ、私達の乗つたバスを追い抜いて飛んでいました。そしてすぐにまた建物で見えなくなつてしまいました。

それから五、六分バスは静岡駅に着きました。

以上が大台聖日の様子です。

今回の静岡支部大会とその翌日の見学会に参加してとてもよかつたと思ひます。スペース・ブラザーズは私達を注目している。その信念をこの二日間で新たにしました。

〈千葉県〉 山口 緑

印象深き静岡での大会の翌朝は、野口さんをはじめ静岡支部の方々の手厚きもてなしを受け、豪華大型バスに乗り込み、三十余名の会員と共に市内観光に加わらせて頂く好機に恵まれた。当初は仕事の都合上、大会翌日の七月五日を休むわけにはいかないと思ひ込んでいたが、大会が近づくにつれ、何としても休暇をとつた方がよいという感じがして、思い切つて休みをとり、参加させて頂いたのだ。

午前十時過ぎにホテルを出発、最初に訪れたのは有名な登呂遺跡であつた。幾分なりとも興味はそそられたけれども、それよりもはるかに大きな期待、——何か起こる——という気がしてしかたがない。空は薄曇りだが暑過ぎることはなくとても軽快である。月曜日とあつてほとんど他の観光客も見当たらない。ガイドさんの説明やら、お互いに記念

にとシャッターを切り合つたりした後、

見事に復元されたかやぶきの住居をみんなが見たり、中に入つたりしている時、

私はふと上空を何気なく仰ぎ見た。二羽の鳥が黒く目に入ったが、ちょうどその

二羽の鳥の中ほどに黒点があるのに気づいた。「あれ、あれも鳥なのだろうな」と心中で思ひつつ、同時に「もしかしして……」と一瞬円盤ではなからうかという

印象を受けたけれども、それをすぐに打ち消して、しばらくその二羽の鳥ともうひとつの黒い物体を注視していた。それはあまり鳥の飛行コースと一致しており飛行状態も似ていたために、やはり同じ鳥がより高い上空を飛んでいて小さく見えるのだろうと解釈し、近くにいた笠

原さんにも伝える勇氣も起こらずにいた。しかし、気にかかつてしょうがない。

みんながそろそろ復元された住居を見学し終つて外に出た頃になつて、私もひとつ中に入つてみようと思ひ、池谷さんらと共に中に入り、しばらく中を見た

後、五分ほどして再び外に出てみると、みんなが空を見上げ、「あれはなんだ？ 円盤らしい？」という声があり、みんなの指さす方に目を向けると、先程私が見た

物体であつた。ああ、やつぱりそうだったのか！と思ひ、目を凝らした。久保

田先生も「あれは鳥じゃないな」と言われるので確信を持つと同時に、自分もこ

うして円盤を目撃できたことに対してとても大いなる歓喜と興奮が体じゅうに走

るのを感じた。

最初に私が見た位置は、私たち一行の

ほぼ真上にいたが、こうしてみんなで目

撃したものは、かなり仰角の低い位置にまで来ていて次第に遠ざかっていくようだった。そこにいたほとんどの全員の方々がその物体を確認した様子だった。皆さんがその物体を見失ってしばらくして、再び別方向に同じ物体が出現した。私たちの宿願のアンコールに添えてくれたようである。その間約五〜六分だったと思われる。

後になって考えてみると、私が最初その物体を発見した時には、完全に彼らブラザーズが私たち一行を観察していたのだ、という強い印象を持った。

円盤に注目された日

〈日本GAP会長〉 久保田八郎

七月四日の静岡支部大会は八十二名もの出席者を得て大盛況であった。けれど支部代表の野口氏の高徳と地の利によるものだろう。夜のディナーパーティーは特に私の誕生祝いとして開催され、支部の皆さん方のお心尽くしに感動した。この歳になるまで他人様から誕生日を祝ってもらったのはこれが最初である。

翌五日は野口氏のお世話で三十二人乗りの豪華観光バスを借り切って静岡市と清水市の観光に出かけた。参加人員が三十二名だからびびりたり。

午前中、まず静岡市内の登呂遺跡へ行く。二千年前の弥生式の水田跡を見学し、円型の縦穴住居の中へ入って外へ出た頃から、空中が気になりだした。何かが出て現しているのではないかと、しきりに空を見上げていると、鳥が二羽飛んでいる

付近を、別な黒い物体が直線状に右から左へゆっくりと飛ぶのが見えた。

最初は鳥かなと思っただけが、他の本物の鳥のように羽をばたつかせない。変だなと思っただけで、円盤だという印象が強烈にわいてきた。右手を上げてその物体を指さしていたが、「円盤が出たぞーッ」と大声で叫ぶのはカッコわるいので、黙って指さしたままでいると、皆さんも私の動作に気づいて空中を見上げた。「あれは鳥ではないなあ」と、つとめて冷静さをよそおいながら私が発音すると、

旭川市にまたもUFOが

〈旭川支部代表〉 石川公一

〈その1〉

去る六月二十日に開催された旭川・札幌合同支部大会の一週間ほど前、上空に黒い物体が四機飛行するのを目撃しました。ちょうど愛車を運転中のことだったので、通常のものとは異なっていたようでした。時間帯は午後二時頃。音もせず、それでいて戦闘機のように乱れることなく方向を変えて私の視界から消えてゆきました。

あとで確認のため陸上自衛隊にヘリコプターを飛ばせていたのかを問い合わせをしたのですが反応が悪くはつきりした解答が得られませんでした。ところが先日(八月末)上空にヘリコプター九機が飛行しているのを見、勤務先に自衛隊出身の人が居たので質問してみました

横口氏も合づちを打つ。「円盤だ、円盤だ」という声が続々におこる。

黒い物体はかなり遠くまで飛んで、樹木越しに視界から消えていった。この日私が物体を見たのはこのときだけだが、あとで聞くと、他の場所でもときどき出現したらしく、大体に二機の円盤が見え隠れしながら私たち一行を空中からついてまわったようだ。終日、円盤に見守られていたような素晴らしい一日だった。

ろ、東京から上官を乗せて特別にヘリコプターで送り迎えることがあるとのことでした。しかし、その時の飛行状態ははつきりとヘリコプターであることが判りましたし点滅(赤いランプ)もしていません。いずれも日昼の出来事でした。それから判断すると、やはり円盤らしいと言える可能性が大であると思います。

〈その2〉

去る八月八日(第二日曜日)旭川支部月例研究会が行われ、いつものように本部に於ける会長のテープを公開し座談会などを終え、会場も暑かったせいもあり、近くの常盤公園を全員で散歩し、川沿いのサイクリング・ロードの下で和気あいあいと語り合っていたところ突然、銀白

色に光る黒っぽい物体が旭橋の上空を鷹栖町方面から飛んで来るのを目撃しました。有志の中にはUFOではないのでは?と疑問を投げかける人もいたせいか、物体は同じコースを一度にわたり、そして同じ速度でゆっくりと飛行してゆきました。あきらかに人工衛星とは違いましたし、ヘリコプターやその他の地球製のものとは違っていました。残念なことにカメラを持っていなかったので撮影できませんでした。しかし、それを全員一致でUFOであると確認確認できたことは素晴らしいことです。

このUFOの特徴といえば札幌の西円山病院で療養中の吉田ゆう子さんが目撃した昨年の秋出現したというアダマススキー型の円盤と良く似たところがあります。黒っぽい万年筆のキャップ型であり、しかもピカッ、ピカッと乳白色に信符を送るかのように時々光を放ちながら飛行する様子など全く同じであると言えます。これは絶対に偶然ではありません。

ちょうどその日、仙台支部の石田義雄氏が遠路はるばる旭川に見えられていたので激励を兼ねての訪問だったのでしようか。このことで私達日本GAPがスベールブラザーズの注目をあびているらしいことがうかがわれます。

尚、UFO目撃時間帯は午後四時頃で飛行時間は五分前後の間に二度です。大きな見かけ上直径十センチ位です。方角はおおよそ西から東にかけてだと思えます。

☆ ☆ ☆

謎の巨石と 太陽円盤の国へ

第4回日本GAP海外研修旅行

「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」紀行

久保田八郎



日本GAPは第四回目の海外研修旅行として謎に満ちた古代エジプトの壮大な巨石文化と、神秘的なポルトガル・ファティマの重大事件跡の視察を主体にしたヨーロッパ六カ国をまわる大旅行を実施。去る八月十五日に総員二十四名で成田空港を出発し、大成功裡に二十九日全員無事帰国した。ご支援を頂いた全会員の方々に衷心よりお礼を申し上げる次第である。

不思議なGAPの旅行

以下はその紀行だが、繁雑を避けてエジプトとファティマをおもに愉しかった旅の日々を回想してみたい。

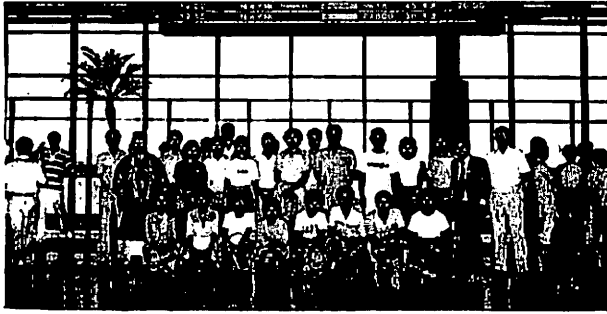
一年前より提携旅行会社の田中正氏と十数回にわたる打合せを経て練りに練った企画がついに実現。八月十五日午後、六時十八分にアリタリア航空のジャンボ機七八九便で離陸した。当初応募人員が少ないうえに実施が危ぶまれたが、旅行団がカイロ市内を歩いている光景を五月上旬に透視したというテレバシストの田中さんの予言が見事に的中して一行は勇躍壮途についたのである（参加者氏名は左写真真説明を参照）。

私自身の海外旅行はこれで計九回目、私が企画した海外団体旅行は通算六回目になるのだが、いつも全く支障なしに成功するので不安感もかけらもない。危険をのがれる特殊な運命を持つ私が随行する旅は本当に危険な状態が発生しないのだ。「久保田先生が同行されるGAPの旅行ほど不思議なものはありません。

私は過去数十回団体旅行の世話をしましたが、大抵はなにかとトラブルが発生するのに、GAPの旅行だけは何の支障もなしにスムーズにゆくのですからねえ。これは全く不思議です」と添乗員として案内された田中さんも旅行中に語っておられた。これは私の「特殊な運命」というよりもむしろ参加者全員の抜群の協力ぶりがあるのを知っているのだろう。いつも集合時間に十分と遅れる人はいないし、荷物の集積なども整然としており、わがまま勝手なことを言って添乗員や団長をてこずらせたりする人は皆無だから、毎回現地在住の日本人ガイドさん方から「こんな立派な旅行団は見たことがない」と称賛的になる。宇宙哲学は実践してこそ生きてくるのだ。これまでのGAP旅行に参加された方々の名譽のために、このことを特筆大書しておきたい。そして毎回添乗員として世話をされる田中さんの奉仕的なご尽力にも衷心より感謝したい。普通の添乗員は事務的に働いて夕食頃から姿を消すものだが、田中さんは毎日一同が就寝するまで面倒を見る人で、今回も並々ならぬご配慮を頂いた。この点でも私たちはずいぶん恵まれていた。

親日的なエジプト人

機は途中、香港、バンコック、ニューデリーに各一時間ずつ立ち寄って、現地時間で朝の八時十五分にギリシアのアテナ空港に着いた。出発以来ちょうど二十時間目で、長い夜だった。乗り継ぎの便がわるく、この空港内で約八時間待機し



▲成田空港に集結したGAP旅行団。前列左より高野マチ子(秋田県)、野島隆子(高知市)、大橋博子(北海道)、紺谷富美子(大阪)、原美佐子(新潟市)、原永庫(東京)、萩森孝雄(京都)、南部理佳(金沢市)、田中正(添乗員・神奈川県)、久保田八郎(団長・東京)。
後列左より青藤康美(大阪)、津野田俊行(熊本)、荻原昭彦(神奈川県)、高橋美保子(青森県)、鈴木芳美(静岡県)、高平圭子(和歌山県)、日山良一(新潟県)、安藤重雄(宮城県)、渡辺康英(横浜市)、山中正紀(横浜市)、南部外茂治(金沢市)、能登春美(富山県)、品野友一(埼玉県)。

だが、不平を言う人は一人もいない。
四時三十五分にTW八四〇便で出発し、飛行時間一時間三十三分後にカイロ空港に到着。ただちにバスでカイロ郊外のギザに近いホテルを目指して出発する。エジプトへは五年前に来たことがあるので初回ほどの感動は起こらないが、五千年の歴史を秘めたこの国の原始的な風景からかもし出されるエキゾティシズム(異国情緒)にはこたえられない。
途中、サゲト大統領が暗殺された現場を見る。スタジアムのような観覧席があつて、その中央のまん前に座つていた大統領が倒れたという位置をのぞき込む。広い道路をへだてた真向かいにピラミッド

D型の大きな記念碑があり、その前には大統領の遺体を取めた石棺が安置されて、銃を持った数名の兵隊が警戒している。
夜九時十五分にホテル「ホリデイ・イン・ピラミッド」に着いた。まだ外は明るい。ふと見ると雄大なピラミッドが眼前にそびえているではないか。「また来たのだ」と心がときめく。

到着が遅くなつたために、この日の合同夕食会は中止して、各自で食事をすまると、一人の日本人が元氣よく話しかけてピラミッドをすすめる。話を聞くと、この人は五年前に団体でカイロへ来たとき、夕食会を開いた日本料理店「岡本」の経営者、岡本氏だつた。愉快な人なつこい人物で、エジプトに関して有益な情報を提供してくれたが、特にエジプト人の対日感情に関する話は興味深かつた。
氏によると、太平洋戦争の発端(昭和十六年十二月十日、日本海軍航空隊がイギリス海軍の不沈戦艦といわれたプリン

ス・オヴ・ウェールズやレパルスを沈めたときはカイロで大騒ぎになつて、エジプト人たちは日本軍の戦勝を祝つて提燈行列をやつたという。これはイギリスの圧政に苦しめられた歴史を持つエジプトが溜飲をさげたからだ。戦争をやるからには勝たねばだめだという簡単な法則が意外にも遠い外国で生きている。
以来エジプト人は日本人を英雄として尊敬し、親日的になつた。現在もエジプト人が最も好むのは日本人、ドイツ人、アメリカ人で、これらはエジプトに経済援助をしているからで、最も嫌つてい

のはソ連だという。かつてナセルの親ソ政策当時、ソ連は狡猾な手段でエジプトから金塊その他の貴重な資源を持ち去つた。現政府はサゲト路線を継いで自由世界の一員としてうまくやつていける。エジプト人は心から平和を愛する民族で、他人と争うことを好まない等々、岡本氏と連れの同店エジプト人支配人から有益な話をうんと聞いた。英語の達者な支配人とはピラミッドの起源について語り合つた。彼は、彼の墳墓、説を支持して

謎の大ピラミッドへ

翌十七日は九時にバスでホテルを出発してギザのピラミッド見学に行く。五、六分で三大ピラミッドのそばへ到着、ただちに左端の最大の建造物、クフ王の大ピラミッドの内部トンネルへ入る。

紀元前三千年頃のナルメル王による第一王朝の成立以来悠久五千年のエジプトの歴史は大変複雑なのでここに詳述する余裕はないが、古王国時代、第四王朝のスネフル王がダハシユールに断面の型が二等辺三角形である真正ピラミッドを建造した。次にその息子のクフ王がギザに一辺の長さ三〇メートル、完成時の高さ一四六メートルという途方もない大ピラミッドを建立し、これにならつて後継者のカフラー王、メンカウラー王の二人もピラミッドを並べて建造したといわれている。紀元前二七三三年から二五六三年までの百六十年間で、今を去る四千六百年昔だ。これがギザの三大ピラミッド



▲大スフィンクの前で。右はクフ、左はカフラーのピラッド。

である。クフ王のものが最大なので、これを大ピラミッドという。エジプトには八十数基のピラミッドが存在するのだが、この三つとはび抜けて大きい。

建造の動機や理由は判然としなければ、大に王の権力を誇示するために巨大にしたのだというが、ここで素朴な疑問が生じる。いくらなんでも王の墳墓や権力の象徴にしては大きすぎるのだ。また現代科学の粋を集めた建築技術をもつても建造は困難だといふこの大ピラミッドを、実際には、いつ頃、だれが、どのような方法で作つたかは全くの謎である。建設法に関しては古来無数の書物が出現

したけれども、いずれも懐測の域を出ない。それらの図書や資料の内容をいま紹介するのは煩瑣になるので省略しよう。しかしこれについては本号掲載の記事「宇宙と愛について(3)」に述べられているので参照されたい。

私たちのガイドはエジプト人のシエハブ・ファリス氏。まだ二十三歳という若さで、名門カイロ大学で二年間日本語を勉強しただけというが、日本語はおそろしく達者で、多少の訛りはあるものの文法の誤りは全くない。大阪外大から来た三人の日本人教授から学んだという。ファリス氏もさることながら教えた先生方もよほど優秀だったのだろう。

東京へ遊びに来たことのあるファリス氏は大の親日家で、将来は日本人女性をお嫁さんにするのだと言っていた。色白の白人系の好青年である。

エジプトは七世紀なかばにアラブ人が侵略し、ビザンチン帝国にかわって支配権を握って以来アラブ人を主体とする各種民族の複合体となったが、紀元前最後の王朝たるプトレマイオス朝の興亡に関連してギリシア人やローマ人が入植したために現在も白系エジプト人がかなりいる。しかし官語はアラビア語を用いている。

ロマンティシズムの極致

大ピラミッドの天井の低いトンネルは西暦八一三年から四三年まで在位したアラブ人カリフのアル・マムーンが盗掘用に掘ったもので、その後、正規の入口が

上方に発見されたけれども見学者用の入口としては今もこの盗掘用トンネルが用いられている。五年前ここへ入ったときは前夜一睡もしなかったためにえらい目にあつたが、今日は体調がよいので、四つん這いになりながら元氣よく登って行く。

やがて正規の大回廊に出て更に登ると王の玄室といわれる部屋にたどり着く。内部はむしろ汗が滴のように流れる。奥の方に花崗岩製の石棺といわれるものがあるが、中からはらっぱだ。むかしアル・マムーンがここで遺体を発見したという伝説があるけれども確証はない。

この玄室では奇妙な事実気付く。エジプトのあらゆる地下墳墓の壁に彫り込まれているヒエログリフ(象形文字)や壁面類が一切見当たらないのだ。これについても種々の説があるが、その内容も省く。とにかく玄室というにはあまりに殺風景である。

ピラミッドの外へ出てからスフィンクス神殿へ行き、クフ王の遺体が入っているという四角い穴を見たあと、大スフィンクスと二つのピラミッドをバックに全員で記念撮影をする。午前中なので日差しはさほど暑くない。

十一時にバスでカイロ市内のエジプト考古学博物館へむかって出発。この頃からピラミッドへ各国の見学者がどっと押し寄せて来た。

世界有数の大博物館に着いて中へ入ると、ここも押すな押すなの大盛況。館内での撮影は禁止されているので入口でカメラを預けねばならない。一階の古王国



▲カイロ博物館蔵のツタンカーメン王の玉座(椅子)の背もたれに描かれた絵を現代のエジプト人が、バヒルスに模写したものの。王妃が香油を塗っている。

時代のメンカウラー王と二女神像、ジェセル王座像、カフラー王座像、書記像、ラーヘテブとネフェルト夫妻の座像、その他溜め息の出るような世界の至宝ともいふべきおびただしい出土品をざっと見学してから、圧巻である二階のツタンカーメン王の大秘宝室へ入った。

五年前にここへ来たときは驚異と感動で打ち震えたが、今回も変わらない。前回見落とした物を今度は徹底的に見ようと思いがちだが、気がかりあせってままたらぬ。それにガイドさんがせきたてるからよけいにイライラする。日本にも来た名高い黄金のマスク、王の体に香油を塗る王妃アンケスエンアーメンの姿を背も

たれに描いた玉座、黄金の戦車、棺や巨大な厨子、金と玉石の優美な装身具、王が身につけていた下着など約三千四百年前の豪華な副葬品が山のように展示してある。

右奥には十五、六歳だったと思われる王妃が最後に棺の上に供えたとする矢車草の花束がガラスケースに収められている。かなり黒ずんでいるけれども、数千年昔のものとは思えないほどに形がよく保たれている。千七百点に及ぶ王の出土品のなかでこの花束が最高に価値のあるものだ。大橋博子さん(北海道)に話す。これこそ地上世界における男女の絆の象徴であり、ロマンティシズムの極致である。

う。その花束が三千四百年後まで見事に残ってその絆を我々の目に示したからだ。

十八歳の王にしてこれほどに賢をつくしたのだから、他の有名な王になると死亡時の副葬品は想像を絶したものであつたらうが、ほとんど盗掘されてしまい、完全に出土したのはツタンカーメン王のものだけである。この部屋だけでも二三日かけて見学しないと頭に残らないだろう。わずかに十分やそこらではどうしようもない。後髪を引かれる思いで出て行った。余裕があれば単身でもう一度エジプトを訪れたい。そしてあの矢草草をいつまでも凝視したい。

横暴なラムセス二世

カイロ市内の日本料理店「岡本」で昼食をとって四時すぎ、メネス王によって造営された古代の都メンフィスの廃墟へ行き、あお向けに倒れたラムセス二世、(第十九王朝の王。三千三百年前)の巨大な像を見る。建物で覆われた石灰岩の十八トンもある像は地震でひっくり返つたという。この王はきわめて自己顕示欲の強い人物で、暴君だつたらしい。エジプト中あちこちに自分の像を建立している。モーゼがイスラエル人の大部隊を連れてエジプトから脱出を取行したのはこの王の治世下といわれている(本誌前号の映画「十戒」解説参照)。

九時半にバスで出て十分後にサッカラへ着いた。ここは古王国第三王朝時代建立のジエセル王の階段状ピラミッドで有名な場所だ。大臣のイムヘテプが設計し

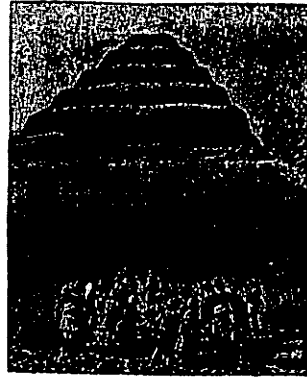
たもので、四千七百年前の遺跡である。

この階段状ピラミッドがギザの三大ピラミッド建設技術の基礎になったというが、どう見てもそうは思えない。両者は全く異なる物だと五年前にもここで感じたのだが、今回も同じフィーリングがわき起こる。

この付近にはマスタバ墳墓があり、ピラミッドの北側の丘へ上がると遠く北方にギザのピラミッド群が広大な砂漠の彼方に夢のように浮き上がっている。素晴らしい光景だ。

この夜ホテルで最初の全員合同夕食会を開催した。

◀ サッカラの階段状ピラミッド。野島哲浩氏(高知市)撮影。



豪壮なカルナック神殿とルクソール神殿

翌十八日は早朝五時すぎに起床し、七時二十分にカイロ空港を離陸、八時五十分には砂漠の中の小さなルクソール空港に着いた。ここはナイル河畔の新王国時代の大都市テーベが繁栄した所で、東岸に

巨大な石造のカルナック神殿やルクソール神殿群が屹立している。

ルクソール神殿群が屹立している。

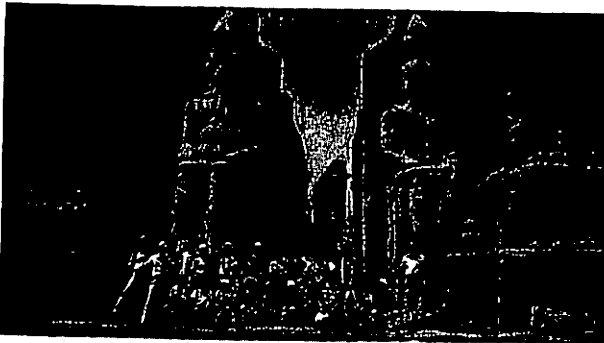
八時五十分にはエタップホテルへ入って休憩。広い立派なロビーで座っているうちに、五年前にもこのホテルで休憩したことを思い出した。前回と違って今夜はここで一泊するので気は楽だ。

九時三十分にはホテルを出て、まずカルナック神殿へ行く。途中の風景は五年前と少しも変わらない。ガラベイヤというエジプトの民族衣装を身にまとった美しいエジプト人たちが往来し、ロバに乗って両足を振りながら進行する男や、頭上に物を乗せて歩く女など、原始的な風景が展開する。

五年前は午後の猛烈な暑さにへたばつたので、今度は涼しい午前中を選んだのだが、これはよかった。神殿のおびただしいスフィンクスに迎えられて第一塔門を通り、第一中庭へ入ってから気温を計ってみるとセ氏三十四度。たいしたことはない。日中の温度差が三十度にも達するこの地方では午後になると四十度を超えるのだ。

第二塔門入口の所で全員の写真を撮る。入口の両側にはまたもパネジエムと呼ばれるラムセス二世の巨像と、別なラムセス二世の巨像が向かい合っている。更に奥へ入って大列柱の間を通り、トトメス一世のオペリスクヤその娘で男まさりのハトシエプスト女王の高き三十メートルに達するオペリスクヤなどを仰ぎ見る。

このカルナック神殿は中王国時代の第十二王朝以降、アメン神崇拝の神殿がここで造営されるようになり、以来クレオ・ローマン時代に至る二千年間歴代の王



▲ルクソール神殿のラムセス二世の巨像の前で。

が建物を寄進してふくれ上がった複合体である。十数トンもある巨石をどうして積み上げたのかと首をひねりたくなる大列柱のあいだを適避すると、圧倒されて息がつまりそうだ。数千年昔の古代エジプトの巨石文化は驚嘆どころではなく不思議な感じさえする。各柱の表面には象形文字や絵画の見事な浮彫がぎっしりと残されており、これが現実なのかと眼を瞬きながら歩く。まるで白昼夢だ。

十一時にバスで三キロ離れた南方のルクソール神殿へ行く。これはカルナックの付属神殿として建立されたもので、前回はあまりに暑いのでここへは寄りな

った。大部分は第十八王朝のアメンヘテブ三世と第十九王朝のラムセス二世の治世に建てられたものである。

カルナツク神殿上空のUFO!

ここではイヤというほど多くのラムセス二世像が目につく。まず第一塔門の入口の所にラムセス二世の一对の座像と四個の立像がある。立像は右端のものだけが立って、他は倒れている。奥へ入るとラムセス二世の中庭があり、二列の大列柱のうち内側の一列はラムセス二世の立像になっている。この中庭の南中央にあるラムセス二世の座像のうしろにアメンヘテブ三世の第二塔門があり、そこを通ると高さ十六メートルの開花式パピルス型の柱頭を持つ見事な大石柱が片側七本、両側で計十四本並んでいる。門を入ってすぐ左にツタンカーメン王の座像が残っているが、彫り込まれた王の名前をラムセス二世が消して自分の名前にすり替えたという。二世のやりそうなことだ。

この神殿内で津野田和尚の僧服姿を女性の多いフランス人のグループが珍しがって寄ってきたので私が英語で服装の説明をすると一同大喜びする。中米でも南米でもそうだったが、私の体験によれば、海外旅行中日本人に最も親近感を示した白人はフランス人で、次がスペイン人、ポーランド人あたりだ。どこへ行ってもアメリカ人は日本人を見て見ぬふりをする。イギリス人も日本人を相手にしない。ドイツ人は昔の日独伊三国同盟の頃のように親近感を持たぬようだが、実態はよくわからない。日本人を毛嫌いしている風でもなさそうだが、なにか不可視の壁にさえぎられているような感じがする。

十一時五十分にはホテルへ帰ってひと休み、昼食後は自由行動なので私は自室でぐっすりと眠った。七時より二階の大食堂で全員夕食会を開き、八時十五分には全員バスでカルナツクへ向かう。今夜は神殿の光と音のショーを見に行くのだ。第一塔門前で降りると、いるわ、いるわ、各国の観光客が大群集をなしている。

そのうちの半数は日本人らしい。よくもこんな日本人が来るものだと思心する。これはヨーロッパ各国でも感じた。昼間通ったのと同じコースをゆっくり前進するにつれて、まずスフィンクス参道と第一塔門が強烈なサーチライトで暗闇の中に浮かび上がって美しい。これを説明するイギリス英語がスピーカーから大きく響く。ひとしきり続くと次に大列柱が照らされて群集は立ち止まる。スピーカーの音が響く、というようなショーである。五年前にギザのピラミッドの光と音のショーを見たが、ここではギザのような各種の色光ではなくて、オレンジ色のモノクロームの光を照射するだけなのに、それでも壮麗だ。

仲間とはぐれないようにゆっくり前進していると、第七塔門前の広場で、そばにいた高野マチ子さんが、「あれは人工衛星でしょうか」と呼びかける。空を見るとオレンジ色の光体が天頂付近を左から右にゆっくりと直線状に進行している。人工衛星にしては少し速すぎるような気がしたが、「そうかもしれないなあ」と

答えながら見続けていると、光体は急にパッと消滅した。「あれっ」と思って凝視したが、もう出現しなかった。実は私も今夜ここで何か出そうな気がしたので、ときどき空を見上げていたのだ。UFOだ、と直感したのだが、そのまま前進した。群集の中にいるのだから立ち止まっているわけにはゆかない。

あとでわかったのだが、高橋美保子さん(弘前市)もやはりこの夜驚愕らしい目撃をしていた。以下彼女の話を記録したとおり記してみよう。

「今まで私はUFOを目撃したことがないので、ショーの夜、現地へ行ったとき、何か空中に出現するのではないかと、う期待感がありました。私はグループの最後について、津野田さんと話しながら歩いていました。

どちらが先にみつけたか覚えていませんが、白っぽい光体が空中に動いているのが見えたんです。場所はスタンド(注)聖なる池のうしろの観覧席)へ行く前の石の階段の踊り場のような所です。

その光体のそばを赤色灯をつけた飛行機が通りすぎました。するとうしろから斉藤さんら四五人が来たので、呼びかけて、白い光体を指さしながら「円盤よ」と言ったら、その人たちは「あれは飛行機だ」と言って通りすぎました。そのあと日山さんが来て階段を登って行きまし

た。なおも空を見続けましたところ、白光

体がパツパツと点滅しながらジグザグに動いたので、あつ、動いている」と言っていたけど、津野田さんは「見えない」と言っていました。そしてライトがまぶしいと言って階段を登って行きました。

私も階段を登って行ったが光体はジグザグをやめて、光が薄くなりながら降下して山のむこう側へ隠れて行きました。隠れる直前に写真を撮りましたが、写っているかどうかはわかりません。

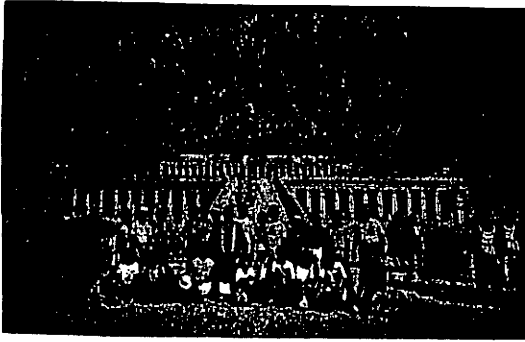
最初の目撃から最後に見えなくなるまでの時間は四十五分間です。初めてUFOというものを見たので、すごく嬉しくなりました。その後かなり時間がたつてから柱のそばの空中に白っぽい光体がゆらゆらしているの不思議な感じがしました。五分ぐらいしてその光体は少し上昇しました」

これで少なくとも三名は目撃したことになる。その他数名も見ることがあとで判明した。千名はいたと思われる群集がなぜ気づかなかつたのか。

理由は簡単だ。群集はUFOのことなど思いもせずに遺跡に目をうばわれていて、上空を見上げようとしなから見えなかつたのである。

壮麗なハトシエブスト女王葬祭殿

翌十九日は朝七時三十分にはバスでホテルを出た。今日はナイル川西岸の王家の谷の見学だ。ここも五年前に来たので様子はわかつていいる。渡し船で川を渡って対岸へ着くと土民の物売りがしつこくつきまとう。しかもやたら私のまわりに群



▲ハトシェブスト女王葬祭殿

がって来る。腹が出ているので金持ちに見えるらしい。彼らが売る石灰板の浮彫を見ると、五年前よりも技術は進歩している。十ドルというのを値切つて五ドルで一枚買った。市内の土産物店で買うよりは安いだろう。

一点の雲もない快晴下の砂漠地帯をバスは疾走する。爽快な日だ。

まずアメンオフィス三世のメチャメチャに破壊された二対の座像を見てから、次にデル・エル・バハリ地区のハトシェブスト女王葬祭殿へ行く。ポーランド調査隊による復元作業は五年前よりもかなり進行して美しく整備されている。

第十八王朝の女王の寵臣セムウトが設計したこの神殿は古代エジプト建築の最高傑作といわれるもので、巨大な岩山

をバックに四角の列柱が朝の陽光をあげて燦然と輝いている。

夫のトトメス一世とのあいだに子供がでなかつたので、妾腹の子を跡継ぎにしてトトメス三世とし、みずから摂政として全エジプトに采配を振るい、交易に力を尽くした偉大なこの女王を、成長した三世はひどく憎悪して彼女の名をすべて抹殺しようとした。葬祭殿内の壁に描かれた女王の絵の首の部分は跡形もなく削られている。こうした人間関係は三千年五百年昔も今も変わらないようだ。

ちなみにファリス氏はハトシェブストをハチエブセットと発音していた。

壮大な王家の谷へ

そのあと王家の谷へ行く。五年前の土の道路はアスファルトで舗装されて快適だ。案外に日本の経済援助で開発されているのではないかと考えるうちにツタンカーメン王の地下墳墓に到着する。見ると各国の見物人がごった返しており、入口でしばらく待たされる。五年前はカメラも自由に持ち込めたのに、今は警備が厳重になって入口でカメラを預けねばならない。まだ午前中だから外気温度はそれほど高くない。

預けたカメラが気になってしようがないけれども、とにかく中へ入った。

一九二二年、イギリス人のハワード・カーターが劇的な発見をして一躍有名になったこの墳墓の千七百点の副葬品のほとんどすべてはカイロの国立博物館へ送られ、玄室には石棺の中の黄金の人型棺

だけが残されて、この中には王のミイラが今も安置されている。壁にはオシリス神の形をしたツタンカーメン王に後継者のアイ王が口開けの儀式をしている場面と、左方には王が天の女王人のヌウト女神に迎えられて、再生のためにオシリス神と抱擁している場面が描かれている。この壁面は古代エジプト美術関係の図巻に必ず出てくる有名な絵面だ。

私は今それをまたも目撃した。三千四百年前にこれを描いた宮廷画家、最後に棺上に矢草を置いた若き王妃などの体が空間にえがいた軌跡と私のそれとはどこかで交錯しているにちがいない。憂愁に満ちた王妃がいまにも棺のかけから出て来そうなのがする。そして空想よりも時空を超えた過去透視能力への欲求が油然と湧き起る。

外へ出ると暑い。カメラが無事に返ってきたことを喜びながら、続いて隣のラムセス六世の地下王墓へ入る。これは第二十二王朝王墓の典型的なもので、通路から玄室までが一直線に並ぶ奥深い墳墓である。もとはラムセス五世が造営を始めたけれども、その後継者であるラムセス六世に横取りされてしまった。どうもラムセスを名乗る王にロクなのがいないらしい。壁面や柱には象形文字がぎっしりと彫られて壮観だ。

古代エジプト人と現代人の死後観

ここを出てから近くのセティ一世の墳墓へ入る。五年前にはくたびれてここへ入らなかつた私に遠藤昭則君(千葉県)

が、「羽毛あるヘビの壁面を見ました」と語っていたので、今度は見ようと思つて入つてみたら、あつた。

奥に向かう壁の右面に大蛇と羽が見事に彫られている。メキシコの古代マヤのケツアルコアトルとは少々違うけれども、とにかく大きなヘビに羽が生えているのだ。意味不明だが、これで拾い物をしたような感じがする。

王家の谷は死んだ歴代の王を埋葬する場所、副葬品の盗掘を恐れて地下の岩窟墳墓の形式にされた。現在までに五十八基の王墓が発見されている。いずれも遺体はミイラにされ、豪華な日用品が添えられた。ミイラに靈魂が宿つてあの世で生活ができるようにとの配慮にもとづいている。この思想を嗤うわけにはゆかない。現代でもこれに似た葬儀が結構行われているのだ。現代の人間の死後観も三千数百年前のエジプト人と大差はない。掃途アラバスター(一種の大理石)の加工工場へ寄り、十二時にホテルへ帰った。

四時五十五分発の飛行機に乗り、約一時間後にカイロ空港へ着いたが、上空から見るエジプトは茶褐色の大砂漠の連続だ。国土の九十分の一は砂漠だといふ。

美しい西ドイツの風景

翌二十日はエジプトを離れて西ドイツへ向かう日だ。早朝五時にバスでホテルを出て七時五十三分に離陸。疲労のため機内でよく眠つたが、このとき飛行機

がまっ逆様に墜落する夢を見た。我々の飛行機ではないらしい。

十一時四十五分に巨大なフランクフルト空港へ着陸。一時すぎにバスで空港を出る。七年前前に出版界の図書見本市視察旅行で来て、西ドイツの合理主義と科学精神の植化ともいふべき完璧な都市作りや田園作りに驚嘆した私は、まずフランクフルトの都市を皆さんに見せたかったが、コースの都合によりバスはいきなり郊外の田園地帯へ入り、アウトバーン（高速道路）をつつ走るので、皆さんにはピンとこないだろうと気をもみながら風景を眺める。

運転手に尋ねると、このアウトバーンは昔第二次大戦前にヒットラーが建設した道路で、いまは片側四車線になっているけれども、中央寄り二車線は昔のままだという。

曇り空のため天候は憂うつだが、田園風景は素晴らしい。我々日本人が欧米の風景を見て美しいと感じるのは、実は自然の景色ではなく、まるでスタイルの異なる「美しい家屋」が存在するがゆえに美しいと感じるのであるというのが私の持論だが、これは間違いないようだ。自然界自体なら日本もひけをとらないのだが、如何せん家屋のスタイルにまるきり品がないのだ。これは決して皮肉ではなく事実そのものである。赤い屋根に淡い色の壁の重厚なドイツの家屋は、どの一軒でも日本へ持って来れば超高級な文化住宅と映るだろう。内部の様子は私にもわかつている。日本人は逆立ちしても及ばないほど合理的近代的にできているの

だ。このメンタリティー（ものの考え方）の相違を思うと、世界のいづこも人間は皆同じとは考えられない。

また、ドイツのいかなる民家といえども屋外に洗濯物を干している家は皆無である。乾燥機の普及度はよくわからぬが、大体に白人は「他人の目につく所へ下着などをブラさげたりするものではない」という観念に徹しているらしい。だから日光の強いアメリカ西部でも屋外に洗濯物をつり下げている家は全くない。洗濯物を平気で屋外へ干したがる民族ほど劣等民族なのだという私のもう一つの持論も誤ってはいないだろう。

GAPを知っていた婦人たち

私たちはハイデルベルクの駅前で休憩した。すると一人のドイツ人の少年が接近しながら「あなた方は日本人ですか。珍しいですね」と日本人そっくりの発音で話しかけてきた。聞くと日本に十二年いたという。外国語の習得はアタマではなくて「慣れ」なのだということを痛感した一幕だった。

やがてハイデルベルクの町へ入り、由緒あるハイデルベルク大学を見学する。十四世紀に創立されたドイツ最古のこの大学は学生数一万五千人。昔はビールと歌と恋の渦巻く若者の町だったというが、今もその雰囲気をとどめているらしい。大学構内の学生監獄へ入る。壁と天井が落書きだらけの古い部屋は私にはあまり関心がない。「稚氣」を感じさせるからだ。

次にハイデルベルク城へ行く。ここも七年前にきた。十三世紀中葉に神聖ローマ帝国のライン選帝侯の居城だったが、十七世紀にフランス軍に破壊されて以来廢墟と化した。地下には二十二万リットル入る巨大なワインの酒樽があり、ここでニマルク（約二百円）出すとワインを一杯くれる。これは今もやっていた。このグラスは各自記念に持ち帰るのである。小雨がパラつくなかを中庭で大急ぎで全員の記念写真を撮り終えると、山中正紀君（横浜市）がそばへ来て言う。「あそこにいる白人の婦人たちが私たちの胸につけている金星のシンボルマークを見て、「GAP、GAP」と言っていますよ」

見ると、たしかに白人の老婦人数名がカメラをたたくでいる私の方を不思議そうな顔をして見ている。おそらくむかしマリヤ・クーレンカンパが主宰していた頃のドイツGAPのメンバーだった人たちなのだろう。時間があれば私たちのグループのことを説明したかったが、なにせ雨は降りし急いでいたので、そのまま立ち去った。

ちなみに十五日間の旅行で雨にたたられたのはフランクフルトの夕方とハイデルベルクだけで、あとは快晴が多かった。六時頃ホテルへチェックインして、七時に全員でハイデルベルクの町へ夕食と散歩に出る。外気は冷えて寒い。北緯五十度あたりのフランクフルトやハイデルベルクは日本でいえば北海道を通り越して樺太の中心部に相当するから、八月下旬ともなれば寒気が強くなるのだ。真

冬のきびしさが思いやられる。

ハイデルベルクで最も有名なレストラン「ローター・オクセン」に入る。この店は二六〇〇年代から続く名門店で、学生の溜り場となっており、今でもビールを飲んで放歌高吟するという。安いドイツ料理とビールを飲みながら店内を見まわすに、いい年をしたドイツ人のオッサン連がピアノの演奏にあわせて民謡か校歌みたいなものを大声で斉唱している。騒然として話もできない。わがグループ以外に日本人もいるようだが、みなおとなしい、というよりも雰囲気は圧倒されているようだ。

あまり上手ではない老人のピアニストにリクエストしてみた。往年のドイツ映画「会議は踊る」の主題歌「ただ一度の賜物」を演奏してくれと、とつときのドイツ語で頼むと老人は気軽に弾き始めた。しかしドイツ人たちはだれも歌わない。ナチス以前の大昔の映画で可憐なリリアン・ハーヴェイが歌って一世を風靡した曲なのに、知らないのかそれとも古くさくて話にならないのか——。結局、拍手をしたのは私だけだった。

愉快なライン川下り

二十一日は前夜とは打って変わって快晴となるも気温は低くて七氏十九度。上衣を着ていればちょうどよい。

またもアウトバーンをバスで飛ばしてフランクフルトの中心部にある「市場広場」へ着いたのが十時五十分。この一角で聖ニコライ教会をバックに全員記念写



▲フランクフルトの市場広場にて

真を撮影したあと自由に散策する。ライン川の支流マイン川にかかるアイゼルナール橋の上では学生たちが市を開いて日用品を売っている。女子学生に英語で聞いてみると、毎週土曜日にするのだという。日本人なら見向きもしないような安物を並べており、大変な人出だ。

十二時にバスで出発し、美しいヴィースバーデンの町を通過、一時にリュエデスハイムの町に着き、ここで昼食後、遊覧船に乗ってライン川下りを始めた。各国の観光客が乗った大型船の船尾へ出ると風がめっぽう冷たくて寒いので、白タオルで首を覆う。兩岸の風景は素晴らしいが曇天なのが残念。広漠たるブドー畑

の中にゲルマニア大記念塔とかラインシュタイン城、ライヒェンシュタイン城、ヴェルナー教会などの古城や旧跡が望見できる。七年前にもこれを経験したのだが、あのときは快晴で、気分は最高だった。今日はとにかく風が寒い。こんな場合は熱燗の酒をグイグイ飲むに限るのだが（これを内式暖房という）、異国の川の上ではそれもゆかぬ。すると仲間の野島氏（高知市）が船内でワインを買ってきて飲ませて下さったが、これはうまかった。沸かして飲めばもつとよかった。名高いローレライの岩の下の河畔に横文字と並んで日本文字のカタカナで「ローレライ」という大標識がつけてある。



▲ライン川下りの船上でドイツ人家族と共に

七年前にはなかったものだ。いかに日本人が多いかの左証であろう。

河畔に見える町の家並はまるでお伽話の世界の風景だ。四時にザンクト・ゴアスハウゼンの町へ到着して、バスでフランクフルトへ向かう。六時三十分にはホテルへ着いて、九名ばかりで七時半に市内電車で中央駅へ出た。電車は立派な作りだ。駅前の食堂でフランクフルトソーセージをサカナにビールを三杯飲んで陶然とする。

かたわらのテーブルに中年のアメリカ人女性がいて手紙を書いている。見ると横書きするべき横文字を縦に書いていてはないか。つまり我々が縦書きにする日本文字を横倒しにして横書きするのと同じ理屈で、一種のジャグル（見世物的な特殊才能）なのだ。だから人の目につきやすいレストランでやっているのだろう。

このあと大きなディスコへ入った。大劇場のような広い店内にはロックバンドの轟音が鳴り響き、多数の老若男女のドイツ人が踊り狂っている。食事も飲物も出るのでビールを少し飲んでから正面ステージ下の溜り場で原美佐子さん（新潟市）と踊る。群集にもまれるので正規の社交ダンスのステップは踏めない。見ると兄貴の原永郎君（東京）も高橋英保子さんとえらく活発な踊りをやっている。失業者が二百万人いる国というのに熱狂と喧騒の増幅——。

二階の自席に引き揚げて休憩している。調子のよいリズムの曲が流れ始めて、数組の若いドイツ人男女が激しく踊り始



▲フランクフルトのディスコにて。左より筆者、高野マチ子、大橋博子、高橋英保子の諸氏。渡辺康英氏（横浜市）撮影。

めた。ビールの酔いで思い出せない曲だったが、高野マチ子さん踊っているうちに思い出した。なんとタイケ作曲の、「旧友」ではないか。世界の行進曲のトップをゆくこの名曲はナチスのイメージと結びつくのかと思っていたが、そうでもないらしい。依然としてドイツ人に愛好されているようだ。自國の行進曲で興奮して踊るとはいかにもドイツ人らしい。

憧れのファティマを訪れる

この頃から自分がいかに「目」や「耳」や「舌」の感覚器官に振り回されて旅しているかを痛感するようになった。しかも破れるので宇宙瞑想から遠ざかり、夜は丸太のように眠るだけ。マインドと意識との一体化を図って内部の印象を感じ

する宇宙哲学の実践の困難さがよくわかる。

だが、ときには空中からだれかに見られているような気もした。

二十二日の午後一時十五分にフランクフルト空港を出発して、快適な飛行後、イベリア半島の茶褐色の大地をながめながらドイツ時間の四時五分にリスボン空港に着陸する。こちらは快晴で気温も高くてセ氏三十二度ある。

現地時間の三時五十分にはバスでファティマを目指して出発。いきなり田園地帯へ入るが、ポルトガル訪問は初めてなので何もかも珍しくて興味深い。家は白壁に赤屋根が多いが裕福そうではない。オリーブやブドウの畑が多く松の植林も多い。これは樹脂をとってペンキの材料にするためだという。五時すぎに途中のレストランで休憩。さすがに日本人は来ないと見えて土地の人たちが物珍しそうに我々を見る。

こんな山奥かと思われるファティマの町へ着いたのは六時頃で、まだ日は明るい。まず大聖堂へ行く。一九一七年五月十三日の昼すぎ、ルシア・サントスとイトコのフランシスコ・マルト、その妹のジャシント・マルトの三人の子供が美女の幻を見るという劇的な大事件の発生したコーヴァ・ダ・イリアその地である。

昔の大牧草地は跡形もなく舗装されて大きな広場となり、大聖堂が夕日に輝き、その前で群集が礼拝式に参加している。今日は日曜だからミサが行われたのだろう。

ホテルに入ってから八時より二階の大

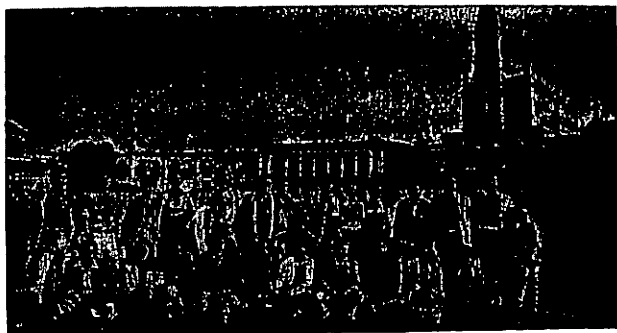
食堂で全員正装して夕食会を開催した。

ポルトガル人の若いウェイトレスたちが珍しそうに我々を見ている。同じ海外旅行でも日本人がめつたに訪れない土地へ行くところに妙味があるのだ。

翌二十三日は朝八時三十分ホテルを出て、すぐ隣にある大聖堂へ見学に出かけた。霧がたちこめて寒い。気温はセ氏十五度という低温で、上衣を着用する。

聖堂は巨大な建物で、内部へ入ると多数のベンチの前方、祭壇の両側にフランシスコとジャシントの遺体を収めた墓がしつらえてある。

大聖堂前広場の左方には三人の子供が



▲ファティマの大聖堂

目撃した位置を記念して祭壇が設けられ、これはガラス張りの建物で覆われている。ここでもミサをやっていた。大円盤が出現したUFO事件のあらゆる事柄がすべてカトリックに利用されてしまったという感じだ。

三人の牧童の家

大聖堂を離れてから次にアル・ジュストレルという土地の三人の牧童の生家を見学する。この地名はファティマ村の大字みたいなものらしい。

まずフランシスコとジャシントの家に行く。かなりな貧家だったようで、二人が使用した粗末なベッドはそのまま残されている。家の中では土産物などを売っており、爺さんと老婆がいたが、これは問題の子供たちの兄妹であることがあとでわかった。このことは家を去ってから聞いたのだが、そうとわかればフランシスコとジャシントについて詳細を聴取できたのにと地団太を踏んだ。椅子に座っていた老婆が私の持つ大判カメラを見て、たいしたカメラだという意味のことをつぶやき、ポルトガル人のガイドさんが日本製だと話していたのは記憶している。ポルトガル語はスペイン語に似ているので、なんとなくわかるのだ。

ルールドのベルナデットの生家であったボリの水車小屋みたいに大幅に改装されるよりも、まだこの家のほうがオリジナルな様子を残していて興味深く參觀できる。

次にルシアの生家へ行く。日本のカト

リックの坊さんが書いた伝記では、両方の家が隣同士となっているが、現地へ行ってみると二百メートル以上は離れている。とかく聖職者の書く本は極端に美化した非実証的な内容のものが多いため注意を要する。しかもルシアをルチア、ジャシントをヤシント、コーヴァ・ダ・イリアをコーワ・ダ・イリア、と書いたりしている。日本で出ているファティマの予言に関する本にもこのような書き方がしてある。おそらくカトリックの坊さんの本をまる移しにしたものだろう。

ルシアの生家にも粗末なベッドが残されていた。現在彼女は老齢なるもコインブラの修道院で健在だという。リスボンの空港に着いたとき、ルシアに会いたいものだポルトガル人のガイドに言ったら、「とんでもない。ローマ法王でさえも彼女には簡単に会えないのだ」と言う。おまえごときが、というように口ぶりだった。これは軽蔑して言っているのではなく、ルシアがいかに尊敬されているかを示すものである。

生家の裏側にはまわると林に囲まれた広い空地があり、隅に井戸があつて、この生水を飲むと病気が治るといので、ポルトガル人のカトリック信者の婦人たちが水を容器につめて持ち帰る光景が見られる。

しかしこの空地には別な重要な意味がある。一九一七年五月十三日の最初のコンタクトが始まる年の前年に、三人の子供たちに「天使」が三度出現して、「来年になったら重大な出来事が発生するから、よい子になつていなさい」と告げた。

ここはその二度目の場所なのだ。つまりここで一人の見知らぬ男が接近したのであって、それをルシアは「天使」と表現したのである。

この場所を離れた私たちは続いてほど遠からぬヴァリーニョスという土地へ行った。ここは八月十九日に第四回目のアパリション（幻）が出現した場所で、八月だけはコーヴァ・ダ・イリアでなく、この場所にコンタクトが移されたのだ。ヒイラギの林に囲まれた空地で、現地にはマリア像を収めたコンクリートの小さな礼拝堂が建ててある。

とかく見ると聞くとは大違いなのでファティマもルールドと同様に大宗教センター化しているのかと思ったが、そうでもないのが安心した。ファティマの事件については拙著「七つの謎と奇跡」（主婦の友社刊）に詳細が出ていたので参照されたい。本誌次号でも宇宙の見地から考察する予定。

堂々たる大都市リスボン

十一時四十分にバスでファティマを出発した私たちはナザレに向かった。澄みきった快晴下のドライブは素晴らしい。山間部を走る車窓から眺めると、日本の風景と大差ないが、家屋のスタイルがやはり違う。レンガに似た茶色のブロックを作り、これを積み上げて壁となし、表面をモルタルで塗って、白い塗料で仕上げをする。屋根は一律に赤い。ポルトガル人はれっきとした白人だから家作りの感覚は東洋人とは異なるのだろう。

ブラジルのサンパウロ大学医学部を卒業して東京の慶応大学病院で研修医をやっている原永庫君がポルトガル語が違者なので、この国では通訳をやってもらって助かった。原君によると、ポルトガルは西欧世界では後進国になつたけれども個人の生活様式は日本人のそれよりもレベルが高いだろうという。

十時三十分にナザレに着いた。漁村として名高いが、いまはかなり観光地化し

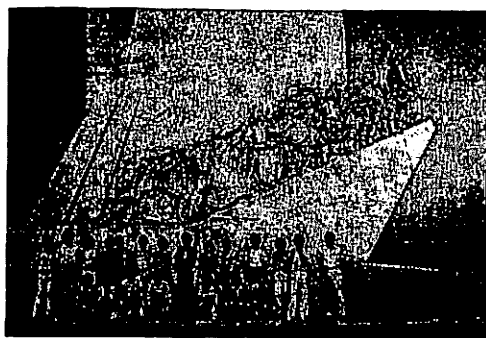


▲筆者と原永庫君。ナザレにて妹の美佐子さんが写す。

る。楽しい感じというものは自分で創り出すものだ」

今回の旅行団が今までにないほどにおとなしくて、いささか活気に欠ける感があったので、バスの中でこれと似たような演説をやったが、これは理解してもらえなかったと思う。つまり他人が楽しい雰囲気をつくってくれないから自分は面白くないというの間違いで、楽しさは自分から創り出すものであるという寸法。

三時よりバスで海岸沿いの高速度を下して五時半にリスボンへ着く。まだ日が明るいののでテージョ河畔のエンリケ航海王子を記念した「発見の記念碑」をバックに全員の写真を撮る。次にジェロニモス大修道院へ入った。石灰石の大建築内部にはヴァスコ・ダ・ガマの遺体を収めた大きな石棺が安置してある。



▲「発見の記念碑」前にて

そのあと市内の目抜き通りや種々の広場などを通ってホテル・フロリダへ着いたのは夕方七時三十分だった。

リスボンはヨーロッパの最西端の都市だから小さな田舎町かと思つたら、どうしてどうして、石造の大きな建物が楕円する重厚な大都市で、クラシックな雰囲気はパリに似たところがある。夜は期待していたポルトガルの民族音楽のファドを聴きに行ったが、哀愁を帯びた曲と演奏にはいまひとつピンとこないものがあった。

二十四日は昼すぎまで自由行動なので各自リスボン市内を歩きまわる。そして五時五分にイベリア航空機で出発して隣国スペインのマドリッドへ向かった。

紙数が尽きたので以下簡単に書く。夕方マドリッドに着いてここに二泊し、その間市内と中世そのままの町トレドを見学。翌二十六日はパリへ飛び市内観光。二十七日は午前十時すぎにローマ着、市内の史跡とサンピエトロ大寺院内を見て、同夜ローマ泊。翌二十八日の昼すぎローマを出発して南回りで楯国の途につき、二十九日の三時すぎに無事成田空港に帰着した。

最初に述べたように今回も全くトラブルのない素晴らしい旅行だった。ご協力頂いた参加者の皆さんに重ねて厚くお礼を申し上げる次第である。

掲載写真の内、撮影者名を明記したものの以外はすべて筆者撮影。集合写真はセルフタイマー使用。

付記

■ポルトガルは別としてこの国へ行っても日本人観光客が驚くほど多い。海外を視察して国際感覚を高めるのは結構なことだが、失礼ながら見知らぬ同胞が貧弱に見えるのは体格のせいでもなく、粗雑なマナーと落ち着きのない態度のせいだろうか。それとも白人コンプレックスから抜け切れないのか。特に若い人がひ弱に見えて仕方がない。

■ローマのレストランで別な日本人観光グループが食事をしていて、五、六十歳の男二人は白い登山帽を脱ぎもせず、口の音をベチャベチャさせて食っていた。すべての日本人がこんな狂っているわけでもあるまいが、それにしても多くの優秀な製品を作り、世界中の白人に使用させている日本人が本当に抜群な民族になるには、もっと国際的なマナーを身につける必要がある。学校でマナーの正課を設けて教えればよいと思う。

一方、わがGAP旅行団の全メンバーは事前に配布された食事その他のマナーに関するテキストを熟読して実行しているから、まるで質が違ふ。

■ヨーロッパであらためて気づいたのは、どの国でも白人女性や日本人以外の東洋人女性はストッキングをはかず、素足にグツ（主としてサンダル型）をはいているという事実である。聞くところによると、各都市の街娼がストッキングをはいているので、それと区別をするためだという。一年中ストッキングをはく女性は日本人と黒人だけということだ。これ

は大変興味深い習慣である。

■日本人は学校で英語を学んだせいから外国ではやたら英語を使う。これは実習になつてよいだろうが、あれほど大勢の日本人がヨーロッパ各国へ押しかけるのだから、買物などで英語がうまくゆかねば、いっそのこと堂々と日本語でやればよい。そうすれば先方も商売だから片言の日本語を覚えて応待するようになる。事実この傾向はヨーロッパの随所で見られた。

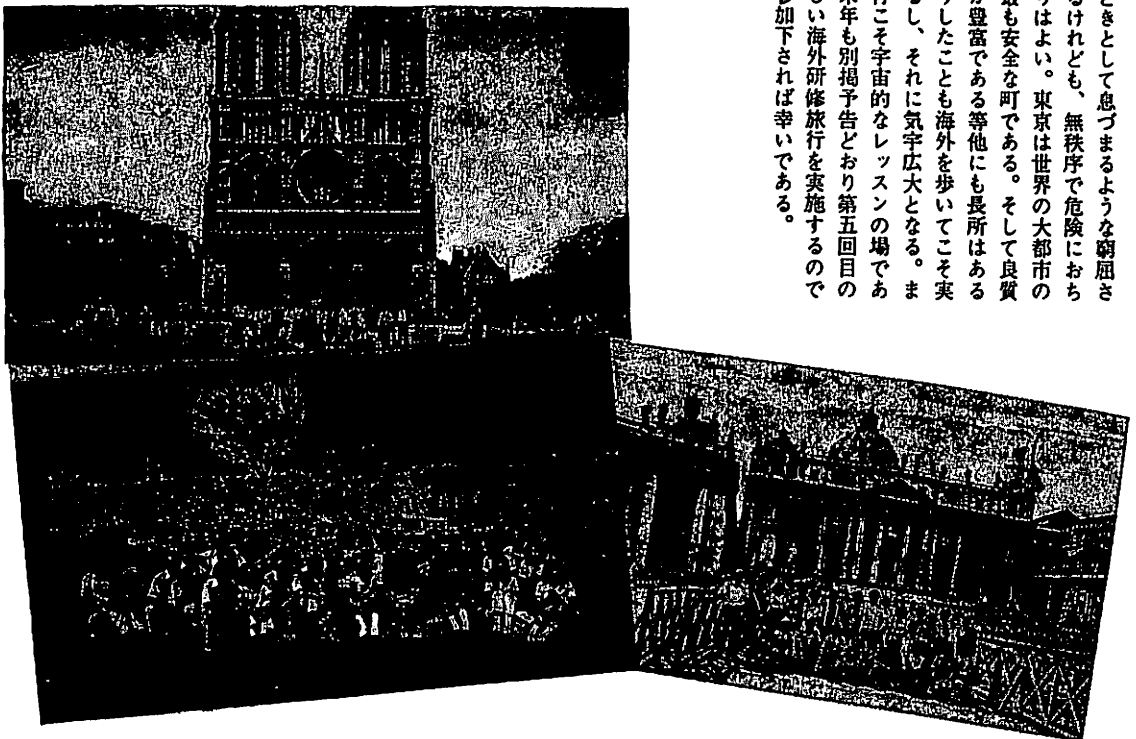
■今回の旅行でも全員記念写真撮影用に国産のホースマンVH-Rを携行した。重たいけれどもレンズが優秀でボディーもアオリ量が多く、西ドイツのリンホフを負かすほどの万能機と考えているので、おおっぴらに振りまわしたが、これは大いに国威発揚に役立った。ドイツ人でさえもこのカメラを目を丸くしてのぞき込む。日本製だと説明するとまた驚く。ちなみにヨーロッパで白人の持つカメラは百パーセント日本製だった。三十七年前の敗戦後の悲惨な国状を回想すると想像を絶した現象としか言いようがない。

旅行中、私の重いカメラバッグを安藤君その他の方が助手としてかついで下さつて大助かりした。大型三脚は渡辺君（横浜）が運搬した。おかげで立派な全員記念写真集が作製できた。あらためて厚くお礼を申し上げる次第（毎回の海外旅行で筆者は全員記念写真集を作製して参加者に頒布している）。

■日本にも比類のない長所はある。まず国内の治安の良さと高度な秩序。あらゆる物事が迅速正確に行われており、でたらめさが無い。しかしユーモアも乏しい

ので、ときとして息づまるような窮屈さを感じるけれども、無秩序で危険に落ちるよりはよい。東京は世界の大都市のなかで最も安全な町である。そして良質な物資が豊富である等他にも長所はあるが、こうしたことも海外を歩いてこそ実感できるし、それに気宇広大となる。まさに旅行こそ宇宙的なレッスンの場である。来年も別掲予告どおり第五回目の素晴らしい海外研修旅行を実施するので多数ご参加下されば幸いである。

▼上はパリ・ノートルダム寺院、下左はスペイン・トレドの町をバックに。下右はローマのサンピエトロ大寺院。



〈到着順〉

憧れのエジプトへ

富山県 能登春英

紺碧の空の下、深として砂漠にそびえるピラミッドを夢みて、ついにエジプトにまで行って来たのです。私の頭の中には憧れの遺跡や遺物のことしかなかった。カイロ市内の想像を絶するような車の列や人の群れやロバが行きかう雑踏にはびつくりしてしまいました。

車中より見る風景は何もかも汚れようがないほど汚れているとても貧しい国ですが、子供達がキャーキャーさわいで遊んでいる姿はとても幸福そうに見えました。アララの神のお蔭なのでしょう。

ルクソールでの光と音のショーの素敵なおナレーションが今でも耳もとにささやいてくるようです。あの時私はちよつとロマンチックになり、神秘的なロマンに浸ってしまいました。

久保田先生はじめ田中様、GAP会員の皆様にはたいへんお世話になり、無事に帰宅できたことを感謝申し上げます。

生涯の宝として

宮城県 安藤澄雄

旅行で一番の楽しみは人との出会いです。遺跡等の建築物にあまり興味の無い私にとって、三回とも（55～57年の研修旅行）新しい友人ができたことが何よりもの贈り物でした。旅行団の方々はもちろん、現地の人々も非常に多くのことを教

えてくれました。このような素晴らしい企画をなさり、ご尽力いただいた久保田会長や田中氏に改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、今回の旅行で私が一番強い印象を感じたところはスベインでした。スベインの街並は見た瞬間からすべて好きになってしまったほどです。しかしそのスベインのなかで最も感動的だったのはそういう「物質」ではなく「音」でした。

8月25日にマドリッドでフラメンコを見に行きましたが、それはテレビで見て想像していたものよりはるかに素朴で親しみやすいものでした。あのけたたましいカステネットはなく、ギターと手拍子によるメロデーは、私にとつては意味不明の歌声にびつたり合っていました。

それが多勢の手拍子だけによる舞台上になつたとき、ふとある光景と印象が浮かびました。夕ぐれの草原でテントを張り終えたジプシーたちが、たき火を囲んでまさにこの手拍子のフラメンコを奏しているのです。そして、私のフラメンコに関する知識は皆無に等しいのですが、フラメンコはもともとジプシーたちが移動中またはキャンプ中の楽しみとして手拍子だけで始めたものではないかという気がしたのです。ギターや踊りがついたのはずつと後になってからのように感じましたが、いかがでしょうか。

ともあれ、旅の疲れが出始めたころではありましたが、とても懐かしく聞き入

っていました。

話は前後しますが、8月17日にエジプト博物館を見学した際、人間は何物をも所有できないことを痛感しました。あんなに多くの遺品に囲まれて死んだもの、どれ一つも持って行けなかった王たちが何ともあわれでした。ただ、展示場の片隅にひっそりと置かれていたドライフラワーを見たときはホッとしました。これでツタンカーメン王も成仏したことでしょう。この花束の前で私を含めて三人がしばらく立ち止まっていました。全く「愛こそすべて」だと感じました。

はじめにも書きましたが、今年も素晴らしい方々と知り合い、行動を共にすることができ、非常に貴重な楽しい記憶になりました。この記憶は私にとつても生涯の宝となるでしょう。皆様大変ありがとうございました。

ピラミッドに感動

東京 原 永庫

昨年11月ニューズレター第75号でエジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅の広告を見た時、これは絶対に行かねばならない、行きたいという強烈な衝動が湧き起こった。その時、私はまだブラジルのサンパウロ大学生で大病院のレジデント試験の準備に追われている真最中。日本へ帰国することさえ決定していなかった時点で出来る事と首つたら、ただただイメージを描くこと。自分が既にエジプトの地にGAPの皆さんと共にいる光景を画き、強烈な信念を自分自身に叩きつけた。それから9カ月、希望通りに

全てが実現してしまい、やはり持つべきものは信念であると改めて実感した次第。

旅行のハイライトは何と首つてもエジプト・ピラミッドをまじかに見た時「これがアトランティスだ」と心の中で叫び、中南米の遺跡を見た時以上に感動してもうそれだけで旅行の全目的を果たしたと感じ、ヨーロッパではあまり新鮮な感動に浸るというようなこともなかった。

しかしただ無感動にヨーロッパ各国を回ったのではなく、自分が今まで8年間暮らしていたサンパウロのルーツをポルトガルとイタリアで発見し、非常に親近感を覚えると同時にブラジルという国がヨーロッパの混合文化によって形成されたものであるという実感等、我が祖国日本と第二の祖国ブラジルを多角的に比較する素晴らしい機会になったと思う。

ポルトガルでは通訳を仰せつかりながら準備不足で満足な結果を得られなかったことを、この場を借りて旅行に参加された皆さんにお詫び申し上げる次第。そして全行程を通じ献身的に我々旅行団の世話を下さった田中さんに最大の敬意を払うと共に、団長としての重責を果たされた久保田先生に感謝の意を捧げたいと思います。本当に有難うございました。

皆さん方から何かを学ぶ

新潟県 日山良一

久保田先生、田中さん始めみなさんお元気ですか。旅行中はたいへんお世話になりました。

二週間の旅行もあつという間に過ぎてしまいほんとうに早く感じました。今回

の旅行で2週間という長期旅行は一応最後だということ、今回申込んでよかったと思いましたが、今までの旅行も行きたかったのですが、いろいろなことを心配して申込みませんでした、自分の心をそういうものから解放できて、それから第四回目の旅行案内が来て、それを見てすぐ、今回こそは行けるノと思えました。旅行そのものよりもGAPの会員の皆さんと一緒に何かをやろうかと思つて第一の目的で申込んだのですが、いろいろと勉強になりました。

エジプトでは、ピラミッドの頂上に昇つて写真でも取つてもらおうかと思つていきましたが残念でした。でも、ルクソールのカルナック神殿の夜のショーでは、星が横に動いて消えるのを見た、聖なる池の所では、高橋さん、津野田さんと三人で円盤に夢中になって飛行機じゃないかと言いながらオレンジ色に光つて飛んでいった物体を見たり(写真に取つたので現像して見たら円盤型に写つていた)しました。

これといつて特別に感じた所はなかったのですが、それぞれの国での感じたことやいろいろな思い出が自分の中に残っています。参加してみても、これからでもきたら又参加したいと思つています。その時はよろしくお願ひします。

大好きなエジプト

秋田県 高野マチ子

一年中雨の降らない国がある事を異國へ旅をして初めて知った。二日と同じ天気が続かない日本では天候は重大な関心

事です。エジプトでは年中青空が当たり前とか。ロンドンやパリでは冬は太陽が出ない事に決まっているそうです。天候以外にも驚きました。フランス、イタリアでは市民の90%がアパート住いだと思います。五階建に統一されたアパートの各ベランダの豊かな花々に心なごむ物がありました。

また国際空港では全ての人々が異なる肌を持ち服装も、教育も、職業も異なる者たちの中で私は愛しさと懐かしさに包まれたものでした。同時に人々の深い孤独も。黒い肌を持つ人々の多い事、彼らを前にして何の異和感も無かった。とても嬉しいことでした。化粧という私たちが美的感覚、何と空しい作業でしょう。当たり前前の事が国によって違う。雨や雷が必ずしも必要でないこと、人間の持つ優しさ、豊かさは経済的、天候や場所とは無関係である事を都会がおしえてくれます。エジプトからヨーロッパへ触れた時の実感でした。

旅の一步であったエジプトが一目好きになつた。持参したフィルム半分の使つた。被写体は貧しい素朴な人たちがほとんどで古代遺跡は数枚だけだった。貧富の差の激しいこと、戦場と化する危機感が在るのに彼らの表情が明るく笑顔がとても美しい。視線が会えば必ず微笑んでくれた。一枚一枚熱い想いを込めてシャッターを押したけれどブレと露光オーバーが目立ちました。四〇度の熱気にAS A四〇〇を選択したのは失敗でした。そんな中でたつた一枚だけ心打たれる写真が撮れていた。メムノン巨像の近くで農

作業していた20歳前の青年と幼い弟、そして牛が草を食べている牧歌的なスナップだが、貧しい者は金持よりも美しい笑顔で笑うという。青年の笑顔は素敵でした。環境が貧しくとも心の豊かさが私を感動させたのかも知れません。エジプトを去る朝、ガイドさんの言葉が忘れられません。それはアラアの神へ私たちの健康と幸福を祈つてマスと言つてくれた。「プア・イズ・ビューティフル」貧しい人はすばらしいと言うマザーテレサの言葉ですが私は少しだけ解つた様な気がした思ひました。夏のクイーンのようにエジプトでもヨーロッパでも咲いていた花があった。狭竹桃の花でも咲いていた花が可憐な花、まだ咲いているだろうか。私達の願いが花の種となって咲かしたものです。ファティマの夜の質疑応答の時間はとても有意義でした。久保田会長、田中さん、そして皆様心から感謝申し上げます。

思うこと多き旅

横浜市 山中正紀

エジプト。悠久なる歴史の聲。巨大石造建築群をナイル河沿いに建設した民の末裔は何処に。

現住のアラブ人に、これだけの文明を築く力なぞ(現代ですら不可能)、はるか昔、出来る筈はない。

機上から見る地平線。はつきりと区分け出来るナイル沿いのオアシスと、ナイルの水の屈かぬ砂漠、また砂漠。その渺茫たる光景は、はかり知れぬ眺なり。水の流れた跡だけある川

は、ナイルに向かつて注いでいた。台地は初期の侵蝕作用のまま取り残されていた。まるで教科書の如く。

カルナック神殿は巨大な芸術であった。そこには、多神教であったキリスト以前の王族、貴族、神官そして人間に生まれながら獣の扱いを受け、一生を過ごした多くの無名の奴隷達。キリストは彼等を解放した。その後二度と再び、このような神祕は造られなかった。

エジプトの歴史の深淵さは、私の心を震憾させた。

ギザのピラミッド。思っていたより規模が小さかった。現在ならP&H百八十吨クレーン一機で、何拾箇月で完成するだろうか? 石の重量の平均は拾超らいと仮定して、問題は石の切り出しである。面白い問題なので、暇があったら計算してみたい。あれだけの重量をささえて、何千年後の今日、傾きもせず、崩れもせず残っていること。当時、岩盤というものを完全に理解して建造したのである。その他、ピラミッドの数々の不思議。侮れない要素は数多くあるが。

西ドイツ。あまり印象がわかない(欧州すべ、印象がうすかった)。しかし日本、エジプト等に比べると、玲瓏な園である。大学時代、ドイツ語の時間に「アールト・ハイデルベルク」というのを教わつたので、ハイデルベルクの地名は知っていた。ハイデルベルクの中庭では、吞兵衛な体つき、等身大につくられた。歴代の王様達が、我々を睥睨していた。ファティマ。あまりにもヨーロッパではキリスト教が強く根ざしている為、事

実をも彎曲して彼等の生活習慣にあわせて、解釈してしまう事実は、日本と些か変りない。ヨーロッパとは名ばかりの、建物は北アフリカを彷彿させる田園地帯。事件は、キリスト教の聖地として、観光地化してしまったのが残念。

リスボン。サンフランシスコに似た街。ゴールデンゲートブリッジに似た赤い大きな吊橋がかかっていた。これ程美しい街は、地球広しと雖も、数少ないことだろう。

スペイン人の大泥棒が、インカ帝国より盗み出した銀を加工して作った銀製品が、マドリッドの王宮に展示してあった。その王宮には、重き二廳のシャンデリアをはじめ、室ごとに掛けられた数多くのシャンデリアだけ見ても、曾て、英国と競合した国力を感ぜさせている。

トレド。中世の城、戦いの跡を見た。ああこゝも、過去に於て、幾千、幾万の兵士の尊い命を、大死にさせたことであろう。キリストが救い主として生まれ、世の中を大変革させたにもかかわらず、ここでは救い主の為に身を捧げた宗教戦争。争うことは、勝つても負けても互いに傷つく。戦争などやめればよいのにと思うが、現在でも、精神的には、古代、中世と変わらずぬ状態にすぎぬ。

パリの建物をみると、フランス建築は女性的。建築学的にすぐれたものでなく、表面着飾りでゴマかしている。ローマ市内の一般の建物（古代でなくゴシック以降）は、それに比べ、すぐれている。見た目は、フランスの如き派手ではないが、芸術的に非常に優れている。むろんどち

らも、日本の建築物とは比べようもない程、高次元での比較であるが。とにかく着懐と、パリ、ローマを見た人間に何が比較など、おいそれとできることかと言われてしまえばそれまでである。

帰国途中、ホンコンで多くの日本人が乗ってきた。ああ、日本人の何とマナーの悪いことよ。その中の一人と思われ五十過ぎの男が孫をだいていた。孫は私の胸のポケットより、ボールペンを取った。取られたとき、私は気づかずにいた。一、二分して、私はそれに気づいた。白人であるなら、*the O.R.A.* の一つも言うところ、「これ、あなたのボールペンか？」等と聞きかえす。すみませんの一言も言わぬ日本人。

成田に着き、機外に出たとたん、正直言って、今までのどの国よりも、最も暑い。湿気があるので、不快感が激しい。それに、日本人のこそこそした態度が、一層不快感を増長させる。

振り返ると、今回の旅行は、訪問国ごとに、短期滞在ではあったが、たいへん有意義な旅行だった。私の人生も、これを機会に、また一つ成長出来たように思われる。

この様なすばらしい旅行を企画した久保田会長の御努力、目だったトラブルは一つもなく、旅行を遂行してくれた田中さんの御苦勞に、心から感謝致し候ふ。

心に残るポルトガル

北海道 大橋博子

ルクソールでのこと。ナイルのほとりて数人とたたずんでいました。ナイル川

の向こう側でもとて素朴な音楽が聞こえてきました。人懐こい少年(?)が、私たちに、私のヒヤリングに間違いないければ、あれは結婚式の音楽だと教えてくれました。

過去形のものばかり見学してきたので現在進行形の音楽とナイル川がとて心地よく、また少年との会話も楽しくとても素晴らしいひとときが過ごせました。

それと、ポルトガルのナザレの海はとても汚なかったのですが、海を眺めていると、心が落ち着きました。海水浴場になっていて、こんな綺麗な海で泳ぐのかなあと思いましたが人々はとても楽しそうでした。ファティマからナザレ、ナザレからリスボンとバス旅行は大へん素晴らしい風景を楽しませてくれました。

ポルトガルはあまり土の肥えていない土地らしく、ぶどう畑が多かったのですが、ファティマからナザレへ行く途中は緑が多く曇っていません。瞬きするのも惜しいくらいでした。6カ国まわってきたのですが、何故かポルトガルが一番心に残りました。白壁と素焼きのような屋根の家。ドイツの息詰まるような綺麗さから一転して心が開放されたのかもしれない。空港に着いた時から気に入ってしまいました。

行きたくても行けない人からみると、私は3回もGAPの研修旅行に参加できとても幸せだと思いました。私の場合、行けない理由がどこを探してもみつからず行つた方がいいということだと思いが加いました。3回を通じて、笑顔が

とても大切なことだと思えました。

日本では知らない人にほほえむことは考えられないことですが、ヨーロッパでは挨拶やほほえみをする、必ず返ってきます。とても素晴らしいことだと思えました。

毎回お世話になった久保田先生と田中さん、今回一緒だったみなさん、どうもありがとうございました。

ルームメイトに教えられる

和歌山県 高平圭子

旅は人生、人生は旅。私はこの旅行で人生の一ステップを踏んだ気がします。やはり、GAPの方と行ってよかったです。今つくづくそう思います。

今でも感動して心に残っている事、それはルームメイトの言葉です。彼女は物に執着心がなく物を持たないことに決めていると言っています。必要以外の物は持たない。そして、彼女の部屋は何もなくガランとしていると教えてくれたのです。それにくらべ私はなんて物に執着するのでしょうか。どうして、すてしてしまうことができないのか。以前子供が見ていたテレビ番組で、金の鳥が宝物をたくさん持ち、その重みで飛ぶことができなかったのですが、最後にやつとすべての宝物をすててしまひ身軽になって大空へ飛び、本来の鳥の幸せをつがんだのを見たことがあります。私は彼女の話を聞き、自分がこの鳥のように思え、とてもはずしくなりました。そして深く反省できた事を彼女に感謝します。

最初から全然道跡に興味がなかったも

のですから、ガイドさんの説明はほとんど記憶に残っていません。興味のあつたのは建築、食事、習慣、ファッション、etc……です。

建築と町の美しさは、ドイツが一番でした。空から見ても陸から見ても、おとぎの国のように美しく、全体に均整がとれていました。特にハイデルベルクは永遠に続く田園、魅力的な家並み、美しい道路、緑が多く無駄のない生活、ああその何もかもが私を魅了してしまいました。もう一度ドイツへ行きたい。そして住んでみたい。強く強くそう思いました。

壮大なカルナック神殿

京都府 萩森孝雄

この度はすばらしい旅行に参加させて頂き誠に有難うございました。エジプトは以前から行きたかった所の一つでした。あの壮大なクフ王のピラミッド、カフラ、メンカウラのピラミッド、そしてスフィンクスなどは脳裡に焼きついてはなれません。一方、対称的なサツカラの階段状ピラミッドは、広大な砂漠にひっそりと過去の歴史を物語っているようで大変気に入ったすばらしい所でした。またカルナック・ルクソール神殿においては、ギザのピラミッドなどにも勝るともおとらぬほどの実に壮大なスケールでラムセス二世の巨大な石像、パピルス・ロータスの柱頭、巨大な石柱群、オペリスク、塔門などの迫力で圧倒させられました。夜の光と音のショーではナレーションも加わり、昼にも増して過去の記憶を思い出させるかのように演出効果もすばらし

いものでした。このような古代遺跡群をながめていると、人間という生きものについて考えさせられます。

今まで何度文明が破壊されてきたか？レムリア、アトランティス、エジプト、ローマなど偉大な文明はみな過ぎ去ってしまいました。何度繰り返せばよいのか？ 崩壊とそして誕生のくり返し、「徳性かかかっているに違いないと……」。過去の過失をくり返さないために各人がまずどん欲と利己主義であるエゴを支配しなければならぬと思います。

十五日間の旅行もあつという間に過ぎ去って楽しかった思い出やいろんな思い出、エジプトそしてヨーロッパ。今回の旅行で最大の収穫は「自由に生きる」とへの大きな目覚めではなかったかと思えます。

GAP旅行団の方々から「自由に生きる」ことの楽しさが教えられたように思います。「どの花も他の花の顕現を通じて自分を知る」と語られているように参加された素晴らしい会員の方々や接することにより、自分を見つめ直す機会が与えられたことは大きな収穫となりました。最後に久保田先生、そして田中さん、参加された会員の方々、そして皆様から感謝いたします。本当にありがとうございます。

(以下次号)

本年五月二日より四日間実施

「沖繩支部大会と南国の旅」に参加して(2)

沖繩の方々の純粋さ

山形県 清水 正

沖繩。そこは美しい青い海と美しいカブルの集う所。太陽がどうかかわらないけれど、とてもまぶしい。しかしついでこの間までいまいましい戦いの場でもあった。現在はアメリカの軍事基地でひっきりなしにジェット機が発着する。いったい時の流れはどんなふうに変えてしまうのだろうか。四日間の滞在であつても何かを学んだ。

このたびの沖繩支部大会に参加できまして、沖繩の方々の熱心な純粋さに触れることが出来、今となってつくづく参加して良かったと思つています。とても素晴らしい体験ばかりで、さすがGAPのやることは高揚感があり人生充実しています。

思い出すことはいっぱいありますが、その中で海洋博記念公園から帰りのバスで暗くなつて思つたのですが、回りがすぐ海のためか街明りが遠くに見えず空がおそろしく奥深く見えたことでした。こんな所では円盤も見えやすいのではないのでしょうか。

沖繩支部大会では田中義則さんと久保田会長の講演も内容深く、特に田中さんの「慈愛の精神」については、「人にあまく自分にきびしくではなく、自分にあまくといつた所から、ある失敗を人に

対してして、それを自分をクヨクヨ責めてもなにもならないこと、普通、人間は他人を許すことはできても、自分を許せないで、こだわる人が多いのではないか。過去は過ぎ去つたことであり、それにしぼられていないか。自分は精一杯現在に生きよう」といった内容だと思いましたが、私の記憶に残りました。

沖繩の方々の御親切には深く感謝いたします。この大会にあつたつて、どのように本土の会員を迎えようかといったことで様々な話し合いや苦勞をされたと思えました。遠く離れていても宇宙哲学を志す人たちが、今生、初対面であつても旧知の仲のように迎えてくださったことが心に残ります。本当に沖繩の皆さんどうもありがとうございました。

そして、この旅に共に参加された皆さん、宇宙的な調和のもとに過ごせましたこと、久保田会長、旅行社の田中さんにはいつも素晴らしい企画をありがとうございました。

忘れられない沖繩の旅

栃木県 大山ひろみ

はじめての沖繩支部大会。でも私にとっては二度目の沖繩。青い海と滴天の星空が再び見られると思つて降り立った沖繩は雨。すこしがっかりしたのだけれど雨の沖繩はめつたにないことだと聞いてきつと忘れられない旅になると思えました。

空港で沖繩支部のみなさんとはじめてお会いして、うわさどおりのもの静かな人達だと思えました。そのままバスに乗

り、南部戦跡、姫百合の塔などを見て回りました。これらは私が以前見たところですが、とてもなつかしく思いました。

こんな美しい沖縄で悲惨な戦争がくり広げられたとは、とても信じられない思いがします。その夜は沖縄の人達の招待で夕食会をひらいていただきました。東京から行った人数の方がはるかに多いのに、沖縄の人達は心よくもてなしてくれて感謝の気持ちでいっぱいです。

支部大会もすばらしいものでした。先生の一時間以上にわたる講演、東京ではなかなか聞くことのできない話もあり、質疑応答の時間もたっぷりとれ、盛況のうちには終わりました。途中新里さんと関さんが屋上で母船を見たそうです。やはり私たちは確かに注目されていることの証明になりそうです。

沖縄が日本に復帰して今年で十年になります。この十年間決して暮らしやすい状態ではなかったというのを聞ききました。私は沖縄を代表する支部のみなさんと今回はじめて話す機会をもったわけですが、彼らはもの静かで、純粹で、誠実で、まさに見習うことばかりです。私自身かなり多くのものを吸収してきました。沖縄の気候や土地がらなども影響するのでしょうが、あまり時間にとらわれないのびのびとした生き方をしたいと思いました。沖縄支部大会と沖縄の旅は私にとって決して忘れることのない最高の旅となりました。四日間にわたって私達をお世話してくださいました沖縄支部の方々、久保田会長、田中さん、ほんとうにありがとうございました。

スペースブラザーに会う?

神奈川県 関 高明

今回の「沖縄支部大会と南国の旅」はほんとうに楽しく、かつ有意義なものでした。今年になってから時間と金銭に余裕がある限りできるだけ地方支部大会に出席し、多くのGAP会員の方々と同様を深め、お互いに知識の交流を図ってゆきたいと考えていました。この点については旅行中、参加された会員の方々から貴重な御意見をいただき、心から感謝しています。

沖縄支部大会は講演、質疑応答、夕食会ともに充実した内容だったと思います。特に田中義則さんの御講演から、他人、自分共に過失を許すことの大切さを教わり、また久保田先生からはGAP創立活動の経緯とそれにつながる体験談、及び深遠なる哲学についての迫力ある御講演を拝聴し、感銘を深くした次第です。質疑応答においても重要な質問が続出し、沖縄支部の方々の純粹で熱心な姿にあらためて感心させられました。

さらに支部大会の昼食時間に沖縄支部会員の新里さんとUFOを目撃することができました。今回の旅行でもUFOが出現するのではないかと期待していたため、ほんとうに嬉しく思いました。また確証はもてませんが、ホテルにスペースブラザー（友星人）が来ていたように思います。五月五日の朝、ホテルのソファに座っておられる方がいました。私が新聞を取ろうとしたとき、こちらを振り向いたのですが、そのときスペース

ブラザー!?という印象を受けたのです。しかし、まさかと思い、そのときは気にしませんでした。旅行から帰って二日目に俄然強いフィーリングが湧き起こってきたため書かせていただきました。その人は上品で澄んだ目をされていて、何か温かい感じのする人でした。

島内の見学においては沖縄支部会員の方の御好意によりマイクロバスで案内していただき、深く感謝しています。支部大会の前日に見学した平和祈念資料館では沖縄戦の悲惨な激烈な戦いを初めて知り、また車内で沖縄支部会員の方から戦争当時の体験をお聞きし、二度とこんなことがあつてはならないと思いました。

支部大会後の島内見学は天気も良く、澄んだ空気と美しい海に接し、とてもさわやかな気分ですごせました。こんなに美しい海はもう何年も見たことがなかったため、すごく感激しました。嘉手納基地、海洋博会場の見学、同会場のビーチでの海水浴、今帰仁城跡等、今も鮮明に脳裏に浮かんできます。

最後になりましたが、沖縄支部会員の方々の並々ならぬ歓待と御配慮に対し、心から御礼申し上げます。また久保田先生、田中正さんをはじめ、旅行に参加されたみなさん、本当にありがとうございました。今回の旅行で得られた知識と体験を糧にこれからも頑張りたいと思います。

楽しかった南国沖縄

東京 野本俊次

先日「沖縄支部大会と南国の旅」に

際しましては有意義かつ楽しいひとときを過ごさせて頂き大変ありがとうございました。今大会に携わられました方々のご苦心ご心労はいかばかりかとご推察申し上げます。

五月二日から那覇空港出発までの四日間に亘り、大会のみならず観光の際にもご多忙中にもかかわらずお世話下さり心より感謝申し上げます。

私は幸いなことに東京月例会には毎回出席し、久保田先生のお話やご指導を直接に仰いでおりますが、今大会時は特に新たな貴重な内容ある教えをいただくことができました。これはひとえに沖縄支部の皆様方の熱意の賜物と嬉しく思っております。

さて私達は表面的には一見平和な日々の中にもありますが、三十数年前の悲惨な出来事を忘れることはできません。沖縄のひめゆり部隊の哀しさを思うとき、広島島の原爆ドームを見たとき私達には一言の説明も必要としません。私達はこの愚かさ、みにくいエゴから脱却するべきことは申すまでもありません。

五月初旬にかかわらず青い海での海水浴、独特なメロディーの沖縄民謡、ヤシの並木路、南国情緒をたえた東南植植物園、みずみずしいパイナップル、五階建のビルがすつぱりとおさまることができるとる鍾乳洞の玉泉洞など。そして沖縄支部の会員の一人一人の顔、東京から同行された各地の会員の方々は今なつかしく思い出されます。

楽しかった今大会の為に尽力された皆様、本当にありがとうございました。

旭川・札幌合同支部大会

- 六月二十日(日)
- 三愛会館(旭川市)
- 出席者 二十七名

去る六月二十日(日)に開催した旭川札幌合同支部大会も大盛況をもって終えることができました。今年で第二回目の本大会は出席者二十七名と少人数ながらも大変高次元な波動をもってアダムスキー哲学の真髄を語り合いました。

午前の部では札幌支部の高野省志氏と旭川支部の川上三秀氏両名の素晴らしい実践体験談の講演に始まり、特別講演として東京本部から松本隆司氏にお願いして科学的な面からとらえた宇宙哲学を興味深く聞かせて頂きました。また午後部の部では、昨年の「アメリカ・メキシコ・カリブ海宇宙考古学の旅」の8ミリ映画を上映、そのあと久保田会長の大講演が行われました。迫力に満ちた創造主の声とも言うべき天使の言葉に、会場は静けさの中にも生ける魂の進むべき道をしみじみと感じとっている様子でした。その後いったん休憩し、全員記念撮影を終えてから座談会形式の質疑応答に入りました。会員の熱心な質問に会長も時間を延長して応えられ、いよいよピークに達したように思えました。とにかく今大会は会員すべての総力の結集が成功に導いたと言えます。

大会終了後の夕食会も紳士・淑女の柔和なフィリングによって美しいハーモニーを奏で、楽しく愉快なものとなりました。そのあと二次会、三次会と続きましたが翌朝は元氣はつらつオロナミンC?とでも言うように、みんな明るくさわ

やかな笑顔で友情をわかち合っていました。

希望者による旭川近郊見学には十八名の有志がマイクロバスに乗り込み、鍾乳洞と田舎の小さな森林公園で時間を過ごしました。

今年の大会では旭川支部の阿部堯氏の司会のうまさに感心しました。とくに、マイクロバスの中でガイドぶりには普断見受けられない才能というものを発揮されているようでした。また、帯広市の大橋博子さんには昨年大会の十勝ワインに続き今年はホワイト・チョコレートとめずらしいケーキのようなお菓子を頂き大変恐縮しております。また、札幌支部の樺田晋彦氏には夕食会の抽選会で立派な品を寄贈して頂き大変感謝する次第です。それと、岩手県の会員、柴田仁氏は今大会のために夜も眠らないですと残業をし、オートバイでかけつけてくれたとのことでジーンと熱いものを感じない訳にはゆきませんでした。本当に御参加ありがとうございました。

最後に、札幌支部代表の伊藤重信氏をはじめとし、幹事役員の皆さん、そして御協力下さった有志の皆さん、そして出席者全員の皆さんに厚く御礼申し上げます。来年は札幌市で合同支部大会を開催の予定です。これからも札幌支部と旭川支部は益々久保田会長と共にスペース・プログラムの一環として大躍進をとげようとして頑張りますので宜しくお願い致します。

(石川公一)



東海地区大会

●七月四日(日)午後一時〜五時

●静岡交通ビル大ホール

●出席者 八十二名

晴天に恵まれた七月四日、待ちに待った名古屋支部と静岡支部の合同の大会が、久保田会長をお迎えして開催された。

大会の前日は東京本部月例会で、久保田先生には月例会終了後、ただちに助手の松村氏をはじめ十数名の方々と共に新幹線で来静された。その夜は歓迎夕食会を行い、夜遅くまで先生を囲み宇宙問題に花が咲いた。

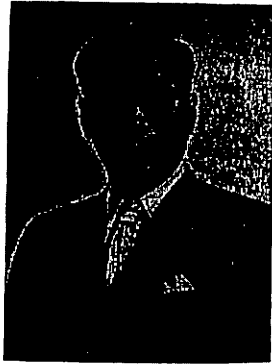
大会当日は、両支部のみなさんが朝から会場の準備に汗を流し、昼前にはすべて整った。そのころから、全国から、ぞくぞくと熱心な方々の姿が見えはじめた。北海道や九州からも参加して下さり八十二名という多くの方々が参加された。林国宜氏の司会で始まり、私そして武田充弘氏の支部代表挨拶、そして会員の体験講演、まず川谷定義氏、次は予定していた黒田保夫氏が都合で欠席されたので私がピンチヒッターで講演した。

そして久保田会長の「アダムスキー哲学とUFO問題」と題する講演が始まった。この日は久保田先生ご自身の誕生日でもあり、最初から講演の一言一言に熱をこめられておられ、私達の胸にジンジンと響いてきた。参加者に、勇氣と激励そして信念を植えつけて下さった大講演であった。休憩時間に全員の記念写真をプロ写真家簡井徹氏にお願した。続いて質疑応答があり、久保田先生は非常に丁寧にわかりやすく答えて下さった。五時すぎ盛況のうちに大会は終了した。

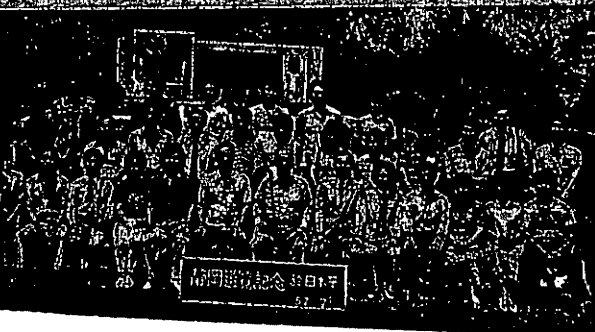
夕食会は久保田先生の誕生日記念パーティーとして開催し、こちらの方も六十名をこえるみなさんがご参加下さり、みなさんで久保田先生の誕生日を祝福し、これからも益々のご活躍をお祈りした。このあと二次会、三次会と続き、久しぶりに会った方々と大いに語り合った。

翌日は、静岡、清水方面に大型バスで全員和気あいあいと観光に出掛けた。最初の見学地、登呂遺跡では円盤を集団で目撃した。そして日本平、久能山東照宮、三保の羽衣の松、清水次郎長の墓や資料館などを見学し帰路についたが、掃りのバスにずつとついてきた二機の円盤を橋口眞市氏やその他の方が目撃するなど、この日は上空から熱い視線がそそがれていた日でもあり、生涯忘れることが出来ない素晴らしい思い出の日となった。

東海地区大会が大成功裡に終了しましたのも、久保田先生をはじめ、全国から参加されたみなさんのおかげであり、多くのご協力をいただいた方々に心よりお礼申し上げます。
(野口敏治)



▲大会当日、プロ写真家・静岡支部会員・簡井徹氏が本格的に撮影された会長のポートレート。



第1回 青森支部大会

● 八月一日(日)

● 青森県教育会館

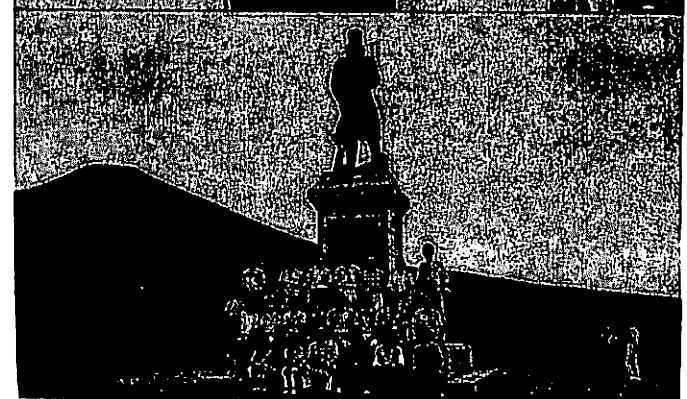
● 出席者 三十三名

大会前日の七月三十一日夕刻、三沢空

港に着かれた久保田先生と松村氏をお迎
えして、既に青森入りされていた十数名
の会員の皆様と共に田村嘉彦氏宅での歡
迎夕食会に臨み、再会を喜び合いながら
青森の夏の夜を楽しく過ごしました。

翌八月一日、第一回青森支部大会は秋
田、山形、仙台をはじめ関東方面からも
多数の会員の皆様の御出席を頂き、盛大
に開催されました。

会員による講演は、予定されていた鈴木
木武男氏が数日前より体調を崩されたた
め、急きよ六月より青森へ酪農実習に来



られていた広島市の近藤久美子さんと私
とで行われました。近藤さんの率直な素
晴らしい体験講演、そして私の拙い体験
講演が後に続きました。

その後、映画「アメリカ・メキシコ宇
宙考古学の旅」の上映、昼食をはさんで
久保田先生の「日本GAPの使命と宇宙
の法則について」と題する大変意義深い
講演が展開されました。地方支部大会に
出現する円盤のことや、GAPを暖かく
見守っているブラザーズたちのことをお
聞きし、彼らに協力し、彼らと共に歩ま
なければと強く思った次第です。

続いて記念撮影、自己紹介、質疑応答
とプログラムは順調に進み、盛況裡に閉
会となりました。

大会終了後は隣室にて夕食会を開催し、
久保田先生御持参のラテン音楽や沖縄民
謡のBGMの流れる中、愉快に友好を深
めました。

翌日は清水正氏の運転するマイクロバ
スに二十五名の参加者が乗り込み、八甲
田山へのドライブに出かけました。強風
のため予定していたロープウェーには乗
れませんでした。青森市と陸奥湾が一
望できる展望台や映画「八甲田山」で有
名な雷中行軍の遺跡跡等を回ることで
きました。

この後青森空港で十数名の会員の皆様
と共に、久保田先生、松村氏、松本氏を
乗せた飛行機を見送り、三日間にわたる
大会の幕を閉じました。

初めての大会ということではいろいろと
不手際がありました。多くの方々を支
えられ盛況に終えることができたこと
に感謝致します。お忙しい中をお越し頂
いた久保田先生、また遠方よりお越し頂
いた会員の皆様、無力な私をしっかりと支
奉仕的に御協力頂いた青森支部の皆様
に心から感謝致します。
(中根豊)



大阪支部大会

●九月十二日(日)

午前十時三十分～午後五時

●KBSびわ湖教育センター

●出席者 四十数名

久保田先生は、十一日夕刻山形支部代表の清水氏と一緒に新幹線で京都駅に着かれ、出迎えの会員と一年ぶりの再会をされました。今回の大会は都会の雑踏から離れ、滋賀県のびわ湖畔に会場を移し開催されました。その夜は同センター内で、地元の有志による夕食会に臨まれて楽しいひとときを過ごしました。

翌十二日、ついに大会の日がやって来ました。台風が近畿地方に接近し朝から暴風雨が吹きあられ参加者の出足が心配されましたが、会場には北は山形、東京、静岡、名古屋、南は岡山まで総勢四十数名の熱心な会員が出席して下さり、交通不便な所ながら、その熱心さには圧倒されました。長浜富春氏の軽快な司会で始まり、午前は、会員有志二名による講演があり、日ごろから考えていることや、研究実践の話など貴重な発表をされました。

午後の部は、久保田先生の講演が始まり、「宇宙哲学の本質とUFO問題の真相」というテーマを中心に話されました。宇宙哲学を学ぶ上で、滑らかな滑らかな生き方をし、常識豊かに、かつまじめに働き、宇宙の彼方に思いをはせることが大切であることや、あらゆる全てのことを誠実にやること、GAPの活動は常にブラザーズからの援助を受けているということ、あらゆる混乱に惑わされず、内部の印象に従えば、目の前が開けて良

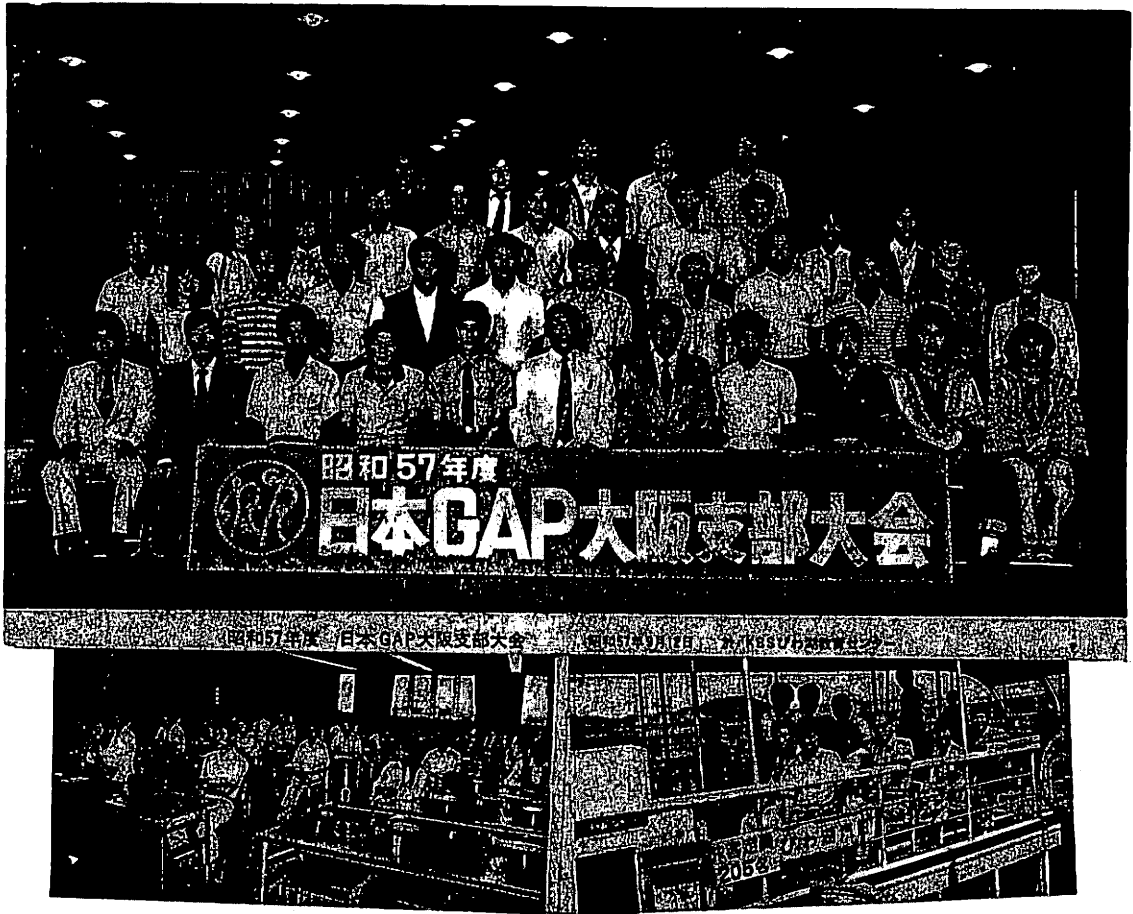
き運命が開けるといった内容でしたが、出席者の方々は、改めて日常どうすれば良いかということに貴重なお話として感じてもらえた様子でした。

休憩をはさんで、質疑応答があり、ふだん先生とは直接質問できないので、活発な質問がありました。その後昨年の、「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」の記録映画が上映され、盛況のうちに大会を終わりました。

夕食会は約三十五名の方が参加下さり、美しいびわ湖の夜景を眺めながら歓談に花が咲きました。その後二次会、三次会と流れて行きましたが、そんな中で会員の皆さんは先生と親しく接し、人間味あふれる先生の一面を見ることができ、またGAP活動を通じて真実を語り続けて来られたことに意義深いものを感じられていたようでした。

翌日は台風も去り、すばらしい天候に恵まれ、十六名ほどの方々とびわ湖周遊の観光に出かけました。晴れあがった空をながめたり、さわやかな涼風を胸一杯に吸い込み、GAPの旅行に見られる調和した雰囲気にも包まれたすばらしい一日でした。このあと夕食をとった後、京都駅発午後八時半の新幹線で、地元会員のお見送りする中を横須賀の千田氏と共に帰京されました。

おいで下さった久保田先生、そして各地の会員の皆様の求道精神に溢れた熱心さには心から敬服いたします。また当日平塚支部代表を始め役員の皆様ごくろう様でした。終わりに久保田会長のご健闘をお祈りいたします。(仲間秀樹)





素晴らしい大会 静岡での大会

(松山支部代表) 伊藤達夫

このたびは東京月例会と静岡の東海地区大会に御一緒させていただきました誠に光栄に存じます。静岡での前夜祭、当日の御講演と御誕生パーティー、そして翌日の市内観光における円盤の度重なる出現と、まったく三日間というものはかつてない充実した時間を過ごさせていただきましたことを感謝致します。

先生の御講演は宇宙哲学の真髄を述べられたもので深く感動いたしました。私はこれまで色々な大会に出席してまいりましたが、今回のお話ほど高揚感にひたり、GAP会員であることの喜びを感じたことはございません。そして今後どんなことがあっても先生との一体感を深めながら、この活動をやり抜く心がまえが出来ました。先生のお話には信念とかつてない自信とがうかがわれました。

翌日の市内観光では登呂遺跡と日本平のゴンドラの中との二箇所、それぞれ二機の円盤をこの目で確かめることができました。日本GAPが友星人に注目されていることは理屈ではなく、現実の身近な存在として、はっきりと自覚することができたことは、これからの私の活動の大きな支えとなることでしょう。そして今回の静岡大会を通じて万感胸に

迫るものがありました。「久保田先生の下で活動させていただいて本当によかった」と痛切に感じております。

GAP活動もいよいよ正念場ともいふべき時期を迎えました。この時期に私も一會員として先生の御指導のもとに正道をはずれることなく、宇宙的な向上の意欲と「知らせる運動」への積極的な協力とを両立させつつ努力してゆく所存であります。どうぞ今後ともよろしく御指導下さいませ。青森大会を控えて何かとお忙しいことと存じますが、お元気で御活躍されますようお祈り申し上げます。

静岡大会の翌日の三保海岸



いつまでも忘れられない GAPの交友

長野県 原 弘子

思えばGAPに入会させて頂いてからはや四年目、毎月のように月例会に出席しながらも、これという進歩もなく、吾作ら恥ずかしくもあり、又、先生に申しわけなく思っております。

而しGAPに入会させて頂いたことにより、どれ程私の内部に大きな世界が開け、又よろこびの日々が与えられたことか、言葉には表現できぬものがあります。できることならこのままGAPの方々と共にそつくり別世界へでも移動して暮らすことができたなら、なんぞ夢のような考えを抱いたことも幾度か、現実はそのどころか、今度はその人々とも遠ざかり、信州の山々をみつめながら暮らさねばならぬことになり、云い知れぬ淋しさを感じているこの頃です。

而し想念波動には距離はないという教えをいまいちと思っておこし、信州に在りながらも今まで同様、先生はじめGAPの方々と一体であり、同じ処に住んで居るのと信じ、静かな生活の中で初心にかえり、アダムスキー哲学を改めて一から学び取っていきたくと考えております。

東京月例会にも今まで同様にはできぬ乍らも、できるだけ出席していきたくと存じております。今後とも従来同様に御指導と御親愛を頂きますよう心から願っております。
(注)原さんは七月十九日に多年住みなれた東京より故郷の長野県諏訪市へ帰られました)

結婚祝賀パーティーへの御礼

名古屋市 斎藤泰文・津多子

先日は私どものために盛大な祝賀会を主催して下さいまして有難うございました。私たち二人そして双方の両親すべてが久保田先生はじめGAP有志の皆様方に感謝いたはっております。また翌三十一日にはわざわざ羽田までかけつけてお見送り下さいまして本当に有難うございました。実に恋極の極みです。

おかげさまでハワイでの行程もすべて順調に運び、正に天にささげたいような気持ちです。加えて素晴らしい写真をお送り下さいまして有難うございました。早速田舎の親せきへ送付したところで。

十三日には名古屋例会のあと、GAP有志(名古屋在住)が又祝賀パーティーを開いて下さいました。東京でのような熱狂と興奮はありませんでしたが、有志の皆様のご好意には感謝してもしきれないほどです。全く良いことづくめで、果たしてこれだけのことはつべたをつねりたような気持ちです。

このように暖かい処遇を受けた私たちが、今は何もおかせしできないようなものはありません。でもきつといつか近い将来何らかの形でおかせしできる日が来ると確信しております。

母船の中の自動車学校

東京 合田みゆき

本日は東京月例会で(八月七日)大変すばらしい御講義をありがとうございました。今日の月例会はものすごく次元が高く感じられました。七月四日の静岡・名古屋合同支部大会と夕食会のフィーリングにまさるともおとらぬほどの高次元だったと思います。七月と八月の大会のあとで雰囲気盛り上がりつつあったからでしょうか。まるでアダムスキー氏の著書の中にある「母船の中の自動車学校」の様な気が致しました。

実際、母船に乗らないまでも同じ様な事をやっているのではないかな?と思います。先生の「生命の科学」第八課の講義が行われている時は丁度マスターから母船内でよくせつ指導を受けられた事その要点を伝えておられる様に見えました。まるで最近母船に乗って来られたのではないかと思えるほどでした。そして雰囲気グーッと盛り上がりつつ来た所であまり次元が高くなりすぎない様に窓をあけたみたいなのに感じました。皆様も先生もすごいな?と思いました。特に先生のものすごい、ちよつと表現しにくい様なパワーと言うか、何と言いますか、本当にすごいと思いました。先生の行く所は進歩のみという感じがします。いづか私の家族をもよめて回りの人達がこのすばらしい法則や生き方に気付いてくれればと思っています。これからいっそもうGAPの一會員として皆様とともに居させて下さい。

〈予告〉今年度 地方支部大会 (その4)

	仙台山形合同支部大会	熊本支部大会
日時	11月14日(日) 午後1:00→5:00	11月21日(日) 午後1:00→5:00
会場	「東京第1ホテル仙台」内会議室。仙台市中央2丁目3-18。☎(0222)62-1355。仙台駅より正面の青葉通りをまっすぐ行き、右側。徒歩5分。	「法華(ほっけ)クラブ熊本」8F会議室。熊本市西通町20-1。☎(0963)22-5001。国鉄熊本駅前から市電「健軍」行き乗車、「慶徳校前」下車。すぐ隣。交通センターより徒歩6分。
会費	(希望者のみ全員記念写真代¥700。 グランドキャビネ判)	(希望者のみ全員記念写真代¥500)
プログラム	1:00 支部代表挨拶 笠原弘可(山形) 清水 正(山形) 1:10 講演 久保田八郎 「アダムスキーは不滅なり」 2:10 休憩・記念撮影 2:30 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会 ・座談会テーマは「想念観察」 「意識的意識」	1:00 支部代表挨拶 津野田俊行 1:10 会員体験講演 (有志2名) 2:00 講演 久保田八郎 「地球外生命と宇宙哲学」 3:30 記念写真撮影・休憩 3:45 全員自己紹介・質疑
夕食会	大会終了後6:00→8:00まで希望者による夕食会を別会場で開催(会場未定)。 会費 ¥4000	大会終了後6:00→8:00まで希望者による夕食会を神園山荘(同市長瀬町1-11)。 ☎(0963)80-2511で開催。
宿舎	会場の「東京第1ホテル仙台」をお世話します。 シングル ¥5100より ツイン ¥8800より	会場の「法華クラブ」内の部屋をお世話します。 シングル ¥5000 ツイン ¥8000
夕食会と宿泊の申込	夕食会出席と宿泊希望の方は1週間前までにハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して下記へお申込下さい。 〒980 仙台市東十番丁一番地 国鉄アパート1-18、笠原弘可 ☎ 0222-95-0725 笠原宛電話申込可	夕食会出席と宿泊希望の方は10月末までにハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して下記へお申込下さい。 〒860 熊本市二本木3-12-45、常通寺内、津野田俊行。 ☎(0963)52-3381
備考	晴天温暖ならば市内外の観光に出かけます。 ※11月の仙台・山形両支部の月例会は開催しますのでよろしく。	大会翌日は希望者のみで雄大な阿蘇山へドライブ。車は支部で準備。 ※11月の月例会は大会のため中止します。

円盤を見る

愛知県 上井恵美子

ジョージ・アダムスキー氏の「生命の科学」を読ませて頂きました。大変に興味深い高度な内容のもので驚きました。ジョージ・アダムスキー氏とはただ単なる円盤発見者に過ぎない人だとばかり思っていましたので、本当に驚きました。又何かなつかしい様な気持ちもします。不思議な事に、この本を購入した帰り道、疲れていたのでただ家に帰り着く事ばかり考えて居りましたところ、急に私の目の前の上空で最初は鳥かと思いましたが、鳥が飛ぶにしては高すぎるし速度は一定で

一定方向に向かって居る、テレビ等で時々放送していた楕円形の黒い物体です、これは円盤だと思いましたが、

続いてもう一機突然現れて——これは少し赤っぽい——一定の間隔を置いて同じ方向に向かって二機とも雲の中に消えてしまいました。カメラで写す時間は充分にあつたと思いましたが、円盤なんて考えなくてもいいのでした。カメラを持参していませんでした。とても残念でした。その時道を歩いていたのも私一人、誰か一緒にいたら、あれはUFOだ、と言ってくれたと思います。残念です。今度は「テレバシー」も読むつもりです。

委託販売で頑張ろう

(山形支部代表) 清水 正

毎回素晴らしい内容の「宇宙哲学とUFO」をありがとうございます。委託販売のほうも少しずつですが内容とともに伸びていっているように感じられます。今回の発行は四冊、このイメージはいつも完売です。この次あるいはもう少し先にはきつと売れると思います。こうした委託販売は始めよりも時期が過ぎればしだいに売れだすということをお屋の方が話しておられました。というのはGAPより先にはFという車関係の雑誌が委託販売され

たそうで、初めは五冊程度しか出ていなかったものが、今では一カ月五十冊の発行量なのだそうです。ですからこうした販売方法も忍耐が好結果を生むと思うのです。私が思うに「宇宙哲学とUFO」の内容は最高です、先生が言われているように、この道の興味を持たれたるかたは見逃すわけは無いはずで。しかし、山形県米沢の本屋の中の一軒ですから、そうした方が本誌にめぐりあうには少し時間があるだけなのだと思えます。

本屋の方からお聞きした話では、いつも同じ人が買うようになったことと、本誌のことでたずねて買ってゆかれる人がいたということでした。少しでも興味を持つ方が宇宙の法

則や今地球でどうなっているかといった真相にめぐめてくださることを願ってやみませんけれども、年四回発行される機関誌で、三カ月間十冊を見守るのもなかなか少ないように感じました。もしよかつたら他の都市の書店に委託の交渉をしてもいいと思っております。もう十冊から二十冊程度送っていただけませんか。やってみたいと思います。

今月(七月)は本当に活動的で充実した月になっています。久保田先生には静岡での大会では大変御苦労様でした。山形支部月例会変更は大変迷惑をおかけしました。おかげ様で忘れられない良い思い出が体験として残りました。内部の印象のもとに大会の前日、先生のもとにし

たがい歓迎夕食会に参加したのがとても良かったと思っております。あの日の晩は朝方まで全国の熱心な方々と話をしておりました。

さて山形支部月例会は七月十日に福祉文化センターで行われました。例会は素晴らしいフィーリングに満ちていました。参加者八名と少数ながら、プラザーズが真近にいるような感じがしました。皆さんもこの例会にとっても来たかったと言ひ、なかには飛んで来たかったという人もいました。よくわからないのですが素晴らしい日を過ごせました。いつも有難うございます。これからも益々ご活躍下さい。

大成功の大阪支部大会

京都府 仲間秀樹

日増しに夜空も澄んで空の雲も秋の気配をただよわせてきましたが、過日は大阪支部大会で親しく接することができまして大変有意義な三日間を送ることができまして感慨深く感じております。

お蔭様で先生をお迎えしての大会は大成功に終わったものと思っております。本当にありがとうございます。大会での先生への心づかいほどほど出来たか、又運営の点でどれほど協力できたかはよく知りませんが、こちらの方からはなんととうまくいったのではないかとこの感想を聞き、安心いたしました。

先生とは東京月例会や各地方支部大会でお会いし、そして私の個人的な相談のつて下さったりしてお話を聞いたり、アドバイスを頂いたりした中で、先生を理解しようと努力

してきましたが、特に今回は大会終了後の二次会やホテルの部屋でのお話をお聞きして、ますます身近に感じられました。生身の人間としてのフィーリングを感じました。また過去にあったGAP活動にかかわる諸問題についても理解が深まり、推測の域を出なかったことに対する疑問が解けました。

今回の大会では意見発表をさせて頂くという貴重な体験をいたしました。私のお話の中で「誠実さ」について力説されましたが、このことはとても意義深く心に残りました。何か忘れていたようなものが思い起こされ、このような感じはお話の中のことばかりでなく感じました。会場でのマイク設備や8ミリ上映に關してはスムーズに行かなくて申し訳ありませんでした。

GAPの大会や月例会は何かとそれにまつわる話題は多いのですが今回は台風の影響によって天候も思わしくありませんでしたが、すべてがうまくはこんだようです。三日間先生とご一緒できました。学おきべからもうまく限りの協力を実行してゆきたいと思っております。よろしくお願ひ致します。意をつくせませんがこのあたりで失礼いたします。毎日のご健康とご活躍をお祈りいたします。

もつと多くのコンタクトが必要

岡山県 前田昌利

おひさしぶりです。お元気でですか。前には色々ご迷惑をおかけ申しわけありません。自分のゴーマンさと恥知らずにはほどほどといふがつかる思いです。久保田先生みたいに絶対的信念と忍耐力はありますが、なんとかが毎日やっております。私にあって久保田先生を尊敬する点は「苦勞人」という点です。何故なら私があんまり苦勞してないからです。

私は久保田先生とか久保田会長とかあんまり言いたくありませんが、先生の實質的努力に対して敬意を表したいと思ひます。何故なら何も無い日本に宇宙的な(他の惑星の人類などを絶対的に信じて)事をよくもこまめでやってこられたものだと、感心するというか、おどろくほかありません。私など時々ジョージ・アダムスキー氏の事は本当なのだろうかと、いまだに思ったりすることがあります。

私としては自分の運命が良くなったりするとか悪くなったりするとかいうのはどうでもいい事なのですが、できれば何かある前にこの地球人類(皆さんが気づかれて、どうにかして少しても多くの方が助かってほしい)と思っております。それには私はいまだに多くのコンタクトが行われてよいと思ひます。アダムスキー氏くらいのコンタクトが日本でもおこつてもよいと思っております。(決して自分がそれにならうとは思っておりません)

ささやかながらではあります。

毎夜をながめて UFO を観測しております。幸い初めてたしかに、これは UFO だというのが見えました。又、写真などにとることがあれば、その時は先生も最大の協力をお願いいたします。

私は考えたのですが、この地球が下へ向かっているのなら何が必要かあるか。それは地球人の眼の目覚めだと思ひます。それには何が必要かと言へば、やはり他の惑星の人類存在を知らせるためのコンタクトが派山必要だと思ひます。科学的発達も良いと思われませんが、あまり緩慢なので、コンタクトも必要なのだと思います。そうすればしだいにみんなが宇宙へ目を向けてくれると思ひます。

最近感じていることは、私も宇宙の中にいるのだということです。それでは先生、あんまり書きませんでしたがお体に気をつけて、お元気で生活をお送り下さい。

調和と友愛の秋田支部

新潟県 星 富治夫

八月八日に新潟支部から平山、吉岡、岡田の各氏と私の四名で秋田支部の月例会へ参加しました。クルマを使つて日帰りで行つて、よくと計画をたて、朝五時に新潟を出発し、七時間かかって(途中の休憩も含めて)秋田市に到着しました。当日は天候に恵まれ、澄んだ日本海の海岸を左手に見ながら快適なドライブが実現しました。

秋田市内へ入ると各種の建物——秋田銀行本店の高層ビルやNHK秋田支局の鉄塔、県庁、野球場などが

目につきます。秋田支部の月例会の会場である秋田市文化会館は大通りに面した野球場の向かいに位置し、わかりやすい場所にあります。

例会では最初東京月例会における「生命の科学」解説講義の録音テープが流され、久保田先生の近況報告に参加各氏の自己紹介、ESPカードによるテレパシィテスト、座談会と続きます。その後場所を變えて参加者全員による夕食会が行われました。秋田へ来て感じたことは、秋田支部のメンバー各氏のあいだに調和した雰囲気できており、真剣な中にも終始笑いにみちたなごやかな状態が保たれていることでした。

盛岡支部を設立しよう

岩手県内のGAP会員の方にお願ひ。盛岡市に支部を設立したいのです。県内会員、特に同市在住の方で、ヤル気のある方、どうぞご連絡下さい。

〒077岩手県宮古市藤原三丁目五十一、大沢 悟

●お便りを下さい

近くの会員の方々、交友を共にしたいと思ひますので多数お便りを下さい。〒647和歌山県新宮市池田一——一四 小川 隆志
〒519三重県南牟婁郡紀宝町平尾井 松口幸之助

●おめでどう

千葉市の会員、中里信彦氏は去る十月二日、船橋市の宇野嘉代子さんとめでたくご結婚。御多幸を会員一同お祈りいたします。

行こう！GAPの愉快な旅に

—日本GAPが5回 海外研修旅行—

ニュージーランド オーストラリア 大自然の旅

★ 地上最後の楽園、信じられぬほど美しい島国
 ★ ニュージーランドの大自然と、南十字星輝く雄大な
 ★ オーストラリアへリラックした愉快な旅に出よう！
 ◎カメラと眼鏡を持って、来夏の8月6日に成田空港へ全員集合！

- 昭和58年8月6日(土) 成田発。15時間の長い飛行機の旅は楽しい。
- 7日(日) シドニー着。市内見学後一泊。(フリットクロフトと一家を招待して合同夕食会開催)
 - 8日(月) シドニーよりニュージーランドの美しい庭園の町クワイストチャーチへ。市内見学。
 - 9日(火) クワイストチャーチから専用バスでマウントクックへ。オプショナルで氷河見学。一泊。
 - 10日(水) マウントクックからクーンズタウンへ。湖畔の帯のような街で一泊。
 - 11日(木) クーンズタウンから氷河が作り出したフィヨルドの絶景シルネドゥサウメ行き(最大の見物)。
 - 12日(金) クーンズタウンからバスでクワイストチャーチへ。一泊。夜の散歩を楽しもう。
 - 13日(土) クワイストチャーチから飛行機でオークランド経由ロトルアへ。
 - 14日(日) マオリ村とワイトモ湖を見学。ロトルア
 - 15日(月) 地熱地帯とマオリ文化で有名なワカレワレワを見学後オークランドへ。
 - 16日(火) 午前中オークランド見学後、飛行機でシドニーへ。夜、シドニー発。
- 成田着。日本へ帰るのがイヤになる旅ナダ。
 [この方面行き旅行では最高の手作り旅。余程なりのり！]

イギリス以上にイギリス的なニュージーランドは「イギリスの姉妹国」の愛称をもつ、緑豊かな自然豊かな島国。2000万人の人口が誇れる。

空は南十字星。緑の草原と青い海が美しい。羊たちは草を食む。家屋はすべて純英国風。どこを見ても息が癒える。こんなきれいな国で暮らしたい女の心を満たしてあげるわ！

★ 旅行期間
 ★ 参加費用
 ★ 定員 40名

昭和58年8月6日から16日まで計11日間
 ￥498,000 (ローン可能、最長24回払い)
 1ヵ月￥23,000位ずつ払えばいい

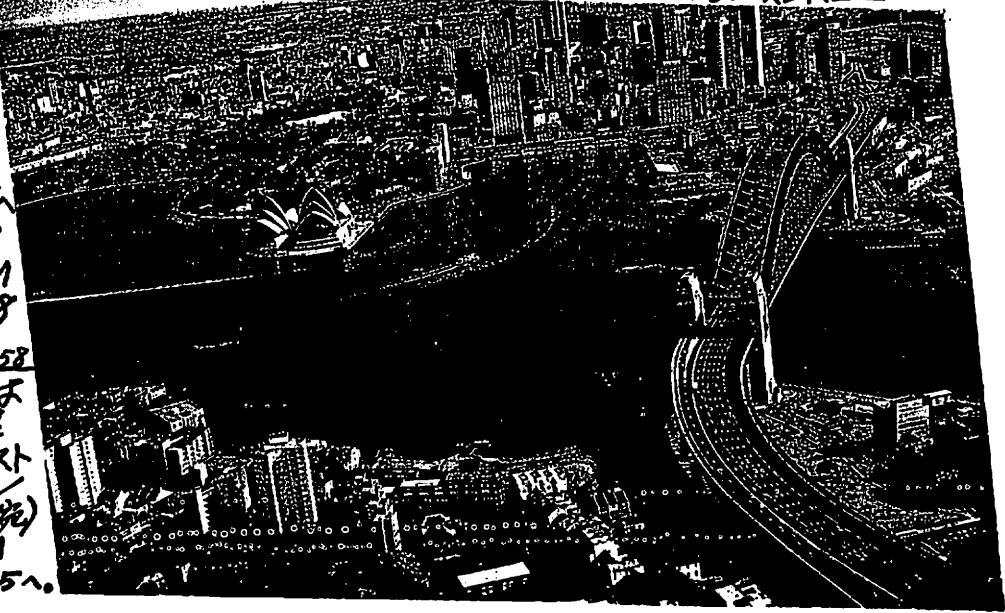
世界三大美港の一つ、シドニー

GAP会員の方でも参加できます。

詳細はパンフレットにあり。下記、ハガキで申しもう。

〒133 東京都江戸川区本一色365-818
 日本GAP Tel. 631-0758

旅行のお問合せは
 〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイストビル2F、ワールドビストラル社、田中正(株)
 Tel. 03(499)2461
 理由は0462-63-0615へ。



日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2:00→6:00 ※11月の第3土曜日(20日)に変更。58年1月は第2土曜日(8日)に変更。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。	¥ 300	2:00→3:00会員による体験講演。 3:00→4:00久保田会長の「生命の科学」 講義と近況報告、テレバシー練習、休憩。 4:30→6:00自己紹介、意見発表、質疑応答。 ※58年度は「宇宙哲学」を講義の予定。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎(388)7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先=平塚和義 ☎06-436-3478	300	テキストとして「テレバシー」「生命の科学」(文久杏林刊)を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレバシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	新潟駅前「青年の家」☎0252-44-6766 連絡先=足立亘宏 ☎0252-62-0968	200	テキストとして「テレバシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレバシー練習、座談会。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	熊本市二本木3-12-45 常通寺 連絡先=津野田俊行 ☎0963-52-3381	200	テキストとして「生命の科学」「テレバシー」(文久杏林刊)を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレバシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30 ※12月は第4日曜日(26日)、58年1月は第3日曜日(16日)に変更。	名古屋市中区古沢町7-1「名古屋市民会館」特別会議室。☎(052)331-2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先=林 国直 ☎0586-45-6468 武田充弘 ☎052-622-7339	300	テキストとして「生命の科学」「テレバシー」(宇宙哲学)を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表、テレバシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先=笠原弘可 ☎0222-95-0725	200	東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※58年1月のみは第2日曜(9日)に変更。	山形市小白川町「社会福祉文化センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236-42-5181 連絡先=清水 正 ☎0238-21-5441 ※11月のみは山形市立図書館 ☎236-24-0822	200	テキストとして「テレバシー」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、テレバシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30 ※58年1月のみは第2日曜(9日)に変更。	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011-241-9171 連絡先=伊藤重信 ☎011-742-0192	300	テキストとして「テレバシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会、テレバシー練習、自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※58年1月のみは第3日曜(16日)に変更。	ブラザー静岡ビル8階(静岡駅北口すぐ)静岡市御幸町9-1 連絡先=野口敏治 ☎0542-86-7729	200	テキストとして「テレバシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:00 ※12月の月例会は第3日曜日(19日)に変更。	※11月より下記の場所に会場を変更。 旭川市6条14丁目「大成市民センター」(ニチイ旭川店)☎0166-24-1585 連絡先=石川公一 ☎0166-51-5699		東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「生命の科学」を持参。質疑応答(旭川支部独自で直接会長から回答を得る)別会場にて2次会。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→4:30	松山市民会館会議室 連絡先=伊藤達夫 ☎0898-22-3060 ※11月のみは広島市平和公園となりの中国新聞社7F会議室。	200	テキストとして「生命の科学」「テレバシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。質疑応答、座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2:00→6:00	群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。 連絡先=服部 久 ☎0276-63-2163・2771	200	東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開、座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」 教養室(2) ☎0177-34-0163 連絡先=中根 豊 ☎01756-3-3386		テキストとして「生命の科学」「テレバシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレバシー練習、研究発表、座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00	沖縄県宜野湾市興業原80、地下算数教室 ☎0989-7-6478 連絡先=新里毅雄 ☎09893-8-2511	500	テキストとして「生命の科学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレバシーの研究報告。自己紹介。座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:30→5:00 ※11月、12月、1月は日時、会場を変更。詳細開会のこと。	秋田市山王7-3-1「秋田市民文化会館」和室会議室。☎0188-65-1191 連絡先=佐藤春雄 ☎01889-2-3284	200	テキストとして「生命の科学」「テレバシー」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレバシー練習。座談会。
(関東支部改称) 神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00 ※11月のみ第1日曜日(7日)に変更。	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・京浜線・労働会館前。 連絡先=千田光明 ☎0468-36-7198	400	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表、座談会等。

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

No.75 主要記事「土星旅行記」(1) G.アダムスキー / 「イメーシ法で起こる奇跡」高梨和明 / 「太陽と神々の園讃歌」久保田八郎 / 「さらば空飛ぶ円盤」(3) 第3章宇宙船と重力(続き)・第4章最近の科学の発達 / その他。

No.76 主要記事「土星旅行記」(2) G.アダムスキー / 1981年度「日本GAP総会講演集」伊藤重信・山口 謙・武田充弘・足立直彦 / 総会の日に UFO を目撃」伊藤重信・仲岡秀樹・横口真市・松村芳之 / 「さらば空飛ぶ円盤」(4) G.アダムスキー 第5章わが太陽系内の変化・第6章異星人の象形文字 / その他。

No.77 主要記事「金星には偉大な文明がある!?」 / 「宇宙と愛について」(1) 久保田八郎 / 「反磁場による超推進法」W.ラボート / 「さらば空飛ぶ円盤」(5) 第7章 疑問人に対する回答・第8章 デマとデマ流し屋 / その他。

No.78 主要記事「火星に生命が存在」 / 「私は異星人から何を学んだか」G.アダムスキー / 札幌市でアダムスキー型円盤目撃さる / アダムスキー型円盤、旭川に出現 / 沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る / 「宇宙と愛について(2)」 / 「波よ静まれ、そして風も」久保田八郎

※No.69より71までは各¥500。No.72から¥700。※バックナンバーに限り送料は不要

「生命の科学」解説講義録音テープ

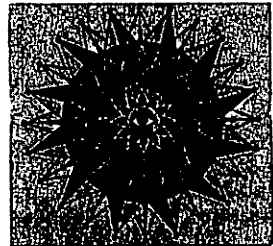
今年度東京月例会において

1月より毎月1課ずつ久保田会長が解説される貴重な録音テープ。アダムスキー哲学の理解を深める上で重要な資料となるものです。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。

テープ1本(90分) ¥1000 千200

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(57年1月より毎月録音。1課より在庫)。千430 静岡県浜松市寺島町221、小島園弘

TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065



① オーソン肖像写真 ② シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(カラーネ判) (カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判) (カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500千120 ②¥200千60—一括注文の場合千120

③ 想念観察手帖

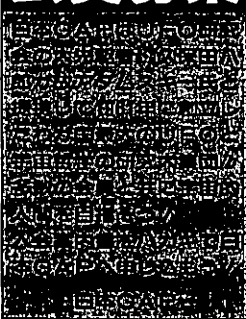
アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシッ的な人間になるための必需品。1冊で1ヵ月分の記入が可能。¥500千120

④ テレパシー練習用ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美風箱入り。¥500千120

日本GAP

会員募集



★今年度は全国各地方支部大会が活発に展開しましたが、十一月十四日に仙台で山形支部と合同支部大会、二十一日に熊本支部大会が開催されます。ふるってご出席下さい。来年度三月二十日(連休の初日)には松山支部が来年度のトップを切って大会を開催します。詳細は次号を。★沖縄支部代表は八月より新里義雄氏(沖縄市)になりました。その他詳細は本号四十四頁の「全国月例研究会案内」をご覧ください。

編集後記

それと各地地方支部月例会日時会場の臨時変更がありますので同案内にご注意下さい。★東京月例会は今年十一月のみ第一土曜日から第三土曜日(二十日)に変更しますので、お間違いないように。五十八年一月の月例会も第二土曜日(八日)とし、終了後は別会場で開催の新年パーティーを開催予定です。会費二五〇円程度。賞品持ち寄りの楽しい抽選もあります。多数ご参加下さい。★前号で寄付募集を個々に領収書をお送り御喜捨を頂きました。個々に領収書をお送りしていますが、あらためて厚く御礼を申し上げます。寄付者名簿は掲載しませんが当方にファイルしてあります。コピーの必要の方はハガキでお申し出下さい。★本誌は発行ごとに約八十万円を要します。会員数減少の折から今後とも資金確保のため応分のご寄付をたまわれば幸いです。★本誌は約四十名の会員の方により全国の主要書店に卸された店頭で販売されています。地方会員の方で地元のお店卸しに協力の意志ある方は編者宛に一報下さい。説明書をお送りします。

★アメリカ・ピスタのアダムスキー財団はGAPの「本部」ではありません。また日本GAPがその「支部」でもありません。両者は全く別な集団です。むかしアダムスキーが創設したGAPの名称を二十数年間も使用して活動を続行してきたのは日本GAPとアダムスキーGAPだけです。ベルギーGAPは主宰者のフリットクロフト氏夫妻が去る五月にオーストラリアのアリスベーンに移住されて解散しました。以上の事実を明確にしておきます。(K)

日本GAP機関誌・季刊 冬季号
宇宙哲学とUFO 79号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色町35-1118
TEL.(03)651-0958
振替東京4-35912
一九八二年十月二十日発行
定価七〇〇円・送料2,000円